

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第42集

原・丸山

上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告

—IX—

1985

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

はら まる やま
原 丸 山

上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告

—IX—

1985

序

上越新幹線は、東京・新潟間を2時間程で結ぶ鉄道として計画され、東北新幹線と共に既に大宮駅からの暫定始発が実施されております。

上越新幹線、および新交通システム建設に伴い、伊奈町所在の原・丸山遺跡の取扱いについて、埼玉県教育委員会、日本鉄道建設公団東新京幹線建設局と慎重な協議を重ねた結果、やむを得ず発掘調査を実施し、記録保存することとなりました。

発掘調査は日本鉄道建設公団の依託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施いたしました。

本書はその発掘調査報告書であります。これらの資料が広く各位に活用され、教育、学術、文化の一助となれば望外の喜びであります。

本書の刊行に至るまで多大の御協力、御支援をいただきました、日本鉄道建設公団、伊奈町教育委員会、並びに地元関係者の方々に改めて深く感謝の意を表します。

昭和60年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長井五郎

例　　言

1. 本所は上越新幹線建設にかかる、北足立郡伊奈町羽貫に所在する原遺跡（委保第5の1278号）と、同町丸山に所在する丸山遺跡（委保第5の1276号）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、埼玉県教育局文化財保護課が調整し、日本鉄道建設公団の依託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施したものである。
3. 原遺跡は2次にわたって調査された。第1次は昭和56年4月1日より昭和57年3月31日まで、第2次は昭和58年1月4日より同年3月31日まで調査され、第1次調査を田中英司、鈴木秀雄、星間孝志、細田勝が、第2次調査は浜野一重、細田勝が担当した。丸山遺跡は、昭和56年4月1日より同年10月31日まで調査され、坂野和信、山本頼、小暮広史が担当した。
4. 出土品の整理及び図の作成は細田があたり、坂野和信、山本頼、星間孝志、金子直行、酒井和子の協力があった。
5. 発掘調査における写真は鈴木、星間、浜野が、遺物写真は細田が撮影した。なお、土器展開写真は小川忠博氏の撮影による。
6. 本書の執筆はV、VI-1を山本が、他は細田が担当した。
7. 本書の編集は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査研究第4課職員があたり、中島利治が監修した。

凡 例

1. 本書に掲載した挿図類の縮尺は原則として次の通りである。

遺構 住居跡 ($1/80$) 土壙 ($1/80$) 炭焼窯 ($1/80$)

遺物 土器実測図 ($1/8$) 土器拓影図 ($1/8$) 石器実測図 ($1/2$ ・ $1/8$)

2. 図版中に使用したスクリーントーンの概要は以下の通りである。

炉体土器、及び床面直上の土器

灰層、及び土器の黒漆塗布部分

焼土、及び土器、漆器の赤色塗彩部分

土器展開図の縄文施文部分

土器の隆帯剥落部分

3. 遺構全測図の記号は、S I = 住居跡 S K = 土壙 S D = 溝 S C = 炭窯を示す。

目 次

| | |
|-----------------|-----|
| 序 | |
| 例言 | |
| I 調査の概要 | 1 |
| 1 原遺跡調査の経過 | 1 |
| 2 丸山遺跡調査の経過 | 1 |
| II 遺跡の立地と環境 | 4 |
| III 原遺跡の概観 | 7 |
| IV 原遺跡・遺構と出土遺物 | 9 |
| 1 住居跡 | 9 |
| 2 炭焼窯 | 77 |
| 3 土 壤 | 79 |
| 4 井戸跡 | 83 |
| 5 構 | 84 |
| 6 土製品 | 86 |
| 7 石 器 | 86 |
| V 丸山遺跡の概観 | 95 |
| VI 丸山遺跡・遺構と出土遺物 | 99 |
| 1 住居跡 | 99 |
| 2 土 壤 | 101 |
| 3 溝 | 107 |
| 4 グリット出土土器 | 108 |
| 5 グリット出土石器 | 123 |
| VII 結 語 | 129 |

挿 図 目 次

| | | | |
|----------------------|----|------------------------|----|
| 第1図 遺跡の位置と座標原点 | 4 | 第35図 第8号住居跡 | 42 |
| 第2図 周辺の遺跡分布図 | 5 | 第36図 第8号住居炉跡 | 43 |
| 第3図 基準土層 | 7 | 第37図 第8号住居跡出土土器（1）（折込） | |
| 第4図 遺跡周辺の地形図 | 8 | 第38図 第8号住居跡出土土器（2） | 45 |
| 第5図 原遺跡遺構全体図（折込） | | 第39図 第8号住居跡出土土器（3） | 46 |
| 第6図 第1号住居跡 | 9 | 第40図 第9号住居跡 | 48 |
| 第7図 第1号住居炉跡 | 10 | 第41図 第9号住居跡出土土器（1） | 50 |
| 第8図 第1号住居跡出土土器（1） | 11 | 第42図 第9号住居跡出土土器（2） | 51 |
| 第9図 第1号住居跡出土土器（2） | 12 | 第43図 第9号住居跡出土土器（3） | 52 |
| 第10図 第2号住居跡 | 13 | 第44図 第9号住居跡出土土器（4） | 53 |
| 第11図 第2号住居跡出土土器（1） | 14 | 第45図 第10号住居跡 | 54 |
| 第12図 第2号住居跡出土土器（2） | 16 | 第46図 第10号住居跡出土土器（1） | 55 |
| 第13図 第2号住居跡出土土器（3） | 17 | 第47図 第10号住居跡出土土器（2） | 56 |
| 第14図 第3号住居跡 | 18 | 第48図 第11号住居跡 | 57 |
| 第15図 第3号住居炉跡 | 19 | 第49図 第11号住居跡出土土器（1） | 58 |
| 第16図 第3号住居跡出土土器（1） | 20 | 第50図 第11号住居跡出土土器（2） | 59 |
| 第17図 第3号住居跡出土土器（2） | 21 | 第51図 第12号住居跡 | 60 |
| 第18図 第4号住居炉跡 | 22 | 第52図 第12号住居跡出土土器 | 61 |
| 第19図 第4号住居跡（折込） | | 第53図 第13号住居跡 | 62 |
| 第20図 第4号住居跡出土土器（1） | 25 | 第54図 第13号住居炉跡 | 63 |
| 第21図 第4号住居跡出土土器（2） | 26 | 第55図 第13号住居跡出土土器（1） | 66 |
| 第22図 第4号住居跡出土土器（3） | 27 | 第56図 第13号住居跡出土土器（2） | 67 |
| 第23図 第4号住居跡出土土器（4） | 28 | 第57図 第13号住居跡出土土器（3） | 68 |
| 第24図 第4号住居跡出土土器（5） | 29 | 第58図 第13号住居跡出土土器（4） | 69 |
| 第25図 第5号住居跡 | 30 | 第59図 第13号住居跡出土土器（5） | 70 |
| 第26図 第5号住居炉跡 | 31 | 第60図 第13号住居跡出土土器（6） | 71 |
| 第27図 第5号住居跡出土土器 | 32 | 第61図 第13号住居跡出土土器（7） | 72 |
| 第28図 第6号住居跡 | 33 | 第62図 第14号住居跡 | 73 |
| 第29図 第6号住居炉跡 | 34 | 第63図 第14号住居炉跡 | 74 |
| 第30図 第5・6号住居跡出土土器（1） | 35 | 第64図 第14号住居跡出土土器（1） | 75 |
| 第31図 第6号住居跡出土土器（2） | 37 | 第65図 第14号住居跡出土土器（2） | 76 |
| 第32図 第6号住居跡出土土器（3） | 38 | 第66図 第1・2・3号炭窯（折込） | |
| 第33図 第7号住居跡 | 40 | 第67図 炭窯土層、エレベーション | 78 |
| 第34図 第7号住居跡出土土器 | 41 | 第68図 土壌 | 80 |

| | | | | | |
|------|---------------|-----|-------|-----------------|-----|
| 第69図 | 土壤 | 81 | 第89図 | 第1号住居跡カマド | 101 |
| 第70図 | 土壤出土土器 | 82 | 第90図 | 土壤 | 104 |
| 第71図 | 井戸跡 | 83 | 第91図 | 土壤 | 105 |
| 第72図 | 井戸跡出土遺物 | 84 | 第92図 | 土壤 | 106 |
| 第73図 | 第4号溝 | 85 | 第93図 | グリッド出土土器(1) | 113 |
| 第74図 | 土製品 | 86 | 第94図 | グリッド出土土器(2) | 114 |
| 第75図 | 石器(1)石鎌 | 87 | 第95図 | グリッド出土土器(3) | 115 |
| 第76図 | 石器(2) | 90 | 第96図 | グリッド出土土器(4) | 116 |
| 第77図 | 石器(3) | 91 | 第97図 | グリッド出土土器(5) | 117 |
| 第78図 | 石器(4) | 92 | 第98図 | グリッド出土土器(6) | 118 |
| 第79図 | 石器(5) | 93 | 第99図 | グリッド出土土器(7) | 119 |
| 第80図 | 石器(6) | 94 | 第100図 | グリッド出土土器(8) | 120 |
| 第81図 | 丸山遺跡グリッド配列図 | 95 | 第101図 | グリッド出土土器(9) | 121 |
| 第82図 | 周辺の地形図 | 96 | 第102図 | グリッド出土土器(10) | 122 |
| 第83図 | A～C区遺構全体図(折込) | | 第103図 | グリッド出土石器(1)石鎌 | 123 |
| 第84図 | C区遺構全体図 | 97 | 第104図 | グリッド出土石器(2) | 125 |
| 第85図 | 基準土層 | 97 | 第105図 | 漆器実測図 | 126 |
| 第86図 | 低地部土層堆積図 | 98 | 第106図 | グリッド出土焰烙・陶磁器実測図 | 128 |
| 第87図 | 第1号住居跡出土遺物 | 99 | 第107図 | 原遺跡出土土器変遷図 | 130 |
| 第88図 | 第1号住居跡 | 100 | 第108図 | 原遺跡出土土器変遷図 | 131 |

図版目次

| | | |
|-----|---------------|--------------------|
| 図版1 | 原遺跡第1号住居跡(上) | 原遺跡1～3第2号炭窯(下) |
| | 原遺跡第2号住居跡(下) | 図版8 原遺跡炉全土器出土状況(上) |
| 図版2 | 原遺跡第3号住居跡(上) | 図版9 丸山遺跡A区全景(上) |
| | 原遺跡第4号住居跡(下) | 丸山遺跡C—I、Ⅱ区全景(下) |
| 図版3 | 原遺跡第5号住居跡(上) | 図版10 丸山遺跡C—I区層序(下) |
| | 原遺跡第6号住居跡(下) | 丸山遺跡A区1～6号溝(上) |
| 図版4 | 原遺跡第7号住居跡(上) | 図版11 丸山遺跡C区号溝(下) |
| | 原遺跡第8号住居跡(下) | 図版12 丸山遺跡第1号住居跡(上) |
| 図版5 | 原遺跡第9号住居跡(上) | 丸山遺跡第1号住居跡・竈(下) |
| | 原遺跡第11号住居跡(下) | 図版13 原遺跡出土土器 |
| 図版6 | 原遺跡第12号住居跡(上) | 図版14 原遺跡出土土器 |
| | 原遺跡第13号住居跡(下) | 図版15 原遺跡出土土器 |
| 図版7 | 原遺跡第14号住居跡(上) | |

- 図版16 原遺跡出土土器展開写真
図版17 原遺跡出土土製品（上）
原遺跡出土石器（下）
図版18 原遺跡出土石器（上）
原遺跡出土石器（下）
図版19 丸山遺跡出土石器（上）

- 丸山遺跡出土石器（下）
図版20 丸山遺跡出土陶磁器（表）（上）
丸山遺跡出土陶磁器（裏）（下）
表
第1表 石器一覧表 88
第2表 石器一覧表 124

I 調査の概要

1 原遺跡の調査経過（日誌抄）

1981年〈4月〉県道を挟んで南側部分の表土剥ぎ、遺構確認作業を行った。杉林のため擾乱が多くあった。遺物は調査区中央部から南側にかけて多く出土していた。遺構の分布は中央に空白部をもち、東側に連なる環状集落の可能性が指摘された。

〈5月〉 第1～8号住居跡の調査に入る。遺構は南側から順次調査を開始し、第2～3号住居跡の調査を終了した。

〈6月〉 第1、5～8号住居跡の調査を行った。4号住居跡は掘り込みも深く、遺物量も豊富であった。第1、5～8号住居跡完掘後、第9～11号住居跡の調査に入る。

〈7月〉 第9～11号住居跡の調査に入る。第10号住居跡の炉跡のみが検出された。住居跡と併行して、土壌の調査も行った。遺構の調査、図取り、写真撮影終了後、航空写真撮影を行なった。

1982年〈1月〉 県道を挟んだ北側の調査に入る。調査の都合上32～42グリッドの調査を先行した。表土剥ぎ後直ちに遺構確認に移る。溝9条、住居跡1軒の調査を終了する。

〈2月〉 第42～50グリッドの調査に入る。表土剥ぎ後、遺構確認に移る。前月に調査された炭焼窯の主要部分を調査し、3基重複していることが確認された。溝3条も同時に調査し、図面、写真撮影を終了した。

1983年〈1月〉 前年度調査の県道の南側部分から、更に西側の調査が行われ、前回調査の遺構を確認すると共に、更に住居跡等の広がりを検出した。

〈2月〉 第13、14号住居跡、第4～6号溝の調査を行った。13号住居跡は2軒の重複であることが確認された。切り合い関係を考慮しながら慎重に調査を進めた。14号住居跡は擾乱が著しく、炉体土器も大半が失われており、状態は良好とは言えなかった。

〈3月〉 住居跡の調査終了後、溝、土壌の調査を行う。実測終了後、写真撮影を行い、原遺跡の調査を終了した。

2 丸山遺跡の調査経過

〈4月〉 A区の表土剥ぎ、遺構確認を行う。13グリッド以北を中心に調査が進められ、第1号住居跡、第1、2号溝、土壌を確認。溝、住居跡の調査に入る。

〈5月〉 第1号住居跡はカマドを除きほぼ終了した。耕作による擾乱が著しく、壁に不明瞭な部分が多くあった。第1～7号土壌の調査を終了した。B—I区、C—V区の表土剥ぎ、遺構確認に入る。B—I区はローム面が落ち込んでおり、C—V区にかけて、泥炭層の存在が推定された。

〈6月〉 第1号住居跡の調査を終了し、溝、土壌の実測、レベリングを実施。引き続き14～16グリッドの調査に入る。第1、2号溝の続部分、土壌の調査に移る。B—I区は落ち込み部の黒色土を掘り下げる。C—V区は遺構は検出されず、遺物も少量であった。航空写真撮影を実施しC

—V区の調査を終了した。C—I、N区の調査に移る。低地部分にあたり、表土剥ぎ後にテント架設を行なう。

〈7月〉 A区は溝の調査を継続する。B区は黒色土の掘り下げを継続すると共に台地平坦部の溝の調査に入る。C—I区は溝の調査、及び全体の掘り下げを行なう。溝覆土内には流木が散布していた。C—I区は全体の掘り下げ、及びC—I区からの溝の続きを調査する。新たにC—I、II区の調査に移り、試掘を実施する。

〈8月〉 A区は溝、土壤を完掘し、実測、写真撮影を行い、調査を終了した。B—I、II区は落ち込み部分、平坦部の溝、土壤の調査を継続する。B—I区は調査をほぼ終了した。C—I、II区は掘り下げを継続、遺物の出土は散発的で、部分的にローム地山が現われ、発達した泥炭層をもたない可能性が考えられた。C—I区は第5、6層の掘り下げに移り、遺物の出土も少なくなってきた。溝は調査を終了した。C—I区は溝の調査を終了し、更に掘り下げを実施した。

〈9月〉 B区は落ち込み部、溝、土壤の調査を終了した。C—I、II、III区は引き続き掘り下げを進めた。C—I区は第6層まで完掘した。テントを撤去し、C—I、N区の航空写真撮影を実施し、地形測量、写真撮影を行い、調査を終了した。

〈10月〉 B—I、II区はローム面までの調査を完了し、テントを撤去。航空写真撮影後、地形測量、写真撮影を実施した。調査は全て終了し、器材を撤去。10月31日をもって丸山遺跡の調査を全て終了した。

発掘調査の組織

1 発掘（昭和56年度）

| | | | |
|-------|------------------|----------|-------|
| 主 体 者 | (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | 理 事 長 | 長井 五郎 |
| | | 副 理 事 長 | 沼尻 和也 |
| | | 常 務 理 事 | 渡辺 澄夫 |
| 庶務管理 | (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | 管 理 部 長 | 伊藤 悅夫 |
| | | | 関野 栄一 |
| | | | 福田 浩 |
| | | | 本庄 朗人 |
| 発 挖 | (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団 | 調査研究 部長 | 横川 好富 |
| | | 調査研究第2課長 | 小久保 敏 |
| | | | 坂野 和信 |
| | | | 田中 英司 |
| | | | 鈴木 秀雄 |
| | | | 星間 孝志 |
| | | | 山本 順 |
| | | | 細田 勝 |
| | | | 小暮 広史 |

2 発掘（昭和57年度）

主体者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

庶務經理 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

発掘 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

| | |
|----------|-------|
| 理事長 | 長井 五郎 |
| 副理事長 | 岩上 進 |
| 常務理事 | 渡辺 澄夫 |
| 管理部長 | 佐野 長二 |
| | 関野 栄一 |
| | 福田 浩 |
| | 本庄 朗人 |
| | 江田 和美 |
| 調査研究部長 | 横川 好富 |
| 調査研究副部長 | 小川 良祐 |
| 調査研究第2課長 | 小久保 徹 |
| | 浜野 一重 |
| | 細田 勝 |

3 整理（昭和59年度）

主体者 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

庶務經理 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

整理 (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団

| | |
|----------|-------|
| 理事長 | 長井 五郎 |
| 副理事長 | 岩上 進 |
| 常務理事 | 石川 正美 |
| 管理部長 | 小宮 秀男 |
| | 関野 栄一 |
| | 江田 和美 |
| | 福田 浩 |
| | 本庄 朗人 |
| 調査研究部長 | 中島 利治 |
| 調査研究副部長 | 小川 良祐 |
| 調査研究第4課長 | 高橋 一夫 |
| | 細田 勝 |

II 遺跡の立地と環境

原遺跡・丸山遺跡は、それぞれ埼玉県北足立郡伊奈町大字大針字原 671—1 番地他、同町大字小室字丸山 908 番地他に存在する。両遺跡は南北にのびる伊奈町の南、北側にあたり、国鉄上尾駅からは、直線距離にして各々 4.3km、3.2km を測る。

両遺跡は大宮台地上に位置する。大宮台地は鴻巣市付近から、川口、鳩ヶ谷市周辺まで南北に連なる洪積台地で、荒川、中川によって、武藏野台地、下総台地と分断されている。台地は関東構造盆地運動によって、東西断面形は台地西側が高く、東はゆるやかに傾斜している。標高は 10~20m で、平坦な台地面をもち、南側では河川によって樹枝状谷が形成されている。

大宮台地は西から鶴川、芝川、綾瀬川、元荒川等の南東流する河川によって浸食され、指扇、大和田、片柳、鳩ヶ谷、岩槻、慈恩寺の台支台に分けられている。各支台は浸食作用によって南側に裾括りの形状を示している。

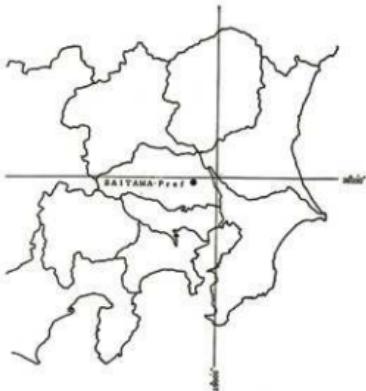
原遺跡・丸山遺跡は大和田片柳支台上に位置する。原遺跡は綾瀬川の右岸に位置する。台地は綾瀬川からのびる小支谷に浸食され、先端部が弧状にゆるく張り出している。標高は 15m 前後を測り水田面との比高差は 4~5 m である。丸山遺跡は大和田片柳支台から分立した小室支台に位置する。台地は綾瀬川に南東流する沼落川によって開拓され、遺跡は台地上から低湿地に括りをもつていて標高は 13m 前後、水田面との比高差は 2~3 m を測る。

原、丸山遺跡を始めとして、伊奈町、及び周辺地域には縄文時代の遺跡が数多く存在し、調査例も多い。以下、その概略を述べることにする。

縄文時代早期は遺跡数、遺構とも検出例が少ない。上越新幹線関連の向原遺跡でまとまった資料が出土しており、いずれ詳細が報告される予定である。

縄文時代前期以降、遺跡は徐々に増加してゆく。この時期には貝塚の形成も盛んとなり、元荒川、綾瀬川に面した台地上は貝塚の密集地を呈する。綾瀬川左岸に位置する関山貝塚は、関山式土器の標式遺跡として学史的にも著名であるが、貝類相は、ハイガイ、マガキ主体で、鹹水の強い影響を示唆している。

黒浜~諸磯式期にも貝塚を伴う遺跡が多いが、確実な報告例が少ない。貝類相はヤマトシジミ主体へと変化するようである。坂堂、綾瀬、小貝戸等の貝塚が存在している。



第1図 遺跡の位置と座標原点



- | | | | | | | |
|---------|----------|------------|-----------|------------|-----------|-----|
| 1 向原遺跡 | 2 相野谷遺跡 | 3 八幡谷遺跡 | 4 原遺跡 | 5 菅谷北城 | 6 北遺跡 | 7 上 |
| 聞戸貝塚 | 8 織姫貝塚 | 9 茶屋遺跡 | 10 新屋敷遺跡 | 11 山遺跡 | 12 タカラ山遺跡 | 13 |
| 小貝戸貝塚 | 14 上新田遺跡 | 15 氷川神社裏遺跡 | 16 十三塚古墳群 | 17 城遺跡 | 18 小 | |
| 室天神前遺跡 | 19 西浦遺跡 | 20 久保山遺跡 | 21 丸山遺跡 | 22 志久遺跡 | 23 関山貝塚 | |
| 24 坂堂貝塚 | 25 大山遺跡 | 26 赤羽遺跡 | 27 伊奈氏屋敷跡 | 28 十三番耕地遺跡 | 29 | |
| 屋山台遺跡 | | | | | | |

第2図 周辺の遺跡分布

縄文時代中期には遺跡数が飛躍的に増加する。上越新幹線関係で調査された北遺跡は、原遺跡と谷を隔てた台地上に對峙し、勝坂式から加曾利EⅡ期の住居跡75軒、土壙250余基が検出され、台地先端部では先土器時代の遺物も検出されている。ほぼ同時期に属すると考えられる原遺跡と集落が同時に営まれた可能性も考えられ、集落研究への一視点を投じるものと思われる。中期では他に小室天神前遺跡（田中他1981）、志久遺跡（笠森他1976）、久保山遺跡（大塚他1984）等が調査されている。北遺跡に比べ遺跡の規模は小さい。志久遺跡は加曾利EⅡ～Ⅲ式期の住居跡10軒、称名寺式期の住居跡2軒、土壙10基が調査されている。縄文中期の遺跡は中期後半から後期へ過る遺跡は少なく、規模も小さい。

後、晩期では遺跡数も少くなり、遺跡立地も次第に低地へと向かうようである。蓮田市ささら遺跡は元荒川右岸に位置し、称名寺～堀之内式の住居跡24軒、土壙60基が検出された（橋本他1984）。桶川市高井東遺跡（市川他1974）は後、晩期にわたる県内でも有数の遺跡である。伊奈地内でも氷川神社裏遺跡（細田1980）、伊奈屋敷遺跡（青木他1984）等がある。伊奈屋敷遺跡は泥炭層中から丸木舟を始めとした木製品が出土している。丸山遺跡からは直線距離で約1kmを測る。丸山遺跡は台地の比較的狭い範囲に安行I～Ⅲc式期の遺物が散布しており、両遺跡の関係が注目されるところである。大宮市寿能遺跡（大塚他1984）も概期の泥炭層遺跡である。

弥生時代以降の調査例は、伊奈地内においても數少なく、前述した向原遺跡で弥生後期の住居跡2軒、弥生時代末から古墳時代初頭の住居跡19軒、方形周溝墓2基が調査されているに過ぎない。

原、丸山遺跡をとりまく周辺地域の遺跡について以上概略を述べた。上越、東北新幹線に伴う調査によって、当地域でも次第に遺跡の在り方が解明されようとしているが、単に大宮台地上にとどまらず、広い視野からの考慮が必要となろう。

参考文献

- 市川 修他 1974 「高井東遺跡調査報告書」 埼玉県遺跡調査会
- 埼玉県教育委員会 1975 「埼玉県遺跡地図」 埼玉県教育委員会
- 笠森建一他 1976 「志久遺跡」 埼玉県遺跡調査会
- 谷井 魁他 1979 「大山」 埼玉県教育委員会
- 細田 勝 1980 「伊奈町氷川神社探集の縄文土器資料」 金鈴22号 早稲田大学考古学研究会
- 田中 信 1981 「小室天神前遺跡」 埼玉県遺跡調査会
- 金子直行他 1982 「大山」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大塚孝司 1983 「久保山遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 青木美代子他1984 「赤羽、伊奈屋敷遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 橋本 勉他 1984 「久台」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 大塚達郎他 1984 「寿能泥炭層遺跡」 埼玉県教育委員会

III 原遺跡の概観

本遺跡は綾瀬川右岸に位置し、遺構東西には支台が形成されており、台地は東側にゆるく張り出している。

本遺跡の調査にあたっては路線と併行して幅4m×4mのグリッドを設定し、南側から順次遺構確認を行った。その結果、1、2次調査合わせて、縄文時代中期の住居跡15軒、土壇10基、炭窯窓3基、井戸跡1基、溝16条が検出された。

縄文時代中期の住居跡は、勝坂期に属するもの4軒、加曾利E期に属するもの11軒である。勝坂期の住居跡は径5mが前後の円形を呈し、4本柱穴で中央部に炉をもつ。加曾利E期の住居跡は隅丸方形、ないしは長方形を呈し、第4号住居跡の如く、本遺跡内にあっては形態、掘り込みとともに極めて整った例もある。

住居跡の配列はほぼ円形を呈するようである。時期、段階的な占地の変化を具体的に指摘することはできないが、勝坂期では南側に位置し、加曾利E期前半では、勝坂式の住居配列の内側に位置している。加曾利E期後半では住居占地を拡大しながら北側に移行してゆくようである。恐らく住居跡は調査区の東側に拡がり、調査区は集落の西端部にあたるものと思われる。

土壇は10基検出され、時期決定し得る第1～3号土壇を除いて他は時期不明で配列も不規則である。

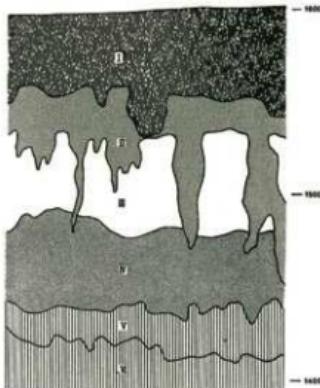
炭窯溝は伴出遺物が無く時期不明である。井戸跡は炭窯に切られ覆土内から出土した陶磁器から推定して江戸時代以降とするのが妥当であろう。

本遺跡で検出された遺構、遺物は上述したとおりである。個々の概要は後述する。

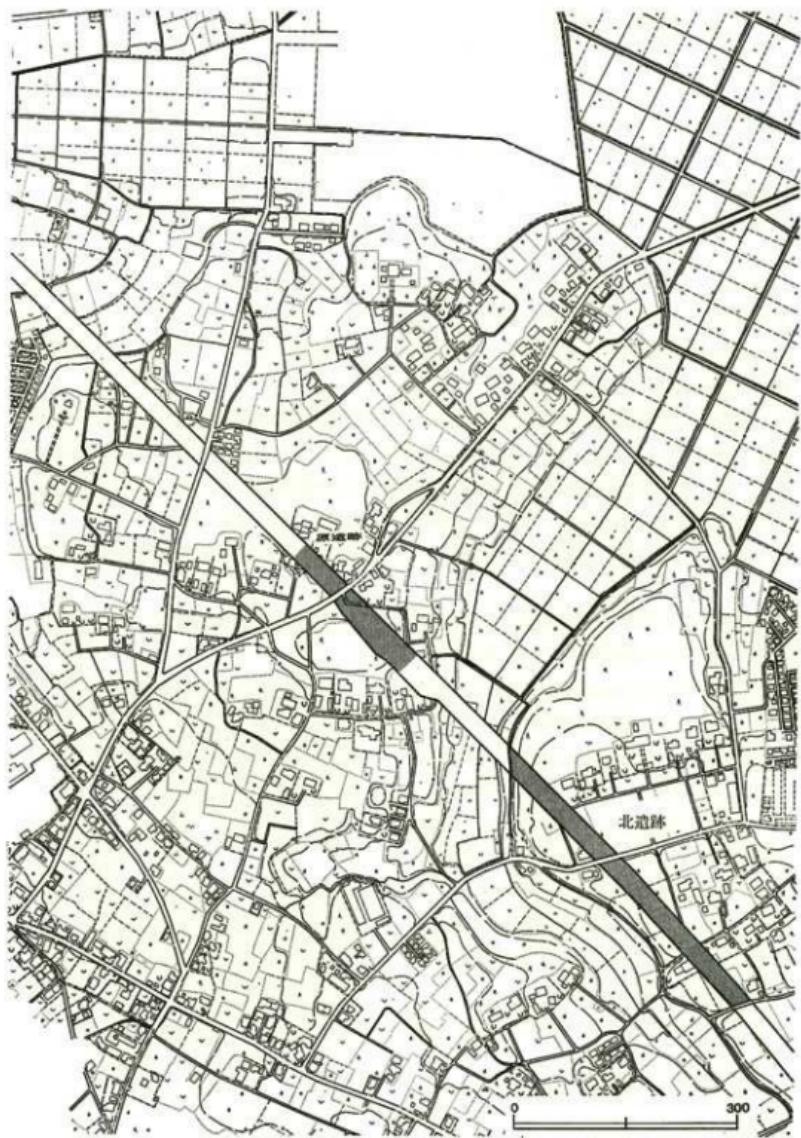
本遺跡における集落の在り方については上述したとおりである。本遺跡の南側には谷を隔てて、北遺跡が調査され、住居跡70軒余、土壇数百基が確認されている。縄文中期の集落は空間的に大きな拡がりをもつことが從来から唱えられているが、大宮台地における両遺跡の在り方には、縄文中期集落を考えるうえで新たな問題を提起したと言えるだろう。

第3図に本遺跡の標準土層図を示した。各層位は以下のとおりである。

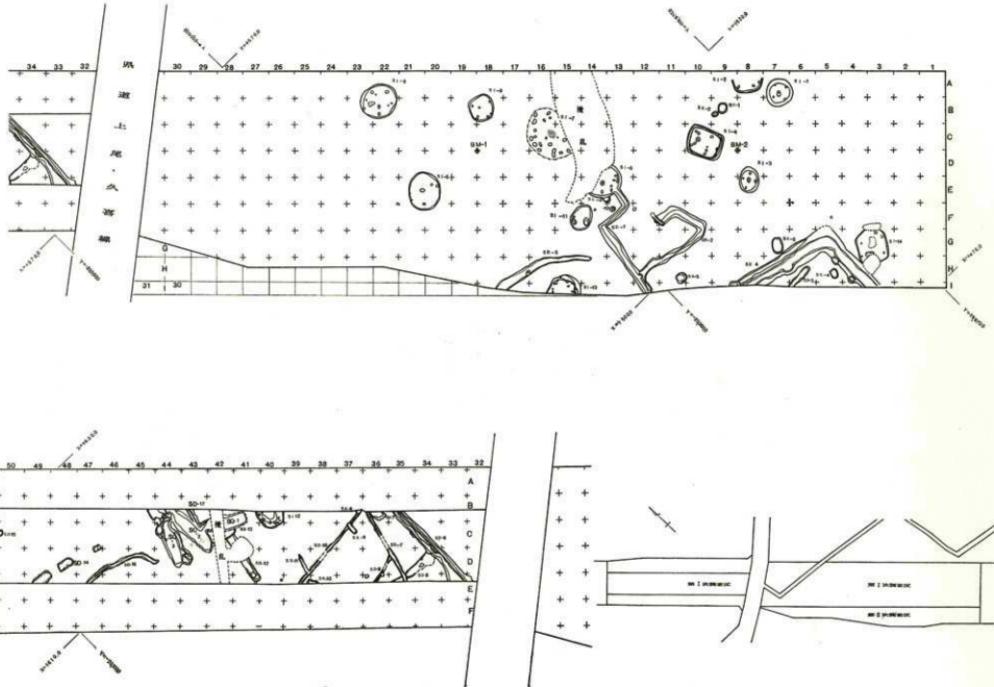
第I層 表土、第II層 黄褐色土・ソフトローム層、第III層 赤褐色土・ハードローム上面の土層、第IV層 褐色土・ハードローム・スコリア、白色火山灰を含む。第V層 黒褐色土・第I黑色帶、スコリア、白色火山灰を含む。第VI層 明黄褐色土。



第3図 基準土層



第4図 遺跡周辺の地形図



第5図 原道路構造全体図

IV 遺構と出土遺物

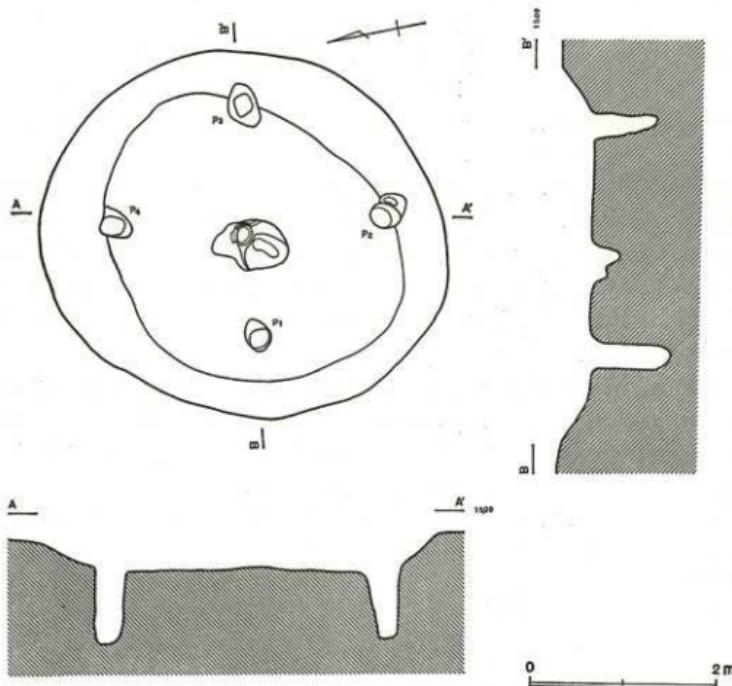
1 住居跡と出土遺物

住居跡は15軒検出された。第10、13号住居跡を除き、重複した遺構は少ない。時期的には勝坂式期3軒、加曾利EⅠ式期2軒、EⅡ式期3軒、EⅢ式期3軒、不明3軒である。勝坂式期の住居跡は円形、ないしは梢円形で遺跡南側に占地し、時期が下がるに従い、順次占地を北側に拡大していく傾向にあるようである。各住居跡について、以下に詳述する。

第1号住居跡（第6～9図）

第1次調査区A～B—6～7グリッドに位置する。長径4.4m×短3.9m径の梢円形を呈する。

壁は緩い傾斜をもって掘り込まれ、最深部は確認面から0.42mを測る。床面は中央部でやや高ま



第6図 第1号住居跡

りをもち、壁周辺で若干低くなつており、炉の周囲では固く踏みしめられたような状態を呈していたが、壁周辺部は脆弱な状態であった。覆土は焼土、炭化物粒子を含む暗褐色土からなり、樹木の搅乱によって堆積は著しく乱されていた。

炉は埋甕炉で、床面中央部に位置し、土器（第8図1）が埋設されていた。西側は搅乱を受け欠失している。覆土は4層から成る。概略は以下の通りである。

第1層 暗褐色土・焼土、炭化物粒子を含む。

第2層 暗褐色土・焼土粒を多量に含み炭化物粒子混じる。

第3層 暗茶褐色土・ローム粒子を多量に含み、焼土混じる。

第4層 暗黄褐色土・ローム質で、炉体土器を支えたものと思われる。

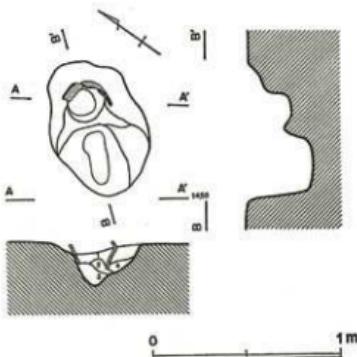
柱穴はP₁～P₄が検出された。P₁を除き、壁に接している。床面からの深さはP₁=60cm、P₂=72cm、P₃=90cm、P₄=87cmを測る。

遺物の出土は全体に散漫で、復元し得る3個体の遺物を含め少なかった（第8図）。1は覆土上層から投棄されたような状態で出土した。口縁部は無文で外反し、胴部がゆるやかにすぼまる円筒形の深鉢形土器である。文様帯は胴部に2本ずつの平行沈線を廻らせ、上部の沈線に接して、弧状の平行沈線を4単位施文している。うち3単位中には渦巻状の沈線が加えられている。胴部文様帯を作出する沈線にも一ヶ所に弧状の平行沈線が加えられる。地文は燃糸Lの継回転である。口径9cm×器高14cmを測る。

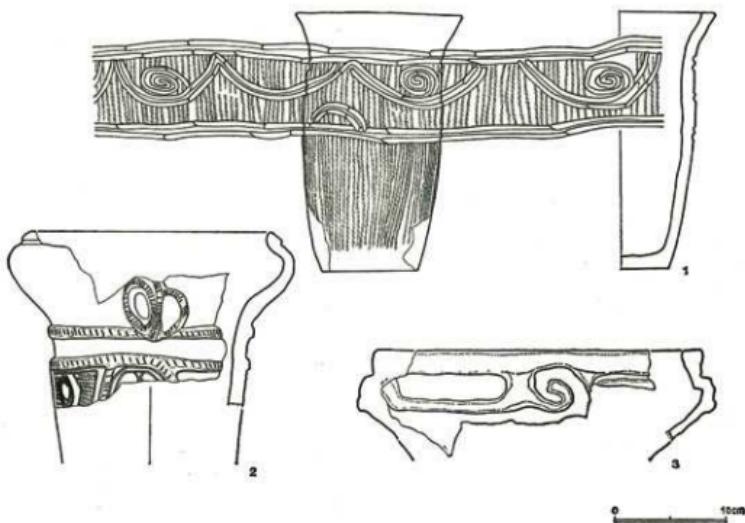
2は炉体土器である。キャリパー形を呈し、大きく開く無文の口縁部と、円筒状の胴部をもつものと思われる。口縁下端に突起をもち、胴部文様帶は横帯区画文で、区画文内が長方形、あるいは台形状に区画されるものと思われる。区画内部は沈線、又は角押文の施文され、隆帯上には斜位に刻みが加えられている。推定口径22.5cm×現存高15.5cmを測る。

3は浅鉢形土器である。口縁は無文で内傾し、胴部上端で大きく張る。文様は長方形の区画文と渦巻文をもつものと思われる。口縁内側は強くくびれる。推定口径29cm×現存高10cmを測る。1同様覆土内からの出土である。

第9図に1号住居跡出土土器拓影を図示した。1、2は円筒形の深鉢形土器で、無文口縁部と胴部は継区画を基本とする横帯区画文をもつ。3も1、2同様円筒形を呈するものと思われる。口縁内面に稜をもつ。4は交互刺突による連続「コ」字文で区画され、区画内は、刻目、沈線で充填されている。円筒形を呈すると思われる。5は突起頂部である。中央部に円孔を有する。6は波状口縁波頂部である。口縁に沿って、交互刺突による連続「コ」字文が廻らされ、波頂下には、梢円形



第7図 第1号住居 炉跡



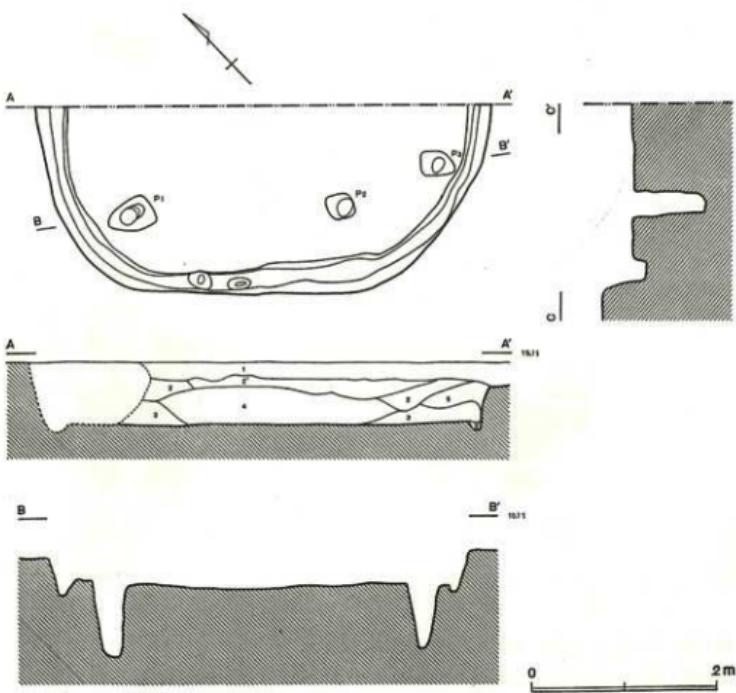
第8図 第1号住居出土土器（1）

ないしは円形の沈線が施されるものと思われる。器形は円筒形を呈するものであろう。7、8はキャリバー形を呈する深鉢形土器であろう。7は外傾する無文口唇部と、長方形区画をもつ口縁部文様帶から成るものと思われる。陰帯に沿って沈線が廻り、沈線間は縄文RLが斜位回転施文されている。8は燃系Lの縦位回転を地文にもち、口縁下に一条の沈線が廻る。あるいは円筒形を呈するものとも思われる。9は無文口縁部で、やはりキャリバー形を呈するものであろう。

10～14は脣部破片を図示した。10～12は沈線により文様抽出されている。いずれも縦位区画文を基調とするものであろう。10は区画内への充填が顕著で、刻目をもつ。12は区内面に刻目と、竹管による弧状の刺突が連続して加えられている。14は口縁部破片と思われる。精円区画をなす陰帯上には、ペン先状の連続刺突文をもつ。



第9図 第1号住居跡出土土器 (2)

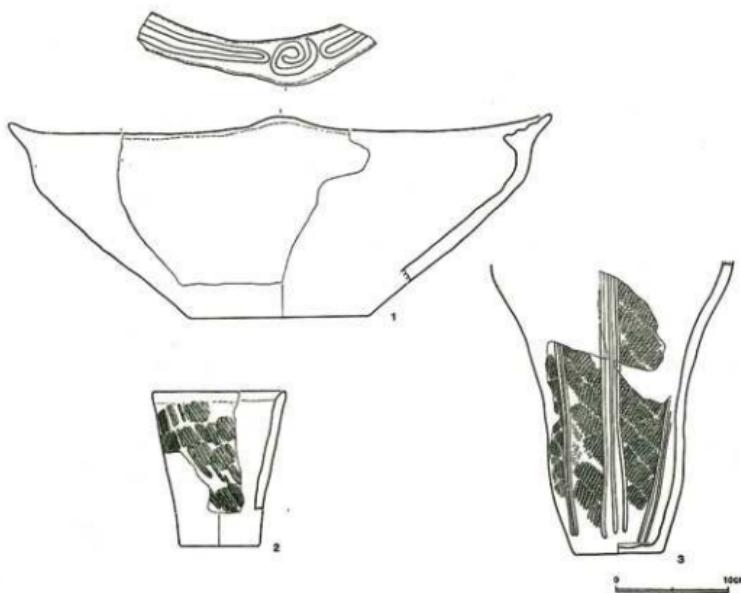


第10図 第2号住居跡

第2号住居跡（第10～13図）

第1次調査区A—8～9グリッドに位置する。造構の大半は調査区外にあり、南側の一部が調査されたに過ぎないが、南西コーナー部分に強く丸味をもち、南壁側が湾曲気味であることから、胴張りの隅丸方形ないしは長方形を呈するものと思われ、後述する第8号ないしは第13A号住居跡と形態的に近いものと思われる。掘り込みはハードローム層に達しており、確認面からは最深部で50cmを測る。床面は西側に向かってゆるくおちこんでおり若干凹凸をもつ。全体に軽く踏みしめられたような状態を呈しており、中央部では特に堅緻であった。壁はほぼ垂直に掘り込まれており壁に接して幅13～25cmの周溝が廻らされている。周溝底は床面から10～14cm掘り込まれている。

確認された柱穴は3基で、床面からの深さがP₁=78、P₂=72、P₃=78cmを測る。恐らく多柱穴の住居跡で壁に沿って柱穴が配されるものと思われる。周溝内には支柱穴と思われる小ピットが2基検出された。周溝底からの深さは7～13cmである。覆土は調査区の東壁で5層が確認された。内訳は以下の通りである。



第11図 第2号住居跡出土土器（1）

第1層 黒褐色土・腐蝕土層で本遺跡の表土である。

第2層 暗褐色土・部分的に確認される土層で、性格は第1層と同様である。

第2'層 暗褐色土・ローム粒子、焼土粒子を若干含み、2層よりしまり、粘性をもつ。

第3層 暗黄褐色土・ロームブロックを多量に含む。壁崩落土。

第4層 黒褐色土・焼土粒子、炭化物を多量に含み、粘性強。

第5層 暗黄褐色土・3層よりも色調明るく、ローム粒子を多く含む。

遺物の出土は全体に散漫で、主に第4層で検出されている。器形復元し得る土器は3点にとどまった（第11図1～3）。

1は浅鉢形土器である。口縁部は $\frac{1}{2}$ の残存で、推定口径49cm×現存高15cmを測る。4単位の小波状口縁を呈するものと思われる。底径15.6cmを測り底部からやや渦曲気味に強く開き、上部で垂直気味にくびれ、口唇は強く外反する。器外面は丁寧になでられている。幅広く平坦な口唇内面の波状部に太く浅い沈線で渦巻文が描かれている。渦巻文間は口縁に沿って平行沈線文が施文されて接続されている。

2は推定口径14cm×現存高11cmを測る小型深鉢形土器で、底部から直線的に開く。口唇に横ナデによって作出された無文部をもち口唇は尖る。器面には無節の原体Rが、継位に粗く施文される。口唇内面には弱い稜をもち、器内面に輪積み痕が残されている。口径7.6cm、現存高11cmを測る。

3はキャリバー形土器の頸部破片である。地文にR Lの原体を斜位回転し、2本ないし3本1單位の平行沈線が垂下している。形状から頸部の無文部は消失しているものと推定される。沈線間の繩文は磨消されている。底径8.3cm、現存高26.5cmを測る。

第12~13図に拓影図を示した。第11図1~5、第12図4~12はキャリバー形土器の口縁部および頸部破片、第12図9、11~13は連弧文系土器群である。

第12図1は、口縁部文様帯の幅が狭く、口頸部に幅広い無文帯をもつ土器と思われる。口縁部文様は2本の断面三角形の隆帯で区画され、隆帯間に縦の太い沈線が充填されている。口縁部文様の隆帯が文様区画を兼ねるものであろう。2は地文に撚糸Rが継回転され、口頸部無文帯は幅狭く、平行沈線によって区画されている。口縁部文様は幅の狭い断面カマボコ型の隆帯が「の」字又はランク状に地文施文後に貼付されるものと思われ、隆帯に沿って沈線が加えられている。3、4は1に類似した文様をもつ、やや小型と思われ、器厚も薄い。3は地文にR Lの原体が斜位回転される。口縁部文様帶には2本の平行沈線が垂下している。沈線内の繩文は磨消されている。

第12図5~8は長方形区画文と渦巻文を有する土器群であろう。5はR Lの原体の斜位回転、7は区画内に撚糸Rが継回転されている。器面と隆帯との比高差はやや低く、隆帯断面形はカマボコ型を呈し、隆帶上はヘラ状工具で丁寧にナデられている。

9はゆるやかに開く深鉢形土器が想定される。無文の口唇部をもち、文様は2段に分かれ、横位に曲線的な平行沈線文が施され上部の沈線は無文部を作出しており、それに接して胴上部の平行沈線文が描出されている。地文は原体R Lの継回転で、文様施文後、沈線間は磨消されている。

10は曾利糸の土器で、幅広く偏平な隆帯で区画され、隆帶上には刻目が、隆帯間に沈線が放射状に充填されている。

11、13は連弧文系土器である。共に継回転の撚糸Rを地文に持つ。11は口唇に沿って1条の沈線が廻り、沈線下に2本ないし3条の平行沈線による連弧文が施文されている。13は口唇に沿って2条の沈線が廻らされている。共に口唇は丸味をおび内湾気味である。

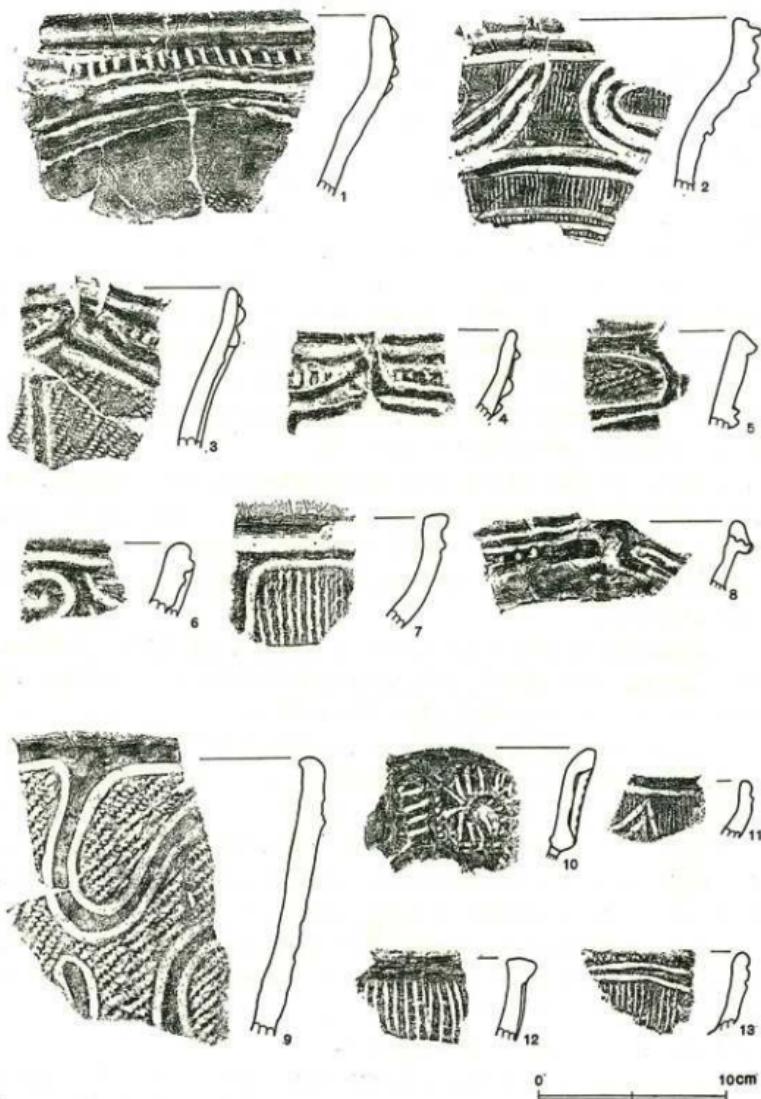
第13図1~2は無文の口縁部をもつ。口縁に沿って廻る沈線下には、1は原体R Lの継回転が、2には、原体R Lの継、横回転による羽状繩文が施されている。3は口唇が外反気味で、口縁に沿って隆帯が貼付され、隆帶上には刻目が加えられている。地文は撚糸Lが継回転されている。

第13図4~15は口縁部~頸部破片を一括した。5は2本隆帯の懸垂文をもち、隆帯間にナデられており隆帯側面に浅い沈線をもつ。地文はR Lの原体の継回転である。6、7は3本の平行沈線による懸垂文をもつ。地文は6が原体R、7が原体R Lの継回転である。沈線間は磨消されていない。

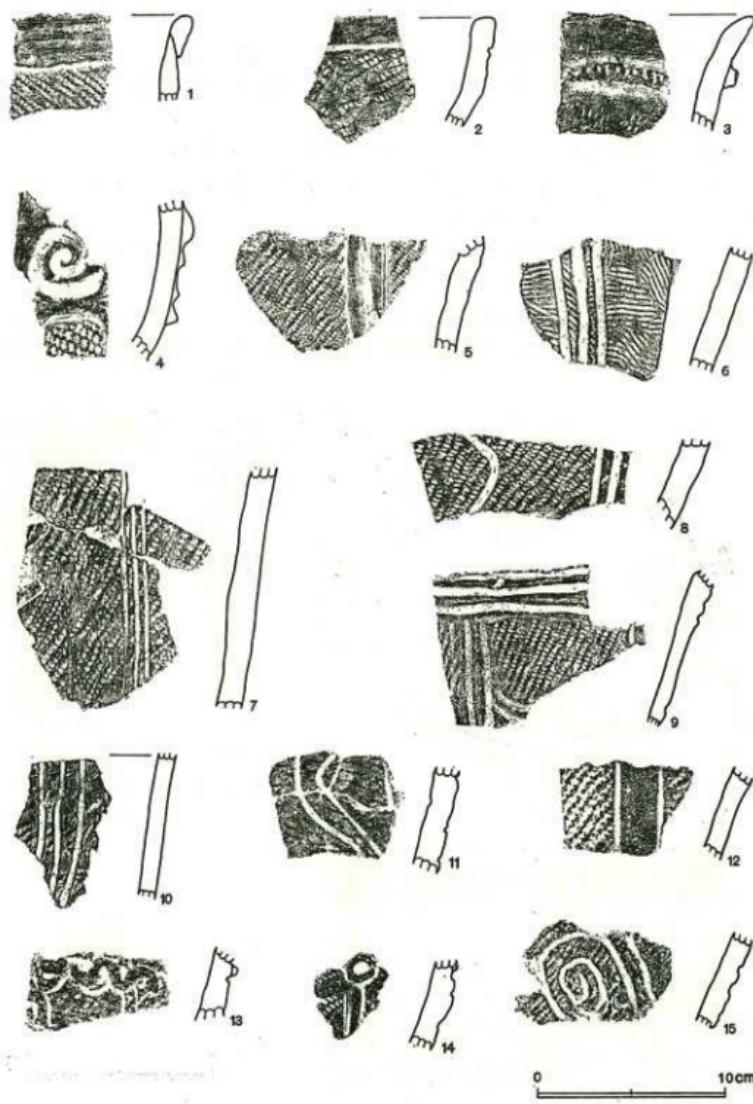
8、9、12は磨消懸垂文をもつ。8は蛇行する懸垂文をもつ。9は懸垂文間を連結する2条の弧線文をもつ。上下に対向する構成をとるものかもしれない。12は懸垂文の幅を広くとる、原体は8、9がR Lの継回転、12がR L Rの継回転である。

15は渦巻文をもつ。地文はR Lの継回転繩文である。

13はR Lの粗い地文上に交互刺突によって蛇行する隆帯をもつ。隆帯に沿って沈線をもち、部分的に垂下している。14は中央部に刺突をもつ円形貼付文に接して隆帯が垂下し、隆帯側面に沈線をもつ。地文は繩文R Lである。



第12圖 第2号住居跡出土土器（2）



第13圖 第2号住居跡出土土器（3）

第3号住居跡（第14～17図）

第一次調査区D-E-8グリッドに位置する。住居跡西壁側は樹木による擾乱が顕著で、正確な立ち上がりを確認することはできなかった。遺構は径3.8m前後を測り、円形を呈する。壁は傾斜をもって掘り込まれ、確認面からは最深部で35cmを測る。覆土は3層から成る。概要は以下の通りである。

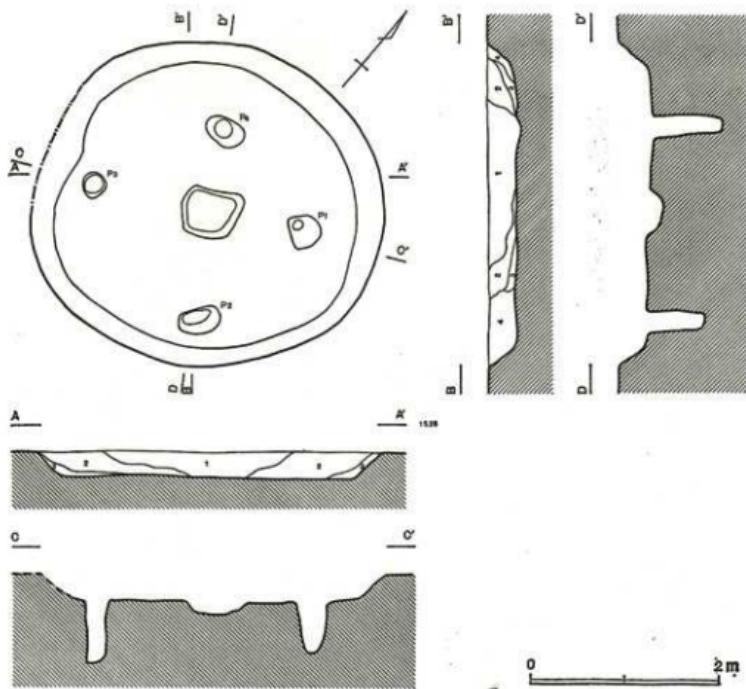
第1層 暗黒褐色土・ローム粒子を少量含む、粘性、しまりとも乏しい。

第2層 黒褐色土・焼土、ローム粒子を少量含み、やや粘性をもつ。

第3層 黄褐色土・ローム質で、やや褐色味が強い。

第4層 暗黄褐色土・ローム質で、壁の崩落土と思われる。やや粘性に乏しい。

床面は概ね平坦で、柱穴P₁周辺では踏み固められたような状態を示していた。柱穴はP₁～P₄まで確認された。また、炉を中心とした配列を示し、深さはP₁=48cm、P₂=60cm、P₃=68cm、P₄=75cmを測る。炉は埋甕炉で、中央部に第16図-1の土器が埋設されていた。プランは長径66cm×



第14図 第3号住居跡

短径57cmの不整長方形を呈し、炉体土器の周囲に環状の掘り込みをもつ。覆土は5層が確認された。

第1層 暗褐色土・ローム粒子、焼土粒子を含む。

第2層 黒褐色土・炭化物、ローム粒子、焼土粒子を含む。

第3層 明黄褐色土・極めて粘性強い。

第4層 暗黄褐色土

第5層 黄褐色土・炭化物を含む。

炉体土器はロームブロックによって下部を固定されていた。第4、5層は擾乱によって生じた可能性も考えられる。

遺物の出土は器形復元し得る3個体を除き、散漫な出土であった(第16、17図)。

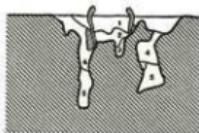
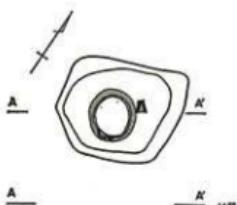
第16図1は炉跡に使用されていた土器である。キャリバー形を呈し、胴下半部は欠失している。口縁部は無文で、口頸部を廻る隆帯間に、4単位の楕円区画文をもつ。1単位は小さく、共に隆帯に沿って沈線が廻り、沈線間は綫の沈線が充填されている。口唇上に小突起をもつ。胴部の地文は原体RLの継回転である。口径21cm×現存高17.5cmを測る。

2はキャリバー形を呈し、口縁部に文様帶をもつ。文様は偏平な隆帯による「の」字状文で、空白部に三角形の沈線文が描かれている。胴部地文は原体RLの継回転である。口径、器高は推定26cm×36.5cmを測る。

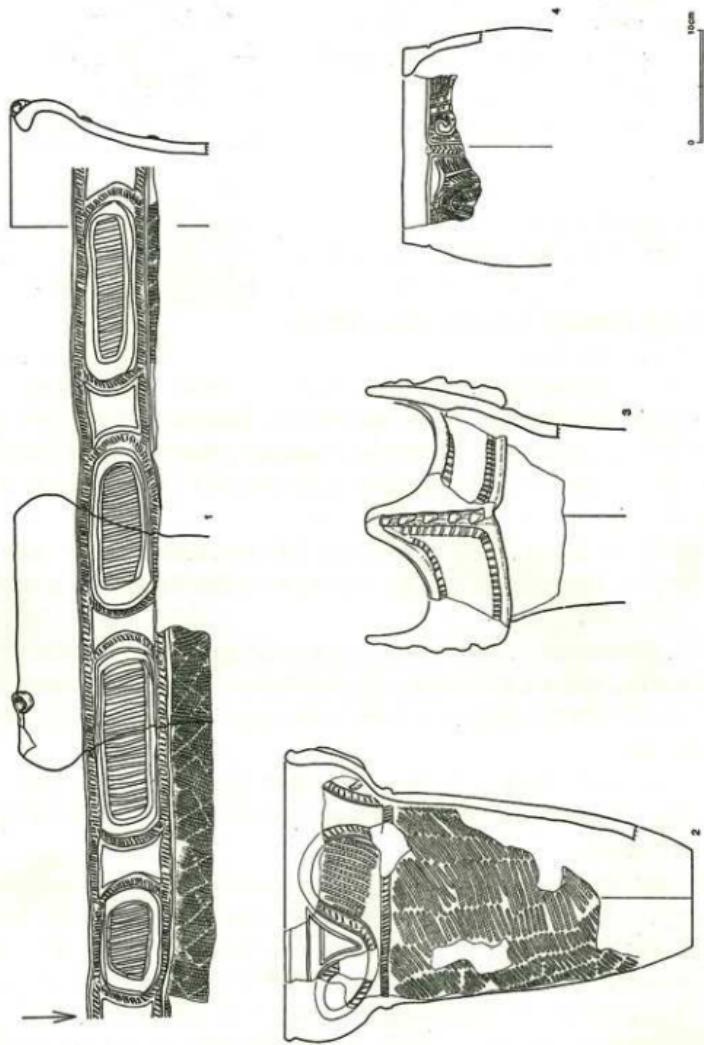
3は、炉体土器に接して、床面からやや浮いた状態で出土した。4単位の大波状口縁を呈するものと思われる。波頂部から垂下する隆帯には継位の押圧が加えられる。隆帯に沿って幅広の竹管文が廻っている。口縁下端の隆帯は大きく張り出し、頸部は無文となる。推定口径22.5cm×現存高16.6cmを測る。

4は口縁部破片から器形復元した。胴部中位で張る深鉢形を呈するものと思われる。無文の口唇下に隆帯による区画文をもつ。区画内の文様は残存部分が少なく不明瞭である。推定口径16.4cm×現存高7cmを測る。

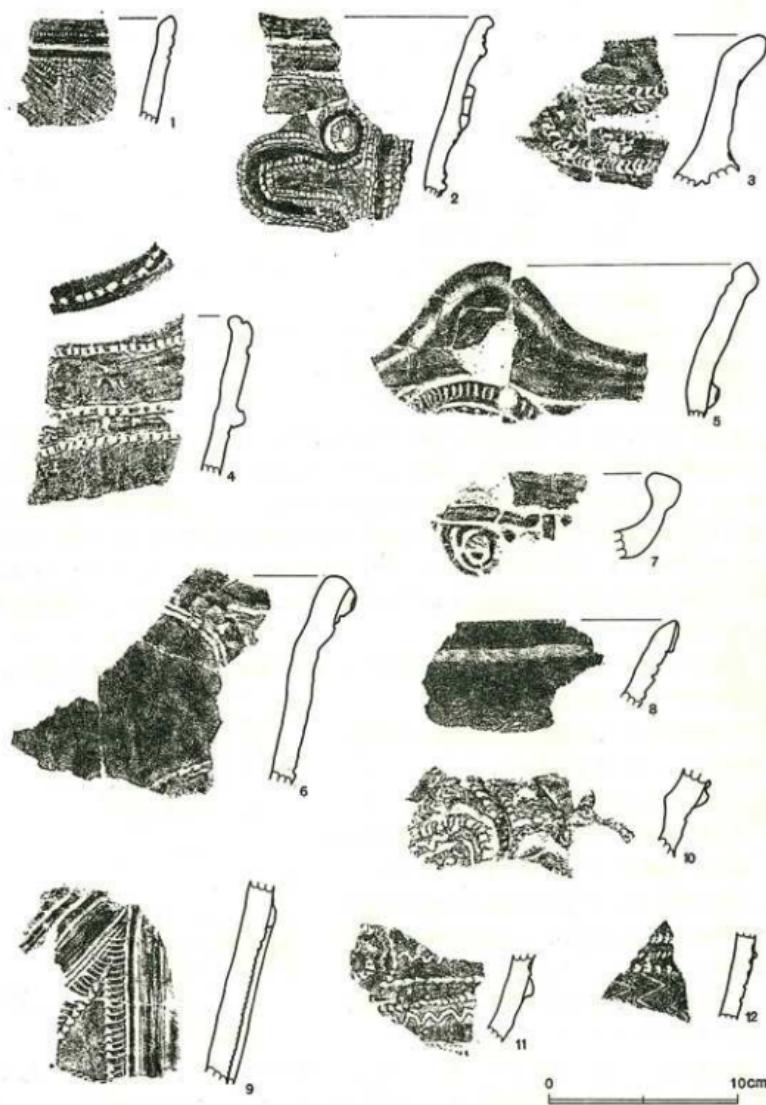
第17図に拓影を示した。1～4は幅の狭い竹管文が多用される。1はベン先状の竹管文が口唇部を廻り、口唇下の沈線に接して同様の竹管文が垂下する。地文はLRの継回転である。2は口縁が大きく開く深鉢形土器と思われる。隆帯に沿って2列の竹管文が施される。3は口頸部に段をもち、口唇が強く外反する。竹管内面により半隆起線を描いている。4、6は第16図3に近接して出土している。4は口唇上にも竹管文が加えられる。6は波状口縁を呈するものと思われ、波頂間に「Y」字状に隆帯が垂下するものと思われる。5は波状口縁で口縁下に隆帯文をもつ。8は浅鉢形土器と思われる。9は隆帯上に刻目をもたず、幅広竹管文は半隆起線状の区画内に施文されるのみである。



0 1m
第15図 第3号住居跡炉跡



第16圖 第3号住居跡出土土器（1）



第17图 第3号住居跡出土土器(3)

第4号住居跡（第18～24図）

第1次調査区C～D-9～10グリッドに位置する。調査区中で最も形態の整った住居跡である。住居跡は隅丸長方形を呈し、長径5.9m×短径4.4mを測る。確認面から床面までは約60cm程掘り込まれており、壁は急角度で立ち上がっている。掘り込みはハードローム層に達しており、壁の遺存状態も極めて良好である。壁に沿って幅約20cmの周溝が全周し、最深部は床面から16cm掘り込まれている。床面は全体に踏み固められたような状態を呈しており、極めて良好な状態であった。

覆土は6層が確認された。概要は以下の通りである。

第1層 黒褐色土・ローム粒子を多く含む。

第1'層 黑褐色土・1層に類似し、色調明るく、ローム粒子の混入少ない。

第2層 暗褐色土・ロームブロックを少量含む。

第2'層 暗褐色土・2層に類似するが、ロームブロックの混入が顕著である。

第3層 暗黄褐色土・ローム質、壁崩落土と思われる。

第4層 黒色土・炭化物、焼土粒子を多量に含む。

柱穴は床面上にP₁～P₈が検出され、周溝内にP₉～P₁₇までが確認された。床面上の柱穴配列は全体に北壁寄りに掘り込まれており、主柱穴と思われるP₁、P₃、P₄、P₇の配列は、P₄が西側に張り出し、造構もP₄に対する西壁が張り出したような形態を示している。周溝内の柱穴配列は南壁寄りにまとまりを示している。各柱穴の深さは以下の通りである。P₁=57cm、P₂=42cm、P₃=55cm、P₄=97cm、P₅=34cm、P₆=31cm、P₇=54cm、P₈=45cm、P₉=10cm、P₁₀=18cm、P₁₁=37cm、P₁₂=20cm、P₁₃=24cm、P₁₄=20cm、P₁₅=17cm、P₁₆=26cm、P₁₇=10cm。P₉～P₁₇は周溝底からの深さである。

南壁中央部に接した床面上には床面から7cm程度の半円形の掘り込みが検出された。住居跡の入口施設に伴うものと思われる。

炉は埋甕炉であり、胴部の欠けた第20図一1が埋設されていた。覆土は3層からなる。

第1層 黒色土・住居跡覆土第4層と同じ。

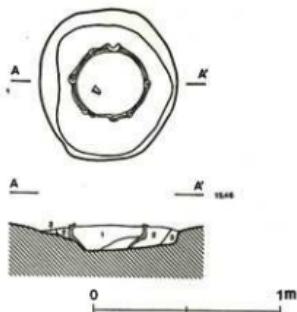
第2層 暗褐色土・焼土をブロック状に多量に含む。

第3層 暗褐色土・ローム粒子を多量に含む。

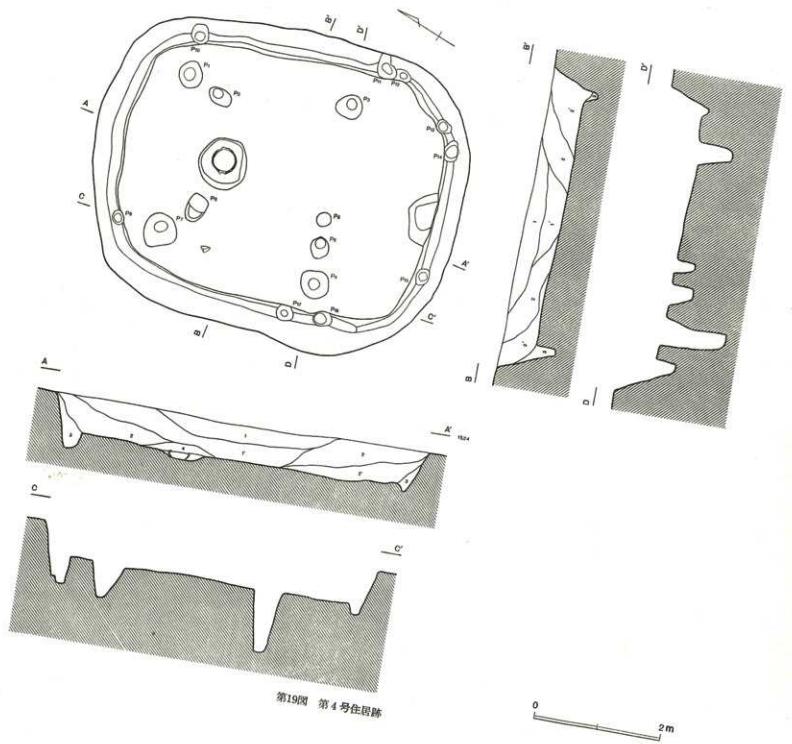
炉は径70cm前後、床面からの深さは最深8cmを測りほぼ円形に掘り込まれていた。土器は中央部に埋設されていた。

本住居跡からは、多量の遺物が出土したが、器形を復元し得る資料は3点にとどまった。

第20図1は炉体土器である。胴部は欠失している。キャリバー形を呈し、口縁は大きく張る。3単位の波状口縁をもち、2単位は近接する。1単位は波頂部から稍円形に隆起が垂下し、口縁部文様と接続するものと思われる。文様は一端が渦巻く、二本平行の「ω」「の」字状文が交互に貼付され、各文様間一ヶ所を除き隆起で結ばれている。地文に撲糸Lを横位施文後、隆起を貼付して



第18図 第4号住居 炉跡



いる。口径37.5cm、現存高20cmを測る。

第20図2は殆ど残存である。口縁部に大小1組の山形突起をもつものと思われる。突起両側には円形沈線が描かれる。口縁部は幅狭で下端は強く張り出している。胴部は綫の沈線と、渦巻状の沈線の組合せから成るものと思われる。地文はRLの原体が口縁部で横回転、胴部では綫回転されている。繩文施文後、沈線文を描いている。推定口径21.3cm、現存高10.5cmを測る。

3は口縁部破片から復元した。口唇部は2本の隆帯貼付により2重口縁をなす。隆帯間はナゲラ正在进行。口縁部は2本1単位の隆帯を恐らく4単位貼付したものであろう。地文は原体RLの斜位回転である。

第21~24図に拓影を図示した。覆土内からは勝坂・加曾利E式が混在して出土しているが、勝坂式土器が覆土内出土土器の大半を占め、加曾利E式土器の占める割合は少ない。

第21図1、2は隆帯内側に竹管文が併走し、1は空白部を綴に密な竹管文で充填している。2は2列の竹管文をもち、口唇は平坦で、複列の竹管で綴に刻目をもつ。文様構成はいずれも梢円あるいは窓枠状を呈するものと思われる。

第21図12~15は器面に隆帯文をもたず、竹管文の施文された一群である。12は山形把手で、頂部が窓状。外面には所謂角押文・有節線文・三角押文が口縁部と併走して施文されている。内面口唇部に2列の角押文が施文されている。13、14は平縁で、13は外反する口唇下に幅広の竹管文が、14には口唇下に刺突が彫り、ともに蛇行する沈線が横位に廻らされている。15は頂部が断面鋭角の把手で、口唇にかけて肥厚し、内面に稜をもつ。器面には口唇に刻目をもち、口唇に沿って有節線文が施文されている。

第21図2、4~10、第23図7~10、12、16は隆帯文上に刻目をもつ一群である。第21図2、第23図9、16は渦巻状の隆帯文をもつものと思われる。第23図2は湾曲気味の口縁部を呈し、隆帯に沿って沈線が引かれるほか、空白部にも蛇行する沈線をもつ。隆帯間にRLの繩文が施文されている。第23図9、10は隆帯と併走する沈線内に幅広の竹管文が密に施文されている。第21図4は三角形の対向するモチーフから成る。直線的に聞く深鉢と思われる。5は竹管文をもつ隆帯上に交互刺突が施される。6、9は突起部で、9は三角形を呈し、基部に眼鏡状の小突起をもつ。内面には刻目をもつ。6、9ともに隆帯状に竹管による刻目が密に施されている。7は口唇が鋭角を呈し、弧状の沈線文と、刻目をもつ隆帯文をもつ。8は波状口縁を呈し、波頂部から垂下する隆帯で器面が分割される。口唇に沿って隆帯が貼付され、内部に沈線が併走する。第23図12はキャリバー形を呈するものと思われる。口縁部には「々」状に隆帯が貼付され、沈線が併走する。器面にはRLの繩文が施されている。隆帯上には竹管文が粗く施されている。16は節の細かな繩文RLが施され、二列に貼付された隆帯に沿って、幅広い沈線をもつ。隆帯上の刻みは竹管によって施文されている。

第23図8は隆帯に沿って幅広い刻目をもち、更に弧状の竹管文が加えられている。隆帯上には刻目をもたない。

第21図10、16は沈線によって文様が描出される一群である。10は口縁部がくびれ、内湾気味に立つ口縁部は、横区画の沈線内に綫に沈線が充填されている。16は波状口縁を呈するものと思われ、渦巻状沈線文をとりまいて、口唇に沿って描出される沈線で、隆帯状の施文効果をもたせたもので

ある。部分的に交互刺突、三角形の竹管文をもつ。

第23図5、6は半載竹管内面で描出された沈線で半隆起線状の効果をもたせている。5、6は同一個体の可能性がある。器面は丁寧にナゲられている。文様モチーフは方形と長方形の組み合わせから成るものと思われる。

第22図6、8は波状口縁を呈し、口縁部内外面に文様をもつ。6の波頂部内外面に施文された渦巻文は、口唇に沿った沈線で結ばれる。内面には渦巻の一端から伸びた沈線で三叉文状を呈している。8は「S」字状の沈線が内面には下方が大きく継位に、外面には横位に施文されている。6、8ともに単沈線で幅広く、断面カマボコ状を呈する。器面は内外面とも丁寧にナゲられている。

第22図1～3は口縁部に文様をもつ一群である。1は三角形で端部に円形モチーフをもつ隆帯が貼付されている。4は長方形の区画をもつ。口縁部が強くくびれ、内面は強く突出する。3は第21図13～14等と同類と思われる。口唇内面に稜をもち、器面には円形に貼付文をもつ。1、2は浅鉢形土器である。

第22図11～12、第23図1～2は無文の土器群である。第22図12～14は口唇が肥厚し、口唇上に平坦面をもつ。外面口唇下にはナゾリが施されている。第22図1～2は内側に強くくびれ、1は口唇上に平坦面をもつ。2は口唇が鋭角をなし、口唇外面が赤色塗彩されるほか、器面に赤色塗彩されたモチーフをもつ。いずれも浅鉢形土器である。

第22図3～4は器面に繩文が施された土器群である。3は口唇に貼付された粘土紐によって外方に突出する。4は口唇にかけて肥厚し、口唇上に沈線が引かれ大きく窪む。地文は3、4ともに繩文R Lが横回転施文されている。

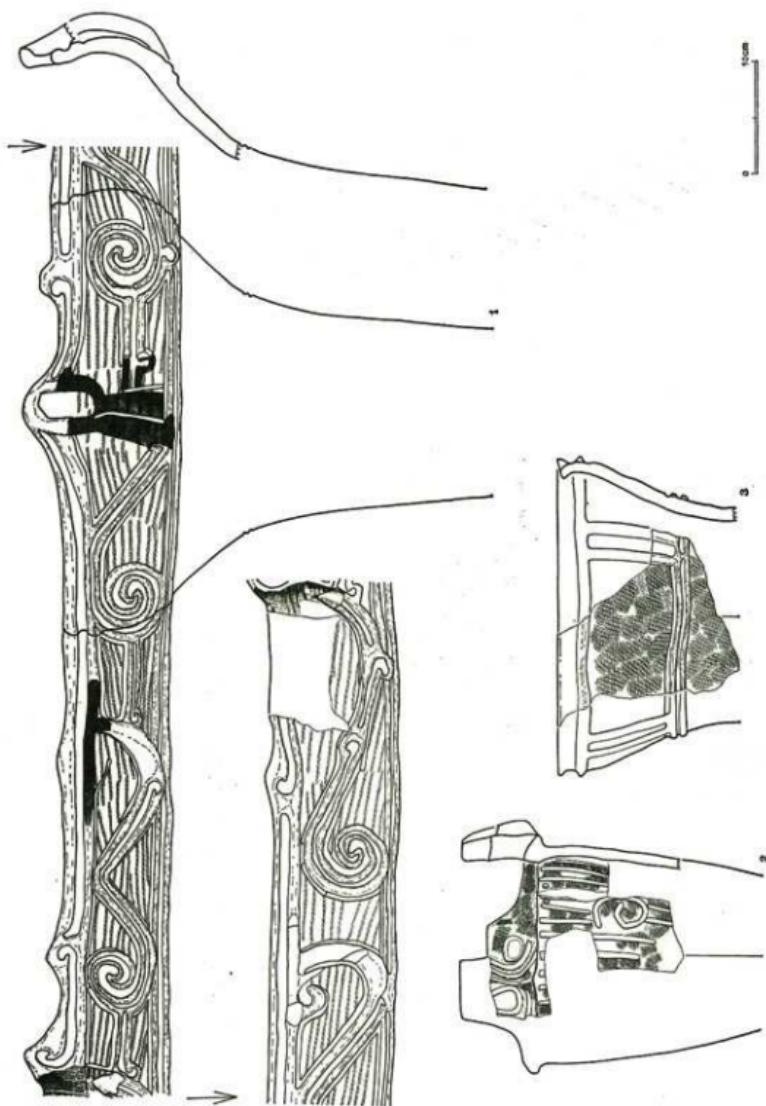
第23図13～15は地文に撚糸文をもつ一群である。13は胴部上半に位置し、器面を廻る隆帯は押圧されている。地文は撚糸Rである。14は平行沈線と、上部に沈線に沿って継刻みと鋸歯状沈線文をもつ。地文は撚糸Rである。15は撚糸Rの地文上に平行沈線文が描出される。沈線は3本で直線的に描出されている。

第24図1～3は全面に繩文が施文されている。1は隆帯文をもつ。地文は1、2が撚文R L、3が繩文L Rである。

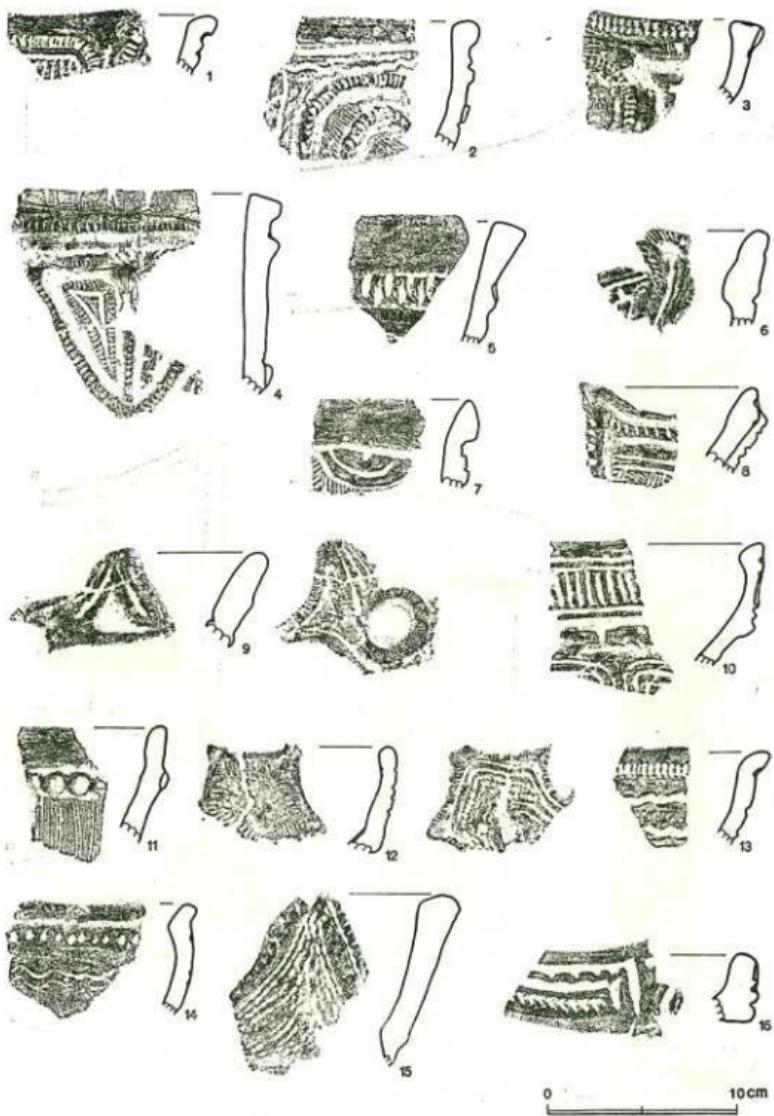
第24図4～5は繩文地上に沈線文をもつ一群である。4は大きく蛇行する懸垂文状を呈する。地文はR Lの撚文が粗く施文されている。5は口縁部破片で、口縁部には沈線が引かれ、單位文には縦に沈線が引かれている。胴部地文は繩文R Lである。

第22図7、第24図6はキャリバー形を呈するものと思われる。7は波頂部から隆帯によって口縁部文様を作出している。隆帯上には沈線をもち、2分割されている。区画内に繩文R Lをもつ。第24図6は区画内、及び頸部に撚糸Rが施文されている。

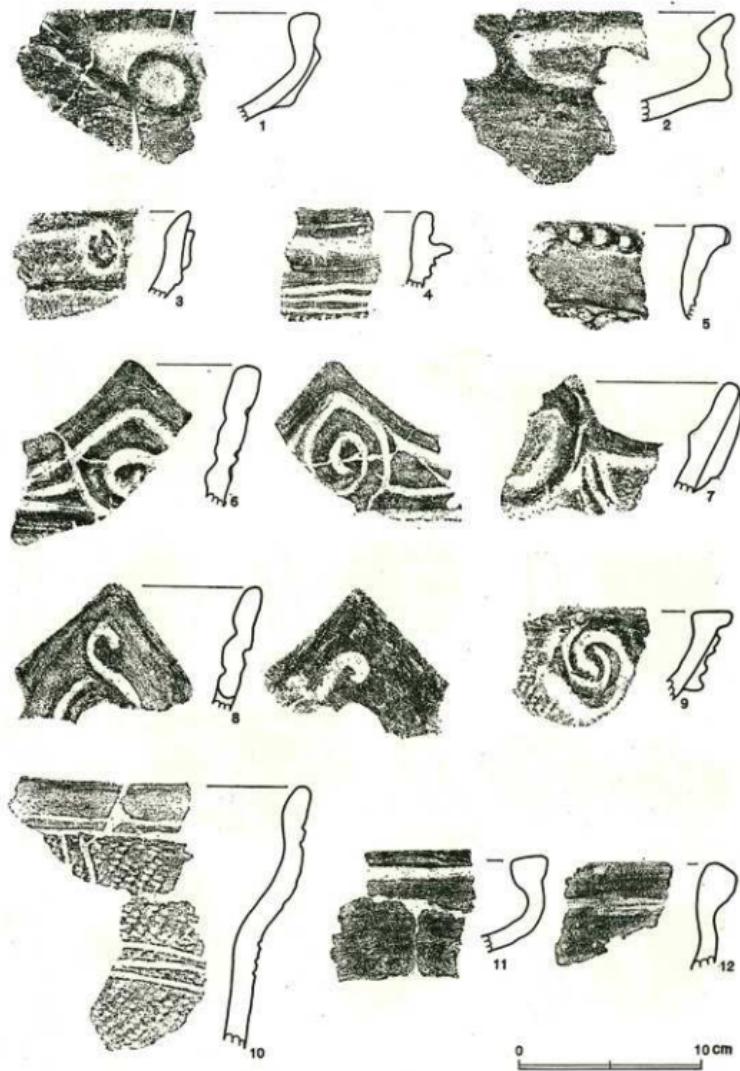
第24図8～9は、第21図13～15等の胴部に対応するものと思われる。8は断面三角形の隆帯が貼付されている。



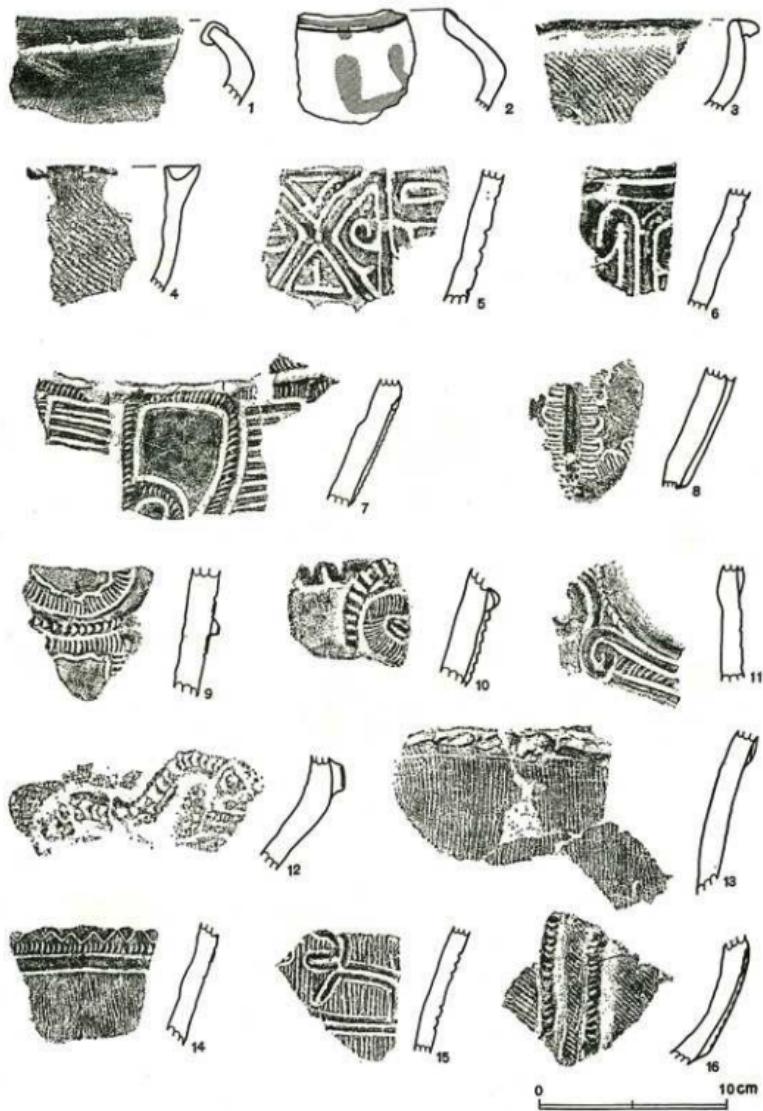
第20图 第4号居跡出土土器（1）



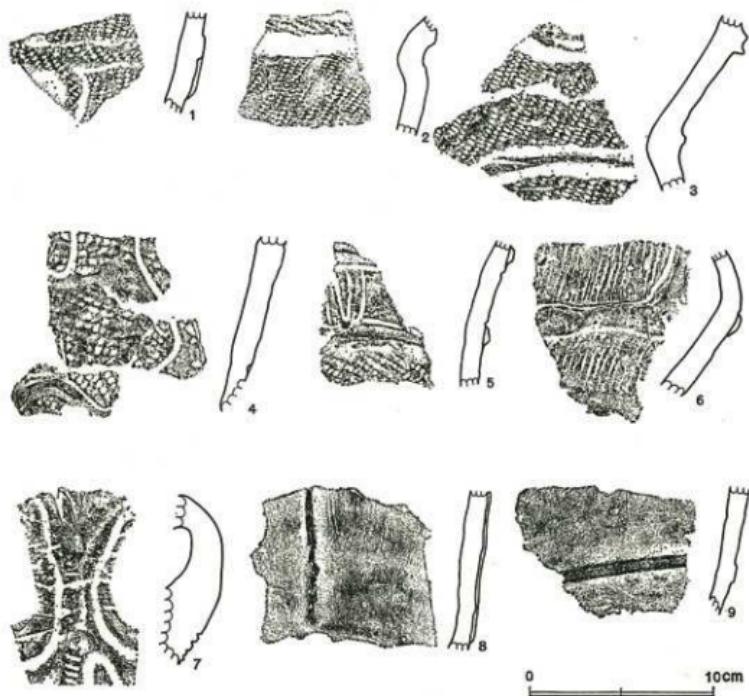
第21図 第4号住居跡出土土器(2)



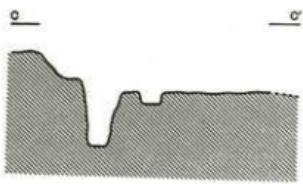
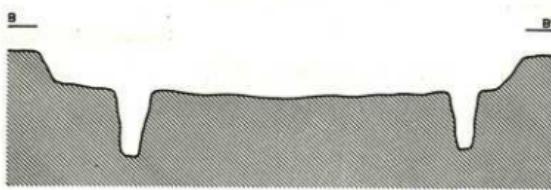
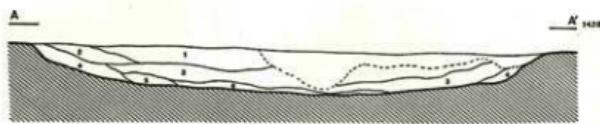
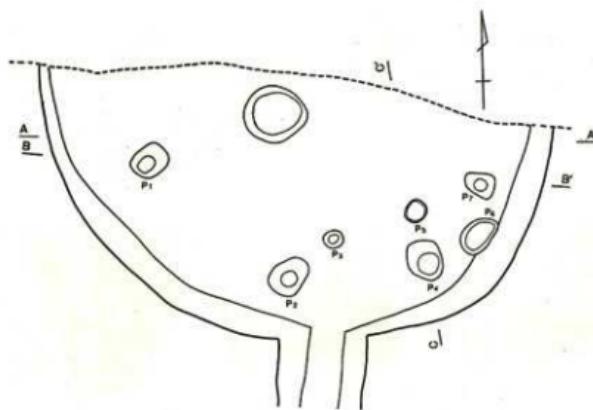
第22圖 第4號住居跡出土土器 (3)



第23圖 第4号住居跡出土土器(4)



第24圖 第4号住居跡出土土器（5）



0 2m

第25図 第5号住居跡

第5号住居跡（第25～27図）

第1次調査D～E-13～14グリッドに位置する。遺構北半が擾乱を受け、プランが確認されたのは南半だけである。南壁面の一部が近世の溝に切られている。掘り込みは最深部で確認面から30cm程度で、壁は比較的ゆるやかに立ち上がる。床面は中央部に向かってゆるい傾斜を示す。床面は堅緻である。覆土は6層からなる。概要は以下の通りである。

第1層 暗褐色土・ローム粒子を含み、粘性、しまりともに乏しい。

第2層 暗褐色土・第1層に比べ、ローム、炭化物粒子が多く含まれる。

第3層 暗褐色土・2～3cm程度のロームブロックを比較的多く含む。

第4層 明褐色土・ローム粒子、ロームブロックを含み、しまりに乏しい。

第5層 暗黄褐色・土壁の崩落土と思われるが、地上より粘性、しまりが乏しい。

第6層 暗褐色土・5層に比べてやや色調が黒味を帯び、ロームブロックが少量含まれる。

柱穴はP₁～P₇が確認された。床面からの深さはP₁=71cm、P₂=69cm、P₃=77cm、P₄=13cm、P₅=20cm、P₆=24cm、P₇=18cmを測る。

炉跡は埋甕炉で、胴部を欠いた第27図-1が埋設されていた。覆土は3層からなる。

第1層 暗褐色土・焼土粒子を少量含む。

第2層 赤褐色土・焼土をブロック状に多く含む。

第3層 暗黄褐色土・焼土、ローム粒子を若干含む。

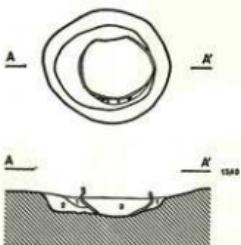
炉跡は長径67cm×短径60cmの梢円形を呈し、掘り込みは最深部で床面から9cmを測る（第26図）。

遺物の出土は散漫で、図示し得る個体は炉体土器だけであった（第27図-1）。

第27図-1は炉跡に埋設されていた土器である。キャラバ形を呈し、口縁は直立、口唇は外傾する。口縁に沿って沈線が廻り、無文部を作出している。文様帶は口縁部と頸部にもち、隆帶を廻らせ区画している。文様は口縁部に2本と3本の隆帶が貼付され、頸部は対応して2本隆帶が貼付されている。口縁部の隆帶区画間に沈線文を部分的にもつ。口径34.5cm、現存高12.8cmを測る。

第28図に拓影図を示した。1～2は地文に繩文をもち、1は沈線で文様帶区画を作出する。3は隆帶上に竹管文をもつ。4は沈線による半隆起帶上に刻目をもつ。5は口唇に沿って交互刺突による連続「コ」字形が廻らされている。7～12は無文の土器群で、7は口縁に断面角形の隆帶を貼付した窓枠状区画をもつ。10～12は浅鉢形土器。10は口縁部が直立し、口唇が大きく外反、隆帶は大きく突出している。13は器面に幅広い沈線文をもつ。15、16は隆帶に沿って竹管文をもつ。

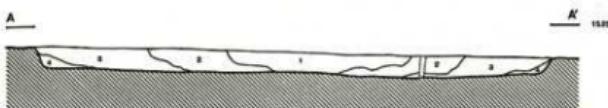
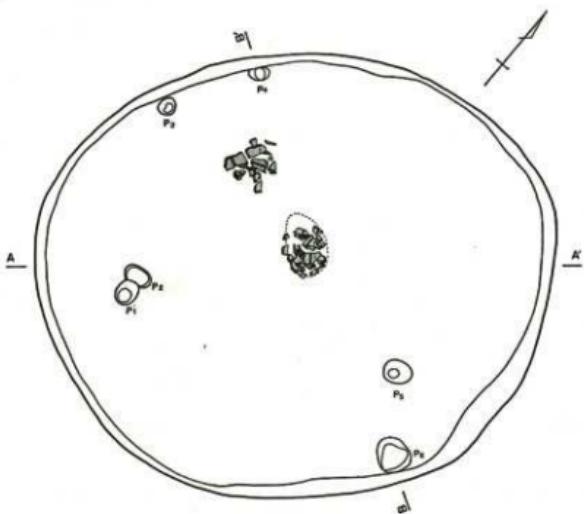
17～21は隆帶上に刻目をもつ土器群である。18、20は隆帶に沿って沈線がひかれ、沈線間に綫に沈線が充填されている。19、21は隆帶に沿って刻目をもち、充填は顕著ではない。22は横走する隆帶上に棒状工具の刻目をもつ。地文はR Lの綫回転である。



第26図 第5号住居炉跡



第27図 第5号住居跡出土土器



0 2 m

第28図 第6号住居跡

第6号住居跡（第28～32図）

第1次調査区C～E-20～21グリッドに位置する。長径5.9m×短径4.8mの椭円形を呈する。掘り込みは西壁側で最も深く、30cmを測る。掘り込みが全体に極めて浅く、壁は不明瞭な状態であった。覆土は4層から成る。概要は以下の如くである。

第1層 黒褐色土・ローム、焼土粒子を多く含み、粘性、しまりに乏しい。

第2層 暗黄褐色土・やや黒味を帯びる。ローム、焼土粒子を多く含む。

第3層 明褐色土・ローム粒子を含み、2層よりも赤味がある。粘性やや強。

第4層 黄褐色土・ローム質で粘性が強い。壁崩落土と思われる。

床面はほぼ平坦である。炉跡周辺が多少火熱を受けて、硬度をもつては全体に不明瞭で、脆弱な状態を呈していた。部分的に床面まで擾乱を受けている。柱穴はP₁～P₆まで確認された。配列は不規則で位置的にはP₁とP₅が対応関係にあるに過ぎない。床面からの深さはP₁=30cm、P₂=24cm、P₃=63cm、P₄=35cm、P₅=37cm、P₆=33cmを測る。

炉跡は地床炉で中央部からやや西壁寄りに検出された。長径69cm×短径48cmの不整規円形を呈し、東側に浅い張り出し状の掘り込みをもつ。覆土は2層から成る。

第1層 暗褐色土・住居跡覆土1層と同じ。

第2層 暗黄褐色土・ローム粒子、焼土、炭化物粒子を含む。

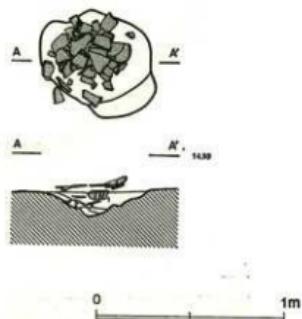
覆土内には、大形土器片が敷きつめられたような状態で検出されたが、土器圓炉とは性格の異ったものである（第29図）。

遺物は炉跡、床面上の出土遺物から復元された3個体を除き、全体に出土量は散漫であった（第30図2～4、第31～32図）。

第30図2は、炉跡覆土内から出土した。器形は口縁部がゆるやかに開く深鉢形土器で、口唇に無文部をもつ。文様は、口唇無文部からの渦巻文と、長方形区画の沈線文から成り、区画内は2本の沈線で小区画されている。頸部無文帯は消失し、口縁部文様帶も幅狭で、2ないし3本1単位の懸垂文が口縁部文様帶直下より垂下する。地文はLRの原体を斜位回転して施文されている。懸垂文は地文施文後に描出され、沈線間は磨消されている。推定口径31cm、現存高18.5cm。

第30図3は、炉跡覆土内から出土した。器形は口縁部がゆるやかに開く深鉢形土器である。口縁部文様帶は極めて幅狭で、長椭円形の区画文をもつ。区画文に接して2本1単位の懸垂文、幅広い沈線による蛇行懸垂文が交互に描かれる。地文はRLの原体を用い、口縁下では横回転施文を中心に、以下は斜位回転施文している。推定口径26cm、器高33.7cmを測る。

第30図3は床面上から押しつぶされたような状態で出土した。器形は底部から直線的に外反する深鉢形土器で、口唇は鋭角をなす。文様は3本1単位の沈線による連弧文で、6単位に施文される



第29図 第6号住居炉跡

ものと思われ、更に3本1単位の懸垂文によって3単位に分割されている。地文はLRの原体を斜位回転施文し、懸垂文は纏文施文後に描かれる。沈線間は磨消される。口径13.7cm、器高32cmを測る。

第31~32図に拓影を図示した。第31図1~3は勝坂式に属する。1は円筒深鉢形器形が推定され口唇無文部直下に交互刺突文をもつ、口縁部は刻目をもつ隆帶文である。地文は撚糸Lが縦位施文される。2は波状口縁を成し、波頂部から隆帶が垂下する。隆帶上には綫の沈線が加えられている。3は口縁直下に渦巻文をもつ。

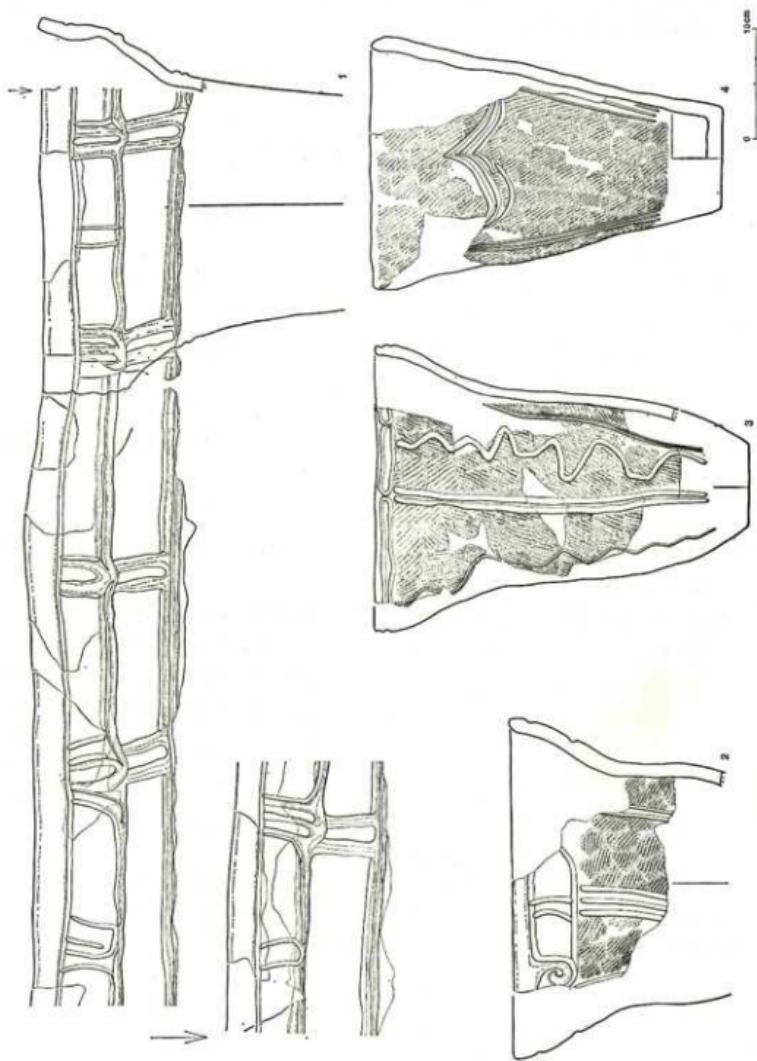
第31図4~5、11、第32図1~11は口縁部に区画文をもつ土器群及びその胴部破片を示した。

第31図4は口唇に強く外反する無文部をもち、口縁部が強く張る深鉢形土器で、頸部に無文帯をもつ。口縁部文様は、渦巻文と、沈線による長方形の区画文から成るものと思われる。区画内にはRLの原体が横、縦位に施文されている。同図5は隆帶により、端部が幅狭となる長方形の区画文をもつ。区画内側に幅広の沈線が併走する。口縁部文様帯は幅狭である。口頸部に2本の平行沈線が横走している。地文はRLの原体の斜位回転施文である。第32図1~2は口縁直下の部位に相当すると思われる。1は幅広の沈線が横走する。2は2本の隆帶が貼付され、隆帶に沿って沈線が加えられている。地文は1がLR、2がRLの原体を施文している。第32図3~11は懸垂文をもつ胴部破片である。3、4は沈線間が磨消されない一群である。地文は3がLRの縦回転、4が撚糸Lの縦回転施文である。5~11は沈線が比較的幅広で、沈線間に磨消手法をもつ一群である。懸垂文の幅はさほど広くない。地文は6がLR、他がRLの原体を用い、いずれも縦回転施文されている。

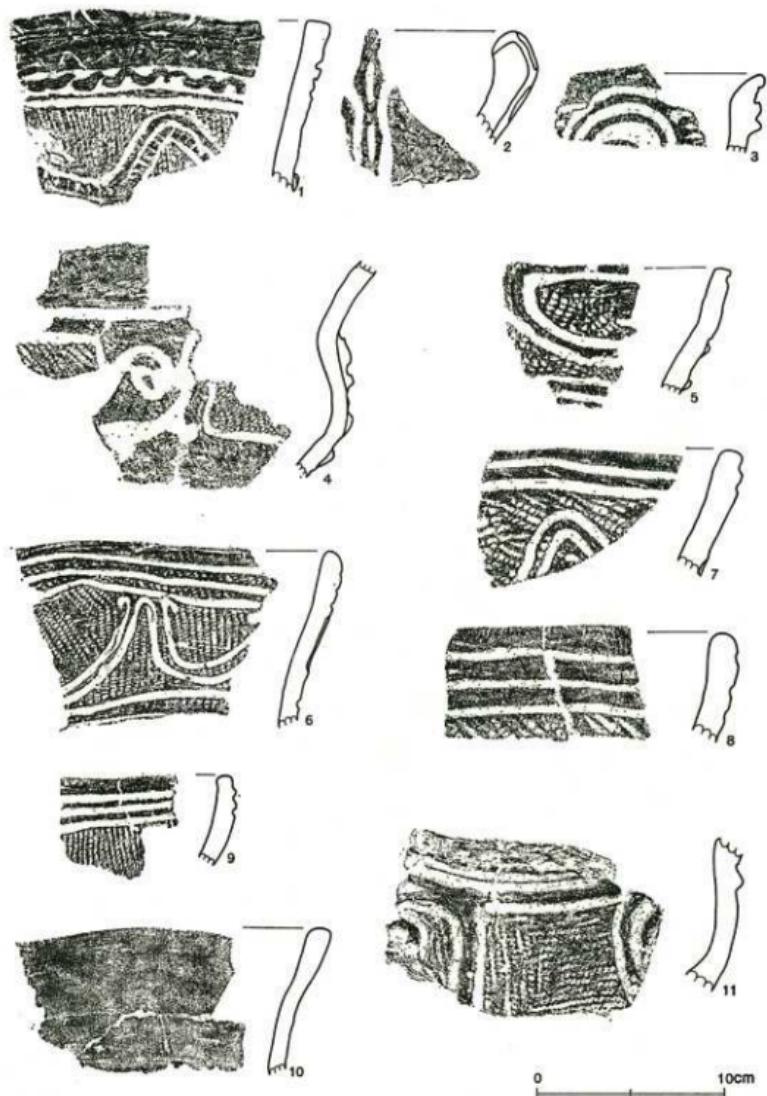
第31図6~9、第32図13~15は連弧文系土器である。第31図7は口唇に2本の沈線を廻らせ、口縁部文様帯には、2本の平行沈線による連弧文が描かれる。同図6は、口唇に沿って3本の平行沈線が廻り、口縁部文様帯には2本の平行沈線による連弧文が描かれ、波頂部では上端の沈線が左右で小さく渦巻く、器形は1、2とも頸部から直線的に外反する深鉢形が想定される。同図8、9とも口縁に沿って3本の沈線が廻る。9は口縁が内傾する。地文は6~8がRLの原体、9が撚糸Lを施文している。第32図13~15は連弧文系土器の胴部破片である。13は、弧の描出は3本沈線が段階的に施文されておりやや不規則の感がある。同図14は2本同時に沈線描出したものであろう。同図15は3本沈線の連弧文は振幅が狭く、波頂部も鋭く描出されている。地文は13、14がRL、15がLRの原体で、14は沈線間が磨消されている。

第31図10は無文の口縁部で、口縁中位で扁曲気味に立ち上がる。器面は丁寧にナガられている。

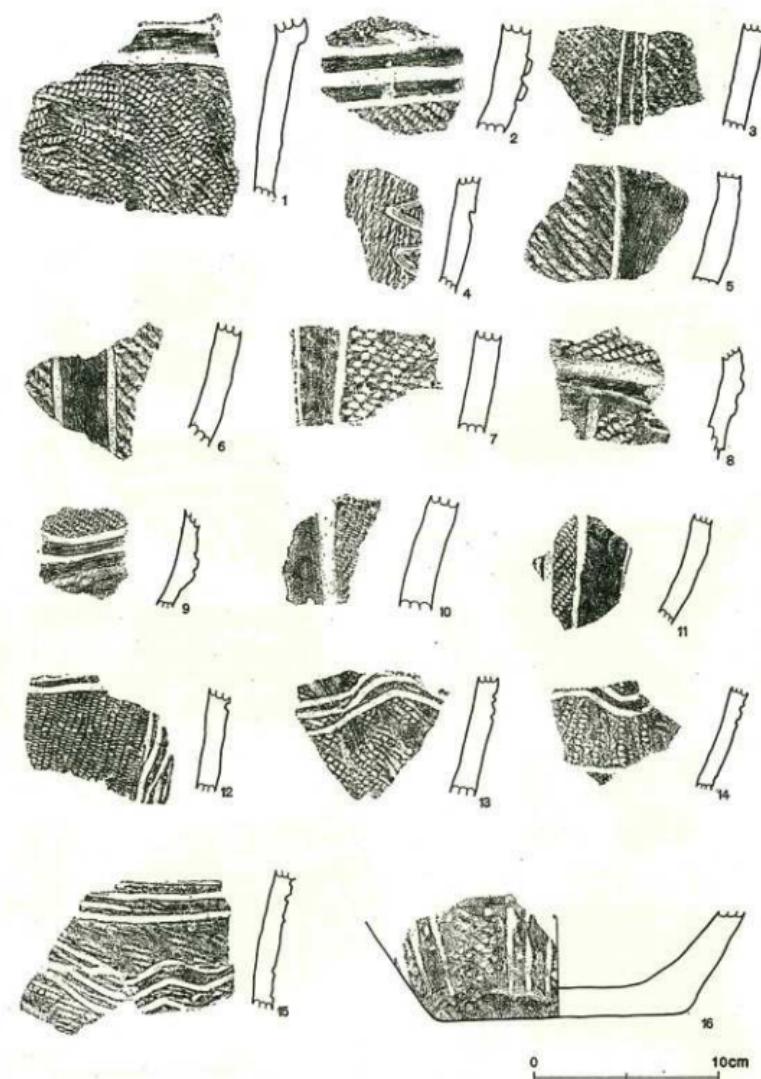
第32図16は底部である。3本1単位の懸垂文が底部上端まで垂下しており、沈線間は磨消されていない。地文はLRの原体の縦回転施文である。底径13.6cmを測る。



第30図 第5・6号住居跡出土土器(1)



第31図 第6号住居跡出土土器（2）



第32圖 第6號住居跡出土土器（3）

第7号住居跡（第33～34図）

第1次調査区B～D-15～16グリッドに位置する。造構は表土を除去した段階で既に柱穴が検出されており、壁を確認することはできなかった。また、調査区東西に幅の広い擾乱が存在し、住居跡西側を切っており、ために柱穴の全体配列は確認できなかった。従って、造構の規模、形態は柱穴配列から想定した。

柱穴は長軸をN-6°-Eにもつ。柱穴配列から、住居跡は梢円形ないしは隅丸長方形のプランを呈していたものと思われる。柱穴は2列検出され、外側に位置する柱穴は内側の柱穴に比べ大形で掘り込みも深い。柱穴はP₁～P₁₉が検出された。各々の深さはP₁=24cm、P₂=26cm、P₃=34cm、P₄=86cm、P₅=51cm、P₆=38cm、P₇=21cm、P₈=45cm、P₉=13cm、P₁₀=25cm、P₁₁=83cm、P₁₂=43cm、P₁₃=20cm、P₁₄=30cm、P₁₅=86cm、P₁₆=75cm、P₁₇=32cm、P₁₈=48cm、P₁₉=27cmである。その形態から、拡張した可能性も考えられる。炉跡は中央部に位置し、長径1.3m×短径0.5mの不正長方形を呈する。床面は凹凸が顕著で、火熱を受け、部分的に赤変している。覆土は4層からなる。

第1層 褐色土 焼土、炭化物粒子を多量に含み、小砾混じる。

第1'層 褐色土 1層に比べ色調明るく、ローム粒子の割合が多くなる。

第2層 黄褐色土 焼土、炭化物、ローム粒子を多く含む。

第2'層 黄褐色土 1層に類似し、ローム粒子が多く、他は少ない。

第3層 黒褐色土 炭化物粒子を多量に含む。

炉跡内には浅い小ビット2基が検出されているが、性格は不明である。

遺物の出土は貧弱で、器形を復元し得る資料は出土しなかった。炉跡内、床面上より磨石が出土している（第33図）。

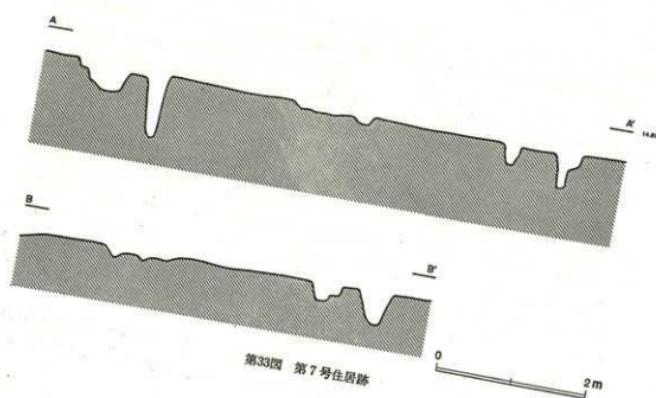
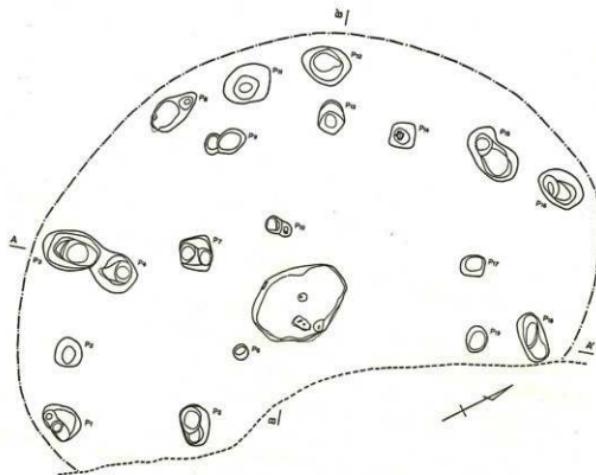
第34図に拓影を図示した。1、2は勝板式に比定される。1は突起部で内面に棱をもつ。2は波状口縁部で、波頂部は山形をなす。口唇上には棒状工具による押圧が加えられる。地文は原体R Lの斜位回転施文である。3、13、14はキャリバー状をなす深鉢形土器破片と思われる。3は渦巻文と長方形区画文をもつ。13は口縁部にクランク状文をもつ、空白部を縦の沈線で充填したモチーフ構成をとるものと思われる。14は胴部破片で地文に燃糸Rが縦回転施文されている。

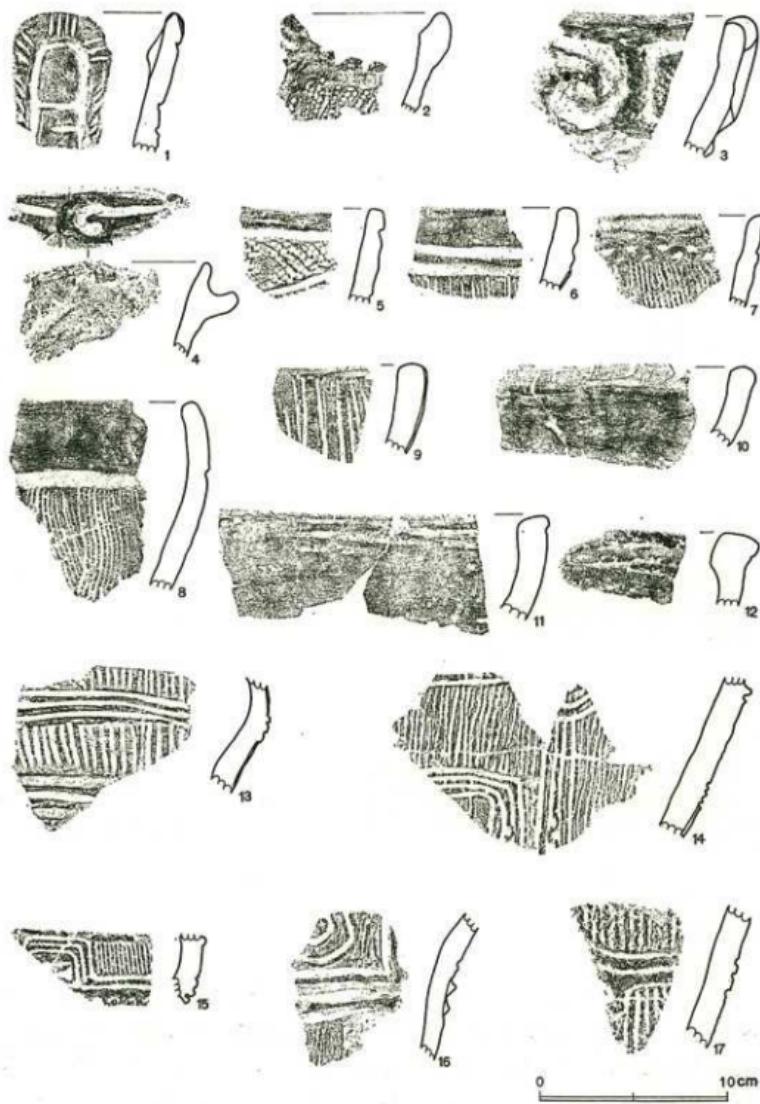
4は無文で小波状口縁をなす。口唇上には沈線が加えられている。

6～8は口縁が内傾ないしは直立気味に立つ深鉢形土器と思われる。6は口唇無文部下に2本の平行沈線が横走する。地文は縦に櫛齒状の沈線が加えられている。7は口唇無文部下に交互刺突文が横走する。口唇は内反り気味である。施文は燃糸Rの縦回転施文で、形状から連弧文系土器と思われる。8は口唇がやや強く内湾する深鉢形で、口唇無文部下に幅広の沈線が廻らされている。地文は蛇行する櫛齒状沈線が描かれている。9は口唇直下より粗い櫛齒状沈線が垂下するのみである。

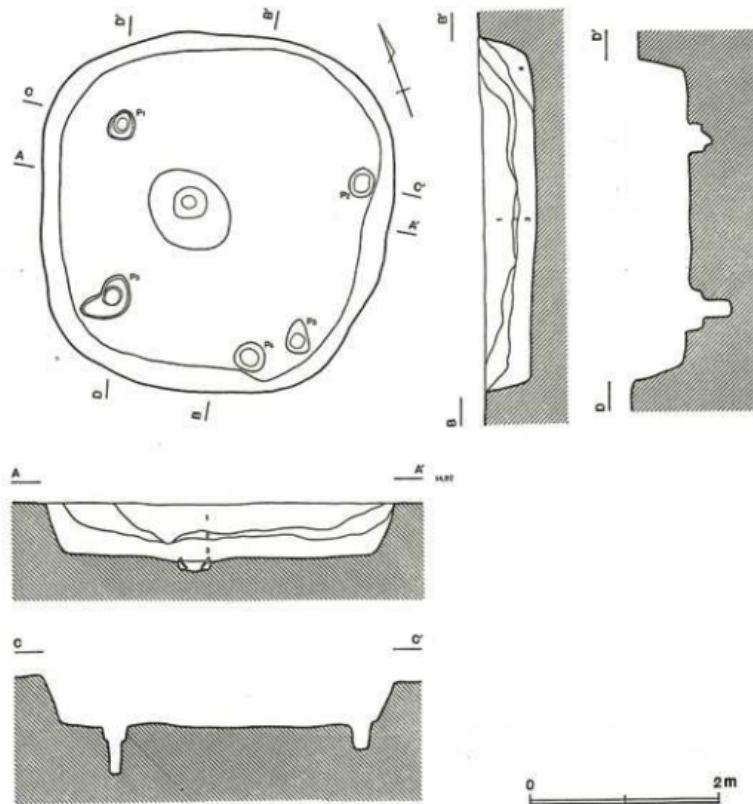
10～12は無文の土器群を示した。口縁は10が直立気味、11は内湾気味に立つ。12は口唇が肥厚し内面に棱をもち、あるいは浅鉢形土器の可能性もある。

15～17は勝板式の胴部破片である。15は差金状の区画内を部分的に縦の細かい沈線で充填している。16、17は2本で一対の隆帯で文様が描かれ、16は隆帯断面が三角形をなす。16、17ともに施文





第34图 第7号住居跡出土土器



第35図 第8号住居跡

は燃糸Rの継回転施文である。

第8号住居跡（第35～39図）

第1次調査区A～B～18～19グリッドに位置する。径3.8m前後の隅丸方形を呈し、北東壁コーナ部でやや張り出した形状をもつ。掘り込みはハードロームに達しており、確認面からの深さは60cm前後を測る。壁、床面ともに極めて良好な状態を保っており、床面全体が堅く踏みしめられたような状態を呈していた。覆土は4層が確認された。概要は以下の通りである。

第1層 黒褐色土・ローム、炭化物粒子を少量含む。粘性弱。

第2層 明褐色土・ローム、焼土粒子を少量含む、やや粘性有り。

第3層 明褐色土・ロームを小ブロック状に含む粘性の強い層。

第4層 暗黄褐色土・壁崩落土と思われる。ロームをブロック状に含み極めて粘性が強い。

柱穴は壁に沿って P₁～P₅ が確認された。全体に南西寄りに構築され、北東壁と P₁、P₅ との間に若干の空白部がみられる。深さは P₁=25cm、P₂=49cm、P₃=28cm、P₄=40cm、P₅=46cm を測り、P₁、P₅ は2段の掘り込みをもつ。

炉跡は埋甕炉で、中心部から北西壁寄りに位置している。長径92cm×短径78cmの梢円形状に極めて浅い掘り込みがみられ、掘り込み北側に炉体土器（第37図-1）が埋設されていた。埋設部は径36cm前後で方形に掘り込まれ、最深部で15cmを測る。覆土は3層が確認された。

第1層 明褐色土・焼土粒、ロームブロックを含む。

第2層 暗褐色土・焼土、炭化物粒子を含む。

第3層 明褐色土・ロームブロック土（炉体土器固定のために貼られたものと思われる）。

遺物は実測可能な土器5個体を含め、多量の遺物が出土した（第37～39図）。

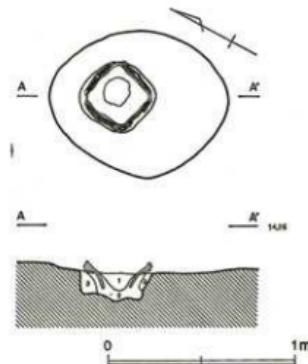
第37図1は炉に使用されていた土器である。4単位の波状口縁を呈し、3単位の弧状の把手と1単位の頂部が丸味をもつ大把手を有する。口縁部文様帯は幅が狭く、板状に粘土を貼りつけ、文様帯の幅を広くとるために外方に鷲状に大きく突出している。頭部無文帯、胴部文様帯は3本の平行沈線で分帶される。胴部文様帯は3本の懸垂文で3単位に区画され、口縁部の把手とは分割が異なる。文様は沈線で描出され、地文である繩文R Lの斜位回転施文後に直線的な2条と曲線的な対向する1条の沈線文が描かれている。口径36cm、現存高21cmを測る。

同図2は口縁部破片から器形復元した。口縁部と胴部文様帯を断面台形の隆帯で分離し、隆帯に沿って円形刺突が加えられている。口頸部との境には2本の平行沈線が廻らされている。胴部は「匂」字形に沈線文が施文されるものと思われる。地文はR Lの斜位回転施文で、全面に施文され胴部文様は繩文施文後に描出され、沈線内が磨消されている。推定口径23.5cm、現存高14cmを測る。

同図3は口縁部破片から器形復元した。口唇部は丁寧にナデられ幅広く、口唇に沿って2列の円形刺突文が廻らされている。刺突文下には、2本1組の懸垂文が垂下する。懸垂文内には浅い沈線が斜位に施文され、部分的に懸垂文を挟んで絞杉状を呈している。推定口径27cm、現存高6.7cmを測る。

同図4は胴部のみの復元である。地文は燃糸Lが斜位に施文されている。推定底径12.6cm、現存高21cmを測る。

第37図5は、頭部で大きくくびれ、口縁が内湾気味に立つキャリバー状器形を呈する。胴部は中位で張り、底部にむかってゆるやかにすぼまる。口縁、胴部に文様帯をもち、頭部は無文帯となり、



第36図 第8号住居炉跡

3本の平行沈線で胴部と区画されている。口縁部文様は主文様である3単位の「の」字状隆帯文から成り、隆帯に沿って一端が渦巻く沈線と、菱形状を呈する沈線が区画上下の継の短沈線を境いに交互に施文されている。沈線間は幅の広い継沈線で充填されている。胴部文様は複節R L Rの斜位回転した地文上に、右回り2単位と左回り1単位の3本の平行沈線文が施文され、更に1単位、弧状の3本平行沈線文が空白部に加えられている。口径18cm、器高23.5cmを測る。器面は剥落が著しい。

第38～39図に拓影を図示した。第38図1～2、第39図7～11は勝板式に比定される。第38図1は口縁部に長方形区画文をもつと思われる。区画内には継沈線が充填される。同図2は口縁部文様帶が幅狭で突出し、小波状沈線文が施文される。第39図11は継位区画文をもつ。竹管内面による半隆起帶内を刻目文で充填している。同図7は繩文のみで無文口唇に小突起をもつ。8は沈線文を基調とするものと思われる。9、10は無文で、10は口唇下に沈線が廻る。

第38図4～10は加曾利E式に比定される。4～8、10の口縁部文様は断面カマボコ形の隆帯を2本平行に貼付して文様を作出している。隆帯に沿って沈線が加えられているほか、隆帯内にナゾリが加えられている。4は小波状口縁をなすものと思われる。10は山形波状口縁である。地文は4がR Lの斜位回転、10がR Lの横回転である。5、8が撚糸Rの横回転、7が撚糸Rの継回転である。9は幅の狭い口縁部文様帶に沈線による渦巻文、長方形区画文が施文される。器面は丁寧にナデられており、前記の土器群より時間的に後出の要素を有している。

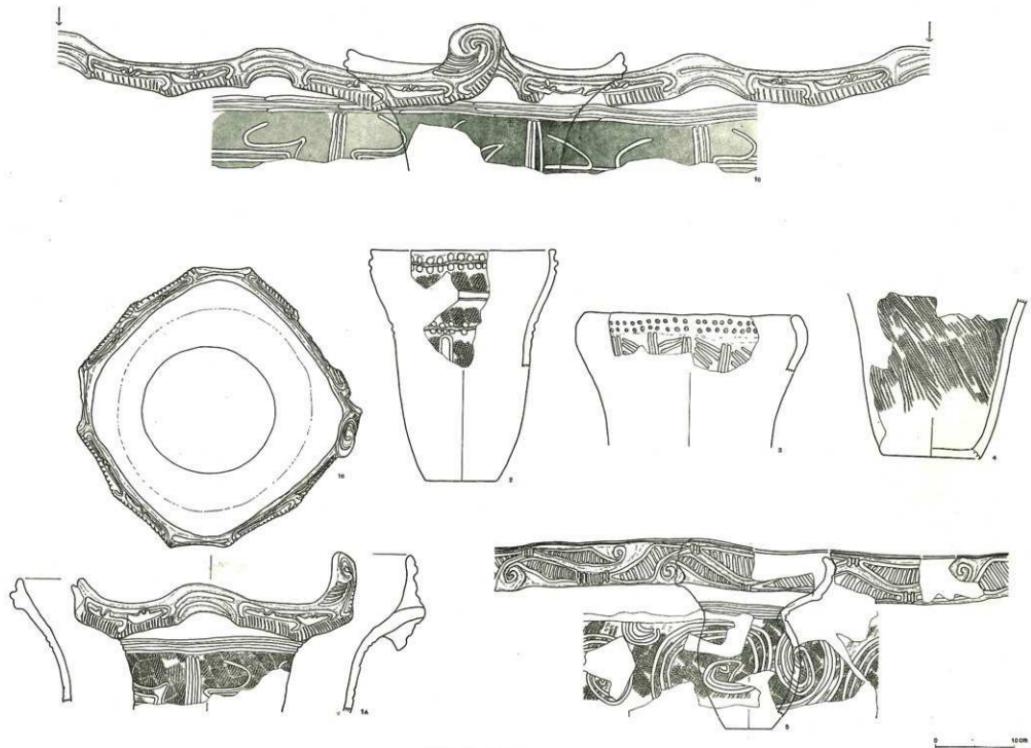
第39図1～2、4は所謂「重弧文」系統の土器に相当する。1は突起を有し、梢円形隆帯が口唇に廻る。隆帯内はナゾリが加えられている。4は「S」字状隆帯が突起を中心貼付されている。2は平縁で、幅の狭い口縁部文様帶には同心円状に弧線が描かれている。5は長方形区画内を継沈線で充填している。

第39図3、6は連弧文系土器に比定されよう。3は口唇に沿って印刻状に交互刺突文が廻らされている。6は円形の交互刺突文内に、平行沈線により振幅のゆるい連弧文が描かれている。

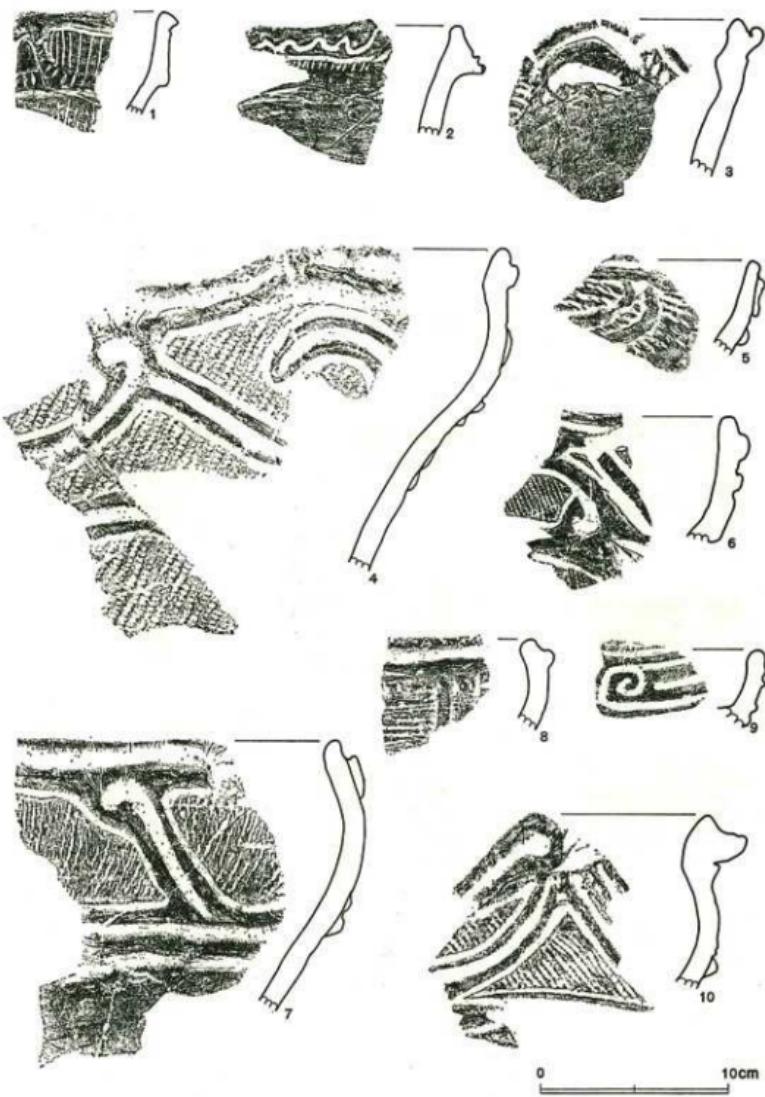
第39図12～18は加曾利E式の胴部破片を一括した。12、15は地文がRの撚糸文で、断面カマボコ形の隆帯を2本貼付して懸垂文、区画文となす。いずれも隆帯の幅は狭く、地文施文後に貼付される。13は口縁部破片、無文帶をもち、口縁部文様は隆帯貼付によりなされ、区画に沿った沈線内には継の沈線が充填されている。14は口頸部で隆帯によって区画された無文帶をもつ。胴部地文は撚糸Rの継回転である。

16は頸部下端から胴部の破片で、横位に廻る2本の沈線に接して3本の沈線が垂下するものと思われる。地文はR Lの斜位回転施文で、繩文施文後沈線が描かれている。沈線内に磨消手法をもたない。

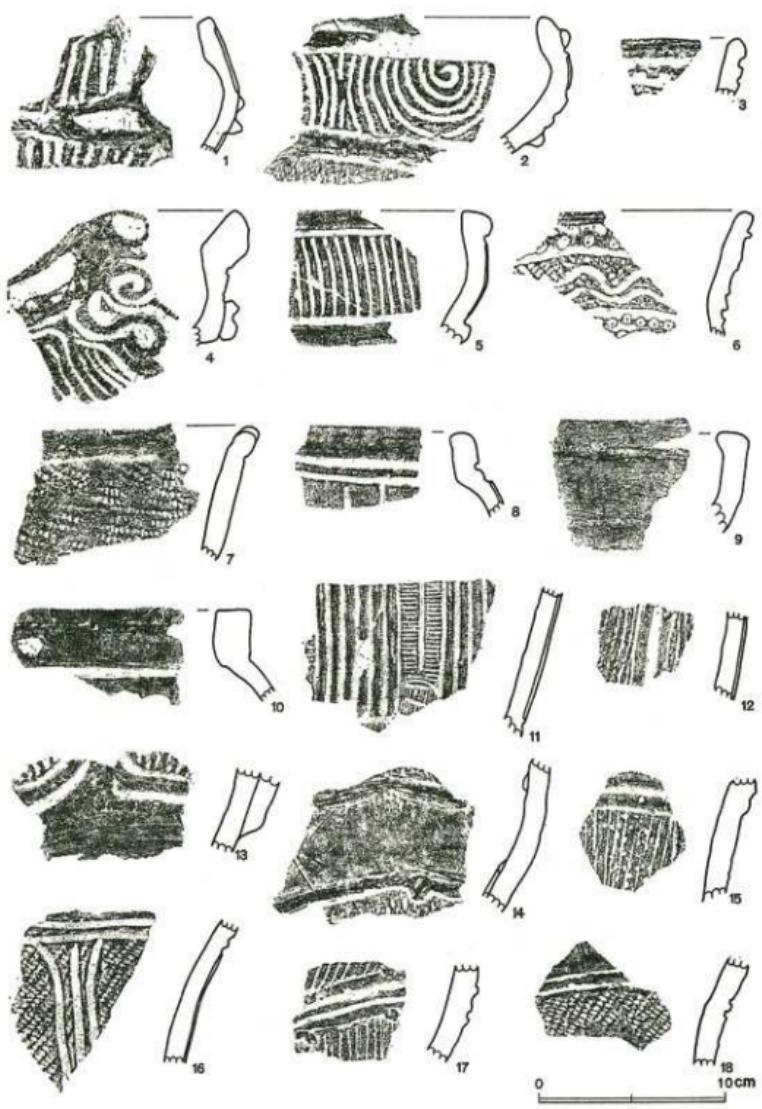
17は2本の隆帯内を細かい沈線で充填している。18は無文帶と、R Lの原体を斜位回転した胴部破片で、共に文様の実態は不明である。



第37圖 第8号住居跡出土土器（1）



第38図 第8号住居跡出土土器（2）



第39图 第8号住居跡出土土器(3)

第9号住居跡（第40～44図）

第1次調査区A～B～22～23グリッドに位置する。長径5.7m×短径5.1mの椭円形を呈する。壁は北側で直線的に掘り込まれた部分もあるが、大部分は丁寧に掘り込まれている。床面は平坦であるが、掘り込みが浅いために、良好な遺存状態を呈していない。東側から西側にゆるく傾斜している。床面までの深さは30～38cmを測る。覆土は4層からなる。

- 第1層 黒褐色土・ローム、焼土粒子を少量含む。しまり、粘性に乏しい。
 - 第2層 暗褐色土・ローム、焼土、炭化物粒子を含む。炉跡付近で焼土の混入が多い。
 - 第3層 暗黄褐色土・壁崩落土。ローム質で地山より若干色調暗く、粘性に富む。
 - 第4層 暗黒褐色土・ローム粒子少く、焼土、炭化物粒子の割合が多い。粘性、しまりに富む。
- 床穴はP₁～P₆まで検出された。壁に沿って掘り込まれており、北西部から南東部にかけては、壁の立ち上がり面まで40cm前後の空白部をもち、西壁側で壁面に接するようになる。形態はP₁、P₂が不整椭円形、P₃、P₄が長方形を呈し、他は円形に掘り込まれている。P₄は本住居跡に伴うか否か不明である。床面からの深さはP₁=53cm、P₂=52cm、P₃=31cm、P₄=18cm、P₅=16cm、P₆=54cm、P₇=21cm、P₈=28cm、P₉=49cmである。P₅、P₆は重複しており、先後関係はP₆→P₅であると思われる。

炉は、床面西寄りに位置し、P₅、P₆に近接して構築されている。長径0.8m×短径0.4mの隅丸長方形を呈し、西側に径0.4mを測る一段深い円形の掘り込みをもつ。東側には浅い段をもつ。床面からの深さは6～12cmを測り、部分的に焼土が堆積していた。周辺に火熱を受けた痕跡は認められなかった。

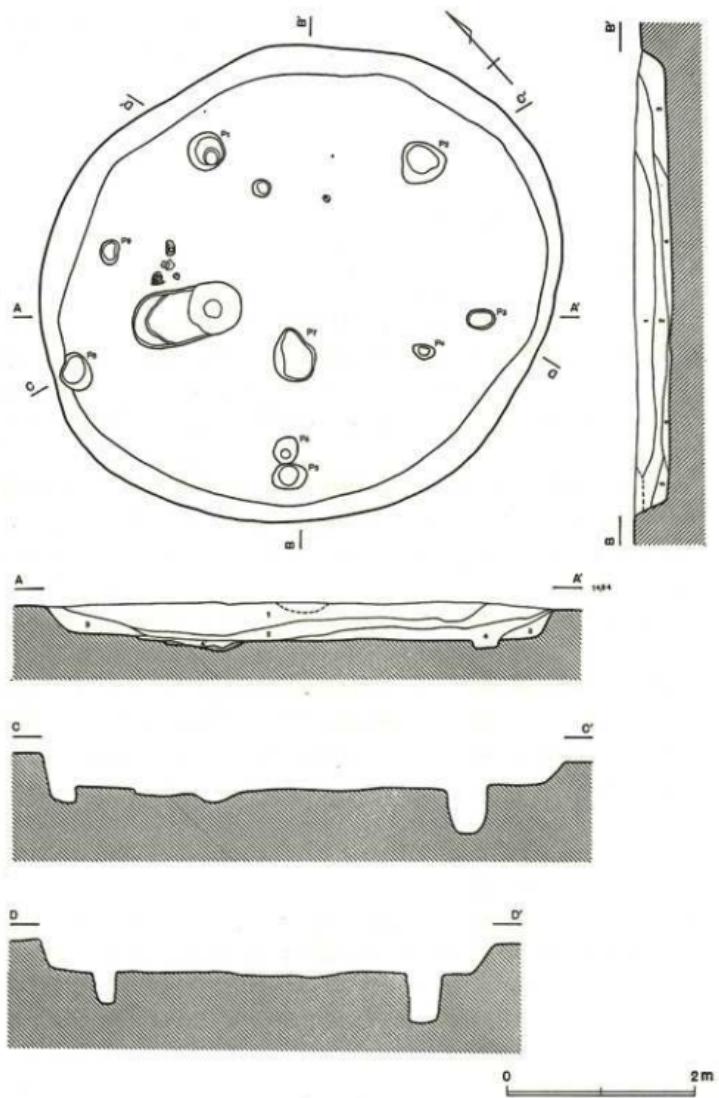
遺物は石皿破片が炉跡跡から出土している他、土器は器形復元し得る5個体を含め、比較的多くの資料が出土している。

第42図1は口頭部破片から器形復元した。2本の隆帯が端部で渦巻状に貼付され、上・下は文様帯を区画する隆帯に接している。隆帯間に沈線が施されており、隆帯は面取り状にナデられ弱い稜をもつ。地文はR Lの繩文が口縁部文様帯内部では綱に、頭部では斜位に施文されている。推定口径36.6cm、現存高は15.2cmを測る。

同図2は口縁が大きく開くキャリバー形を呈し、口縁部に端部が丸味を帯びた長方形、胴部に長方形のそれぞれ沈線文をもつ。地文はR Lの繩文が綱施文され、区画外は丁寧に磨消されている。推定口径24.3cm、現存高11cmを測る。

同図3は口縁部の幅が狭く、直線的に立ち、胴部は直線的にすぼまる深鉢形土器である。口縁部文様帯は3単位構成をとるものと思われ、隆帯による渦巻文と長方形区画文が配される。区画内部、口縁部文様帯を画する下段の隆帯上に沈線が加えられている。胴部は1～2条の沈線で直線、及び蛇行する懸垂文が施文される。地文は擦りの太い繩文R Lが綱に施文されている。口径34.5cm、現存高25.3cmを測る。

同図4は口縁が内湾気味に開く深鉢形土器で、口縁部には右下がりの沈線が密に施され、その下に横長の粘土紐が貼付されている。地文はR Lの繩文が間隔をあけて綱施文されている。推定口径18cm、現存高5.2cmを測る。



第40図 第9号住居跡

同図5は口縁が直線的に強く外反する浅鉢形土器で、内面に稜をもつ。口唇上は丁寧にナデられた平坦面をもつ。推定口径43.5cm、現存高10.6cmを測る。

第43～45図に拓影を図示した。第43図1～3は勝坂式土器で混入である。3は口唇に隆帯が貼付され、口唇上に刻みをもつ。

第43図4～11、第44図5～7は隆帯で渦巻文、長方形区画文をもつ土器群である。第44図4～6は口縁部文様帶が幅狭く、比較的小形の土器と思われる。同図8は渦巻文は小さく、区画文内に取り込まれている。同図7～11は隆帯に沿って幅広い沈線が描かれる。何れも口唇に無文帶をもつ。地文は4が撚糸R、5、7～9、11がRL、10がLRである。第44図5～7は地文は5がLR、6～7はRLである。

第43図12～17、第45図1～4は連弧文系文器である。1は口唇下の沈線に接して「U」字状に單位の大きな連弧文をもつ。第45図1～3は3本沈線で、2は弧線の播出がしっかりしている。第43図13～15は口唇部に交互刺突文、14は円形刺突文をもつ。同図16～17は2本沈線で播出され、弧線頂部は口唇に接している。地文は第43図13が撚糸R、同図12、14～17、第45図1～3がRLの繩文である。

第44図1～2、13～14、第45図5～7、13は地文上に沈線で区画され文様播出される一群である。第44図1は口唇に3条の沈線が廻り、それに接している3条の懸垂文をもつ。地文は撚糸Rである。

同図2は口縁部に梢円形の沈線文をもつ。同図3は渦巻文をもつ胴部破片である。同図14は3条の横に廻る沈線に接して、弧状の対向する沈線で区画されている。地文は2、3が繩文RL、14がRLである。第45図5は2条の沈線を横位に廻らせ、沈線間は磨消されている。横位沈線下に曲線的な沈線文をもつ。同図6は口頭部と思われる。沈線区画下は繩文が磨消されている。同図7は3条の沈線で縱に区画し、更に横方向に廻る沈線と接している。沈線間は磨消されている。地文は5、7が繩文RL、6が繩文LRである。同図7は縱の細い櫛歯文上に横位に廻る沈線と、それに接して縱位に3条の沈線が垂下する。

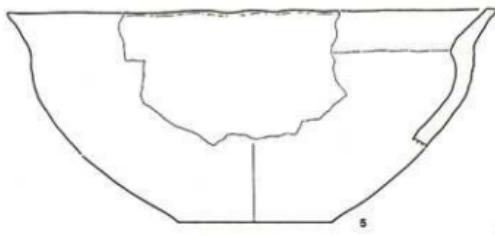
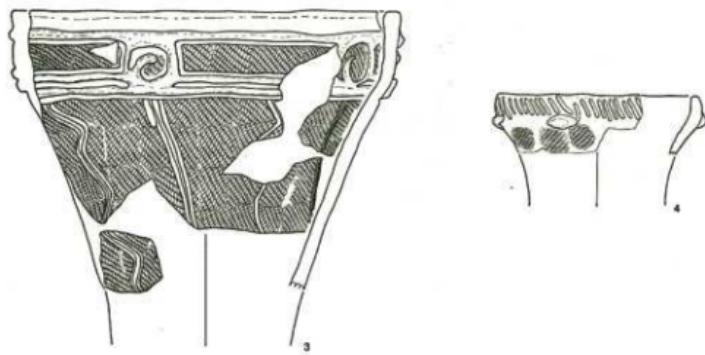
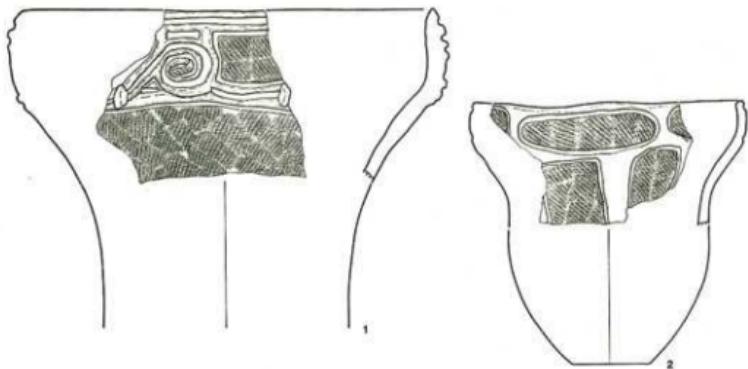
第44図3～4は無文口唇部である。3は口唇上が平坦にナデられている。4は口唇中位で若干張る。

第45図16は断面カマボコ形を呈する隆帯を横に蛇行させて貼付し、更に上位から直線的に貼付された隆帯と接している。

第44図8～10、12、16、第45図8～12、17は懸垂文をもつ胴部破片である。第44図8、12、第45図8～10は沈線間に磨消をもたない。第44図8は接合部に指頭圧痕が残る。第45図8は横位沈線と懸垂文間に円形の沈線が播出されている。同図9は蛇行する懸垂文をもつ。地文は第44図8、12が繩文RLである。他は繩文LRである。9は底径11cmを測る。地文は繩文RLである。

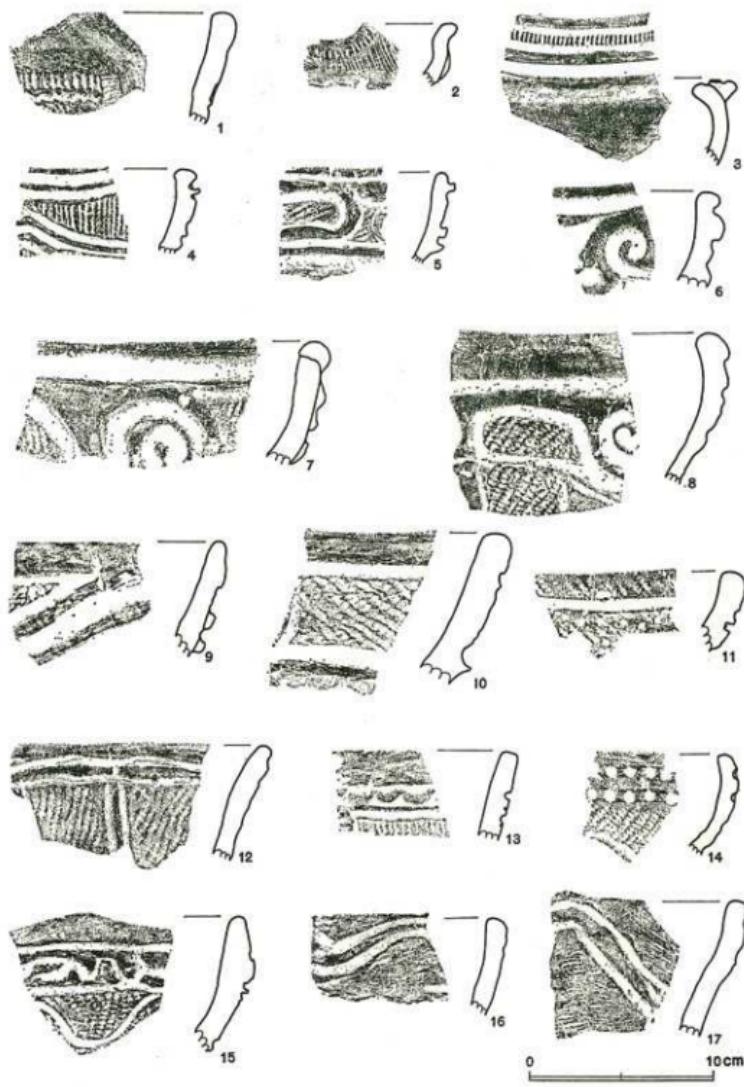
第44図9～10、16、第45図11～12は懸垂文内が磨消されている。第44図16は懸垂文内に対向する弧状の沈線が配される。地文は第44図9、16が繩文RL、同図10がRLとLRL、第45図11がLR、12は節の細かな繩文RLである。

第45図15は縱方向の粗い櫛歯文をもつ胴部破片である。

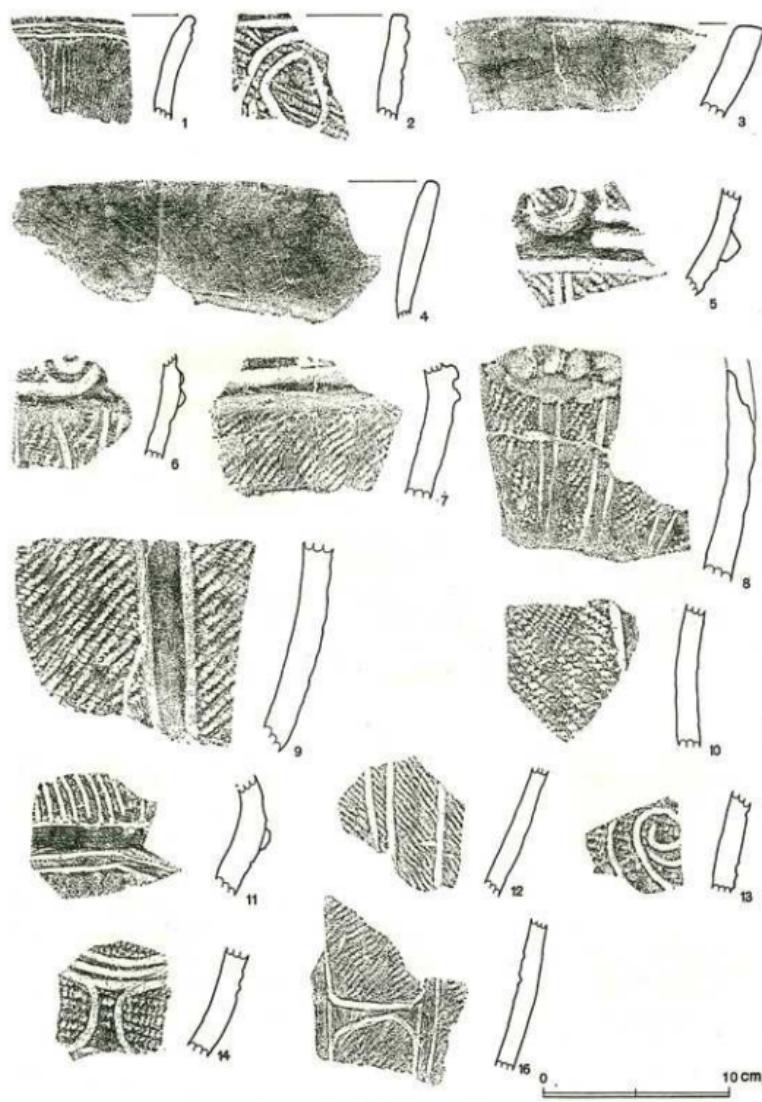


1cm

第41图 第9号住居跡出土土器(1)



第42図 第9号住居跡出土土器（2）



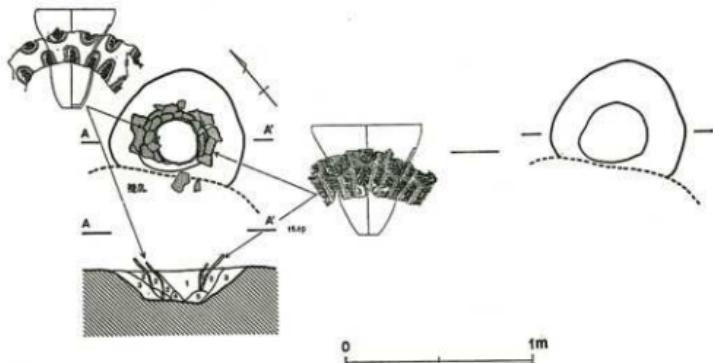
第43图 第9号住居跡出土土器(3)



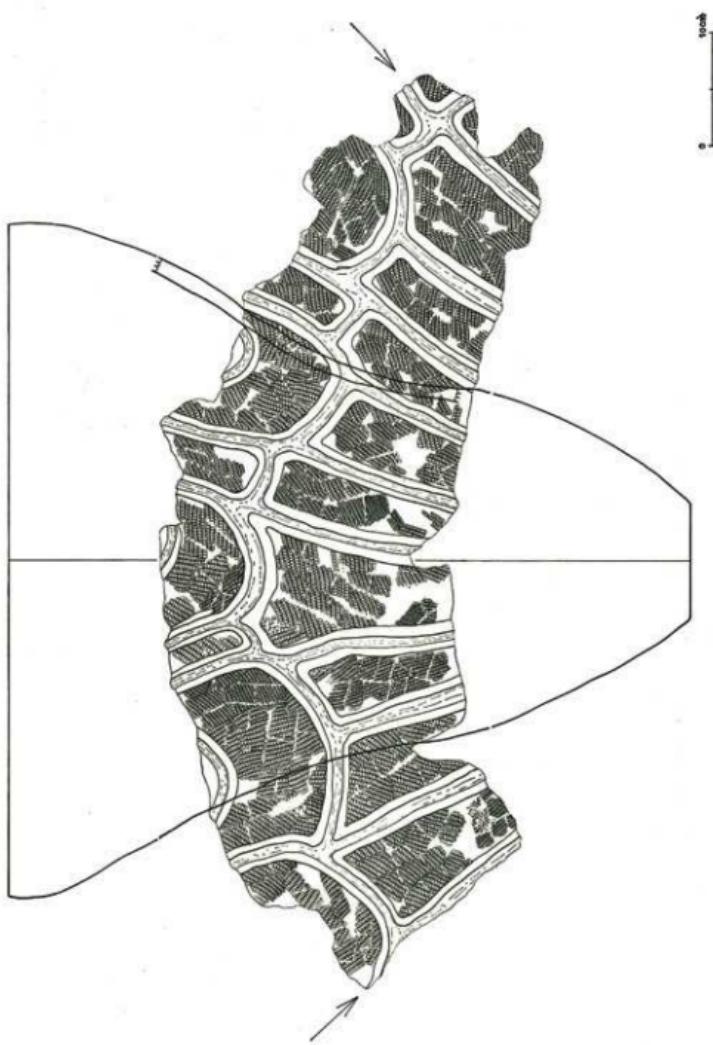
第44図 第9号住居跡出土土器（4）

第10号住居跡（第45～47図）

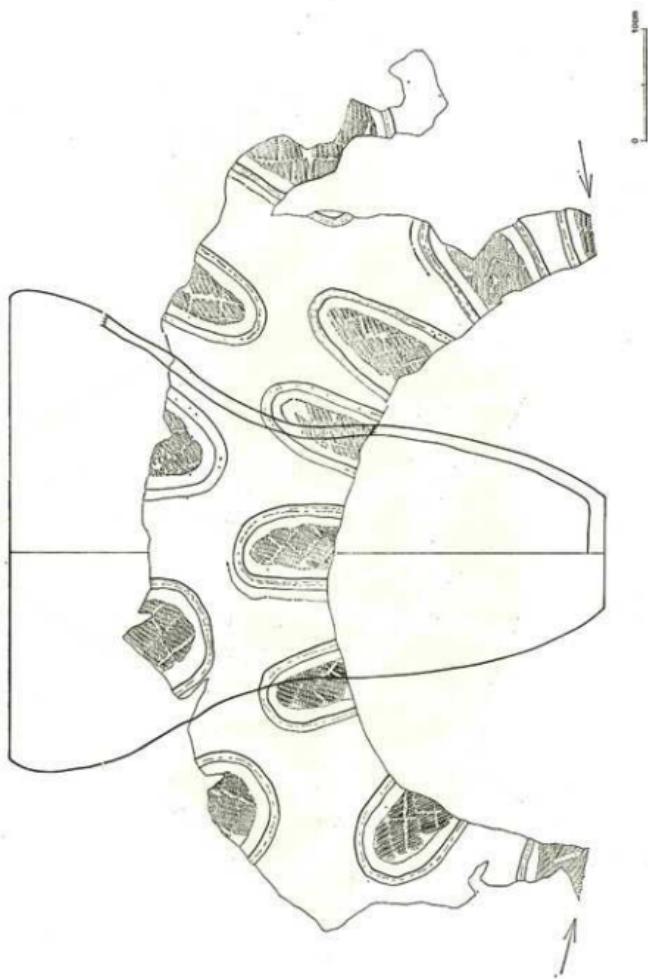
第1次調査 F-13グリッドに位置し、第5、11号住居跡の中間に位置する。検出されたのは炉跡のみで、柱穴、壁等を確認することはできなかった。炉跡東側は擾乱を受けており、西側では確認面に焼土、炭化物粒子のひろがりを示していた。縦って、遺構の全容を確認することはできなかった。炉跡は南北径72cmを測り、梢円形を呈するものと思われる。掘り込みは断面擂鉢状を呈し、深さは20cm程度である。埋甕炉であり、外側に（第47図）が、内側に（第48図）が埋設されていた（第45図）。土層観察から、外側を使用後、径の小さい深鉢（第48図）を埋設したものと思われる。土器の東側は擾乱のため失われている。覆土は5層が確認された。第1層 暗茶褐色土・焼土、炭化物を含む。第2層 暗褐色土・焼土、炭化物を含む。第3層 暗黄褐色土・ローム質で粘性極めて強い。第4層 赤褐色土・焼けたロームブロック土。第5層 暗黄褐色土・ロームブロックで、第4層とともに、土器の安定を図るために貼られたものと思われる。遺物は炉跡に用いられた2個体が出土したに過ぎない（第47、48図）。第47図は炉跡外側に埋設されていた土器である。胴部のみの残存で擾乱により耳が欠失している。胴部文様はくびれ部を境に上部が渦巻文、下部が長方形の区画文で構成される。隆帯は偏平で断面台形を呈し、周辺にナゾリが加えられる。地文はR Lの縄文が縦位に充填されている。推定口径60cm、現存高27.5cmを測る。第48図は内側に埋設されていた土器で、第47図より小型である。文様は胴くびれ部を境いに、「U」字形のモチーフで構成され、7単位となるものと思われる。隆帯は断面台形で、第48図に比べ丸味をもち隆帯に沿ってナゾリが加えられている。区画内には縄文R Lが斜位回転で粗く充填され推定口径43cm、現存高25cmを測る。



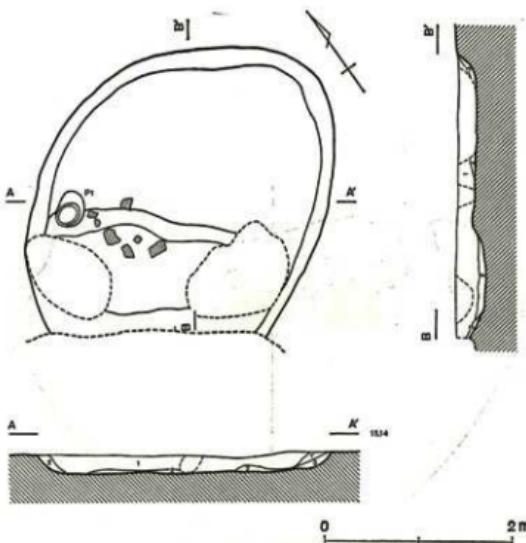
第45図 第10号住居跡



第46圖 第10号住居跡出土土器（1）



第47図 第10号住居跡出土土器（2）



第48図 第11号住居跡

第11号住居跡（第48～50図）

F—14～15グリッドに位置し、遺構西側は第2次調査区にかかる。住居跡は西壁が擾乱のために失われ、床面上にも及び、良好な状態とは言えない。調査部分から推定すると一辺3.5m前後の隅丸方形を呈するものと思われる。床面は全体に堅く踏みしめられたような状態を呈し、凹凸が著しい。確認面から15cm程度掘り込まれ、床面中央部から南西側にかけて更に15cm程度掘り込まれた落ち込みをもつ。土層観察から本住居跡に伴うものと思われ、所謂ベッド状遺構に近い形態であろう。土層は覆土全体に擾乱が及び、堆積状態は不明瞭であった。概要は以下の如くである。

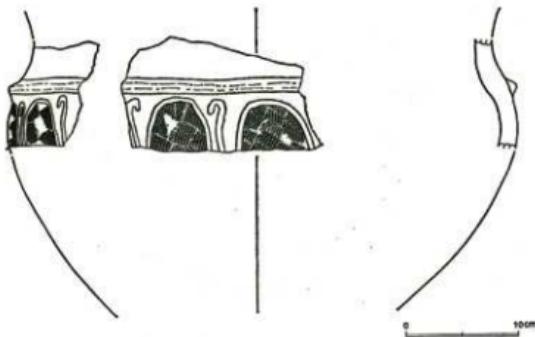
第1層 黒褐色土・炭化物粒子を多く含む。著しく擾乱を受け、性状は不明瞭である。

第2層 暗褐色土・径2～4cmのロームブロックが少量含まれる。

第3層 暗黄褐色土・壁崩落土と思われる。ローム質で粘性に富み、地山より若干暗い。

柱穴は僅にP₁が確認されたに過ぎない。床面から14cm掘り込まれている。遺物の出土は極めて散漫で、土器片が床面落ち込み部から少量出土した程度で、遺構の明確な時期決定はできなかった。器形復元し得る個体は僅に1個体に過ぎない。第50図は口縁が強く外反し、胴上半に最大径をもつ鉢形土器である。口縁部は無文で、胴部は「匂」字形の沈線文を持ち、文様間には上端がカギ状の沈線が垂下する。沈線間にはR Lの繩文が充填されている。最大径45cm程度と思われる。

第51図に拓影を示した。1、5、6、7は勝板式に比定される。1は梯状工具が隆帯に沿って引かれている。5は隆帯に沿って爪形文が施される。6は隆帯が「エ」字状に貼付され、竹管内面



第49図 第11号住居跡出土土器（1）

による爪形文が施されている。7は沈線による半隆起帯で文様描出されている。

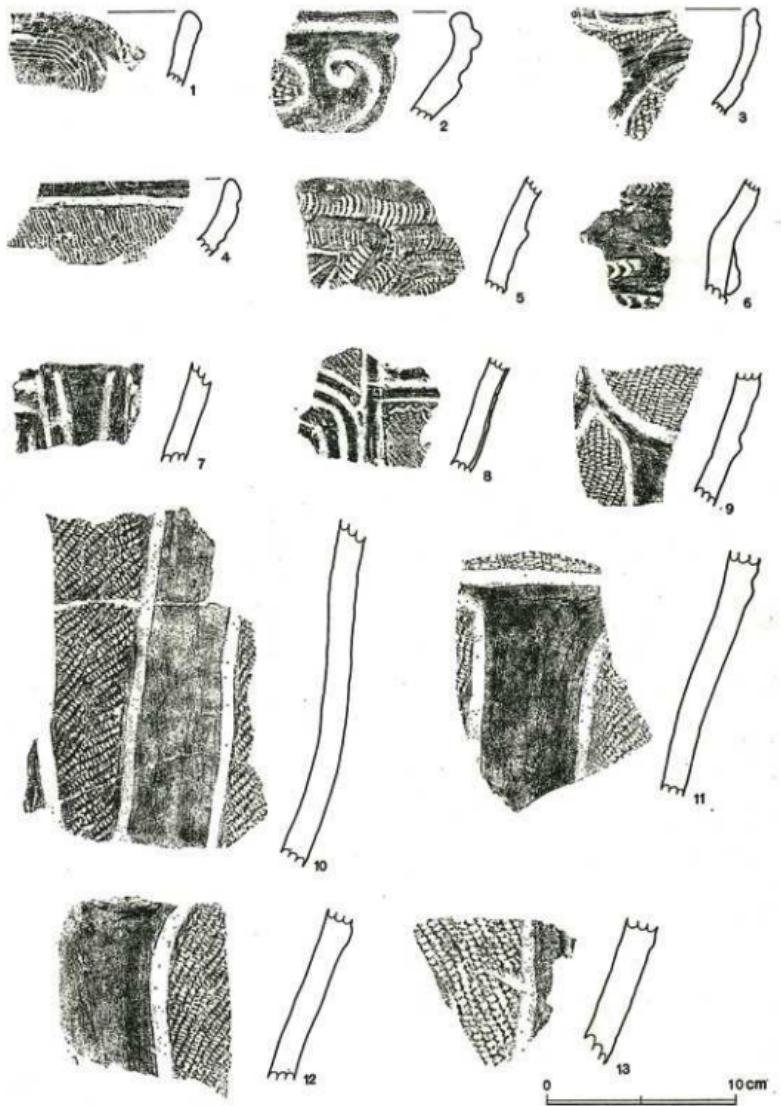
第51図2～4、8～13は加曾利E式に比定される。2は渦巻文と長方形区画文から成り、区画にそって沈線が施され、沈線間には綱文RLが施文される。3は口縁が内湾気味に開き、2本の平行沈線による曲線的なモチーフを持つ。地文は綱文RLで、沈線間は磨消されている。4は口縁に沿って沈線が廻り、沈線下には櫛歯文が波状に施文されている。8は隆帯に沿って沈線が加えられており、モチーフは不明。9～12は同一個体と思われる。渦巻文、懸垂文で文様構成される。沈線間は磨消されている。地文はRLの綴回転施文である。13も同様の土器と思われる。

第12号住居跡（第51～52図）

第1次調査区B～C—40～41グリッドに位置する。調査区中最も北寄りの住居跡である。遺構は攪乱が顕著で、東壁側の立ち上がりは不明瞭であった。床面は皿状に掘り窪められており、中央部から西壁にかけて更に一段深く掘り込まれている。最深部は確認面から48cmを測る。

覆土は調査区北壁で6層が確認された。概略は以下の通りである。

- 第1層 黒褐色土・耕作土で、有機物を多量に含む。粘性、しまりともに極めて乏しい。
- 第2層 淡褐色土・耕作土で1層より赤み帯び、粘性、しまりともに1層より強い。
- 第3層 暗褐色土・焼土粒子を少量含み、粘性、しまりともに乏しい。
- 第4層 暗黒褐色土・ローム、炭化物、焼土粒子を多量に含み、粘性、しまりともに乏しい。
- 第5層 明褐色土・包含物は4層に近似する。粘性強。
- 第6層 茶褐色土・炭化物粒子、ロームブロックを少量含む。



第50圖 第11號住居跡出土土器（2）

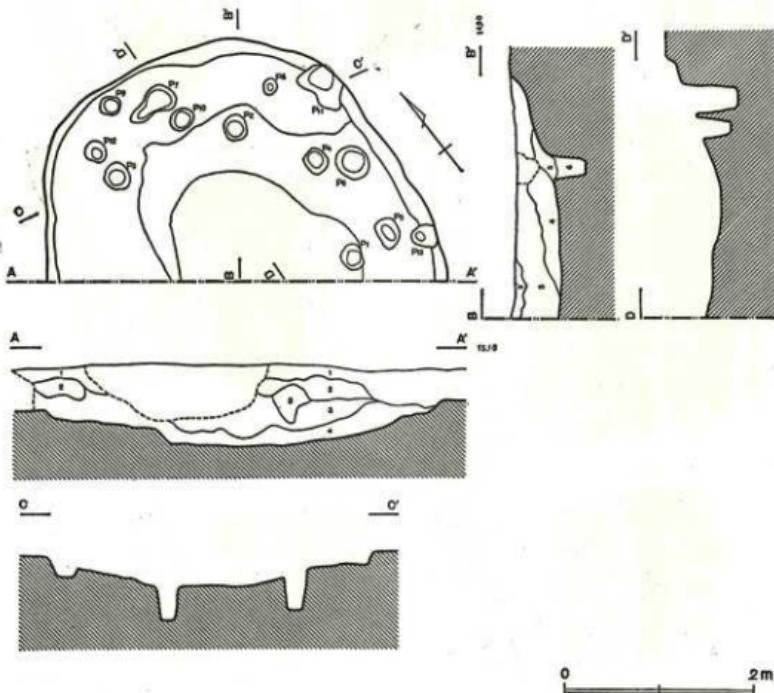
床面はロームの堆積状態が不良で、特に南側の立ち上がりは不明瞭であった。床面の落ち込みは皿状に掘り廻められているが、土層に貼り床等の痕跡は認められなかった。

柱穴は床面の落ち込み部から壁間に $P_1 \sim P_{13}$ が 2 ~ 3 列にわたって構築されていた。床面からの深さは各々、 $P_1 = 30\text{cm}$ 、 $P_2 = 31\text{cm}$ 、 $P_3 = 50\text{cm}$ 、 $P_4 = 23\text{cm}$ 、 $P_5 = 65\text{cm}$ 、 $P_6 = 56\text{cm}$ 、 $P_7 = 65\text{cm}$ 、 $P_8 = 27\text{cm}$ 、 $P_9 = 18\text{cm}$ 、 $P_{10} = 38\text{cm}$ 、 $P_{11} = 26\text{cm}$ 、 $P_{12} = 69\text{cm}$ 、 $P_{13} = 26\text{cm}$ を測る。概して壁寄りの柱穴が深く掘り込まれる傾向を示している。

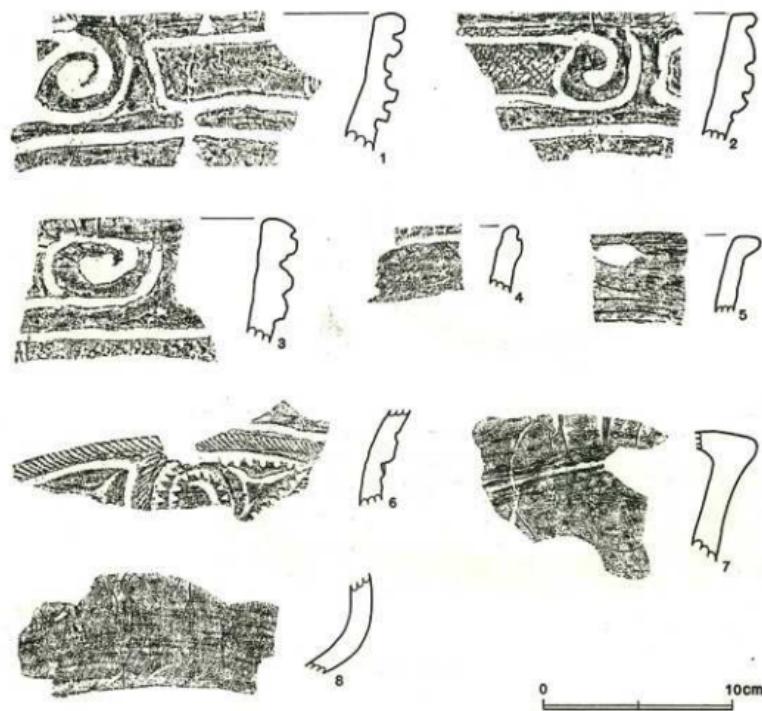
炉跡は検出されていない。住居形態から壁寄りに接して構築されている可能性が強く、調査区外東壁寄りに位置するものと思われる。

遺物は極めて散漫な出土状態を示しており、器形復元し得る資料を得ることはできなかった。

第52図に拓影を図示した。5 ~ 8 は勝板式に属する。5 は無文の口縁部で、口唇は外方に強く張り出している。器面は丁寧にナデられている。6 はキャリバー形で、胴部文様帶系の土器と思われる。断面台形の隆帯に沿って沈線が廻らされている。隆帯上には縄文 R L が継回転押捺され、区画



第51図 第12号住居跡

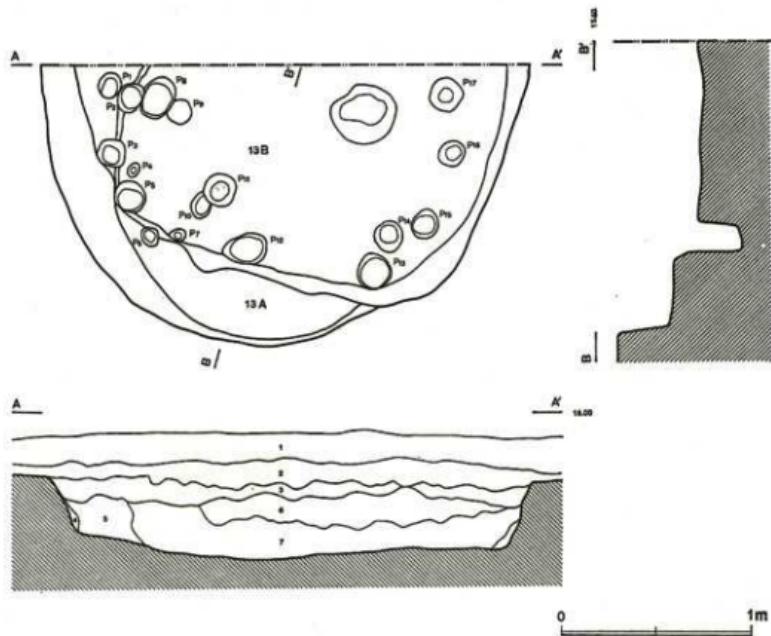


第52図 第12号住居跡出土土器

内には沈線で三叉状文が描かれている。第52図7は口縁部が直線的に立ち、口唇端部が内側に強く張り出す深鉢形土器で、文様帶は胴部以下に位置するものと思われる。口唇上から器面にかけて、丁寧にナデられ、器面は光沢を帯びている。8は、キャリバー形深鉢の口縁部で、6のような器形の上部に位置するものであろう。強く内湾する。

第52図1～4は加曾利E式に属する。1～3は同一個体に属するものかもしれない。貼付された隆帶は面取り状にナデられ、断面台形を呈する。隆帶に沿って引かれる沈線も幅広く深い。概に二重口唇は消失している。頸部無文帶の有無は不明である。地文は縄文LRが継回転施文され、隆帶は施文後に貼付されたものである。

4は無文の口唇部で、口唇下に沈線が廻らされ、内面は整形時の浅い窪みをもつ。



第53図 第13号住居跡

第13号住居跡（第53～61図）

第2次調査区H～I—15～16グリッドに位置する。造構西半が調査区外に在り、2軒の重複住居跡である。全容は不明だが、円形と、隅丸方形ないしは長方形を呈するものと思われる。造構は13A号住居跡を切って13B号住居跡が構築され、13A号住居跡は壁の一部を残すに過ぎない。確認面からの深さは13A号住居跡が東壁側で54cm、13B号住居跡が床面中央部で96cmを測る。覆土は7層から成る。

- 第1層 黒褐色土・表土層で腐蝕土から成り、粘性、しまり共に乏しい。
- 第2層 黒色土・表土で1層に比べ粘性をもつ。
- 第3層 明褐色土・径2～3cmのロームブロックを若干含む。
- 第4層 暗黄褐色土・ローム土で、13A号住居跡の壁崩落土と思われる。
- 第5層 赤褐色土・2層よりも黒色味強く、しまり、粘性ともに強い。13A住覆土。
- 第6層 黑褐色土・焼土粒子、ロームブロックを若干含む。13A住覆土。
- 第7層 褐色土・ロームブロック、焼土粒子を若干含む、粘性強い。
- 第8層 暗黄褐色土・第4層と同質で、13B号住居跡の壁崩落土と思われる。

床面は13A、B号住居跡とも良好な状態を示しており、13B号住居跡は中央部に向かってゆるい傾斜をもっている。柱穴はP₁～P₁₇が確認された。床面からの深さはP₁=56cm、P₂=48cm、P₃=63cm、P₄=71cm、P₅=60cm、P₆=55cm、P₇=58cm、P₈=49cm、P₉=39cm、P₁₀=27cm、P₁₁=51cm、P₁₂=60cm、P₁₃=62cm、P₁₄=56cm、P₁₅=60cm、P₁₆=49cm、P₁₇=38cmを測る。P₁、P₃～P₇は13A号住居跡に属するものと思われる。

炉跡は13B号住居跡のみ検出された。長径81cm×短径63cmの梢円形を呈し、最深部は床面から20cm程掘り込まれている。覆土は3層から成る。

第1層 暗赤褐色土・焼土粒子を若干含む。
第2層 赤褐色土・焼土ブロックを含む。
第3層 暗褐色土・ロームブロックを含む。
第1、2層間に焼土層を含む。炉は所謂「土器窯炉」で、系統の異なる2種類の土器が口縁部を中心に埋設されていた（第58図5、第60図）。

遺物は復元可能な土器9個体を含め、多量の遺物が出土している（第57図～第63図）。第57図1は口縁部に隆帯による「の」字文を貼付し、隆帯上に竹管文が加えられる。空白部には鋸歯状沈線が施される。胴部は撚糸の結状体が施される。推定口径13.8cm、現存高21cmを測る。

2は口縁部破片から器形復元した。口縁部文様帶は幅狭で、頸部に無文帶をもつ。文様帶は隆帯によって分带されている。口縁部は突起によって6単位区画され、各区画内には一端が渦巻く沈線内に、縱走する沈線が充填されている。口径30cm、現存高11cmを測る。

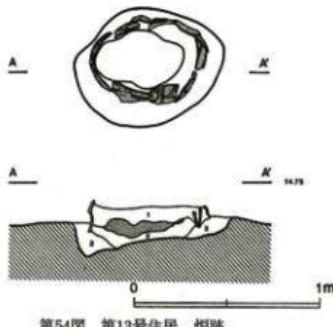
3は口縁が内湾し、底部から直線的に開く器形が推定される。口唇無文部は横ナデされている。口縁部文様帶は断面カマボコ状の太い隆帯によって区画され、文様は端部が渦巻く隆帯文で構成され、文様同志が接している。隆帯に沿って沈線が施されている。胴部は3本1単位の懸垂文内に、同様に3本1単位の縱、横位沈線文が施される。地文は撚糸である。推定口径35cm、現存高22.5cmを測る。

4は胴部破片で、2本1単位の懸垂文が垂下する。地文はR Lの繩文が斜位回転されており、沈線内には磨消が加えられている。現存高21cmを測る。

5は頸部でくびれ、口縁は直立気味の深鉢形土器で、口縁に沿って3本の平行沈線が廻らされ、沈線下には3本1単位の懸垂文が垂下している。地文は繩文R Lの斜位回転施文である。推定口径24cm、現存高19cmを測る。

第58図1は、胴部のみ。縦位の懸垂文で下部が幅狭く区画される。地文は縦回転の複節R L Rの繩文で、区画文間は磨消されている。現存高38cmを測る。

同図2は連弧文系土器である。口縁は直線的に外反し、口唇下に円形の交互刺突文が全周する。連弧文は3本の平行沈線で描かれ、くびれ部にかけて、2段にわたる。胴部には3本1単位の直線



第54図 第13号住居 炉跡

的、及び波状に垂下する懸垂文が交互に描出されている。地文は複節繩文R L Rが斜位回転施文され、磨消は加えられない。

第58図3は底部から直線的に外反する小形深鉢で、4単位の波状口縁を呈する。口縁下に2条の平行沈線が廻り、胴部は連弧文が粗く施文されている。地文は繩文R Lの斜位回転施文で、連弧文内部は磨消されている。

同図4は口縁が大きく外反し、肩部で張る深鉢形土器である。くびれ部に交互刺突文が廻り、胴部は2本一对の懸垂文をもつ。地文は繩文R Lの斜位回転施文で、部分的に継回転し羽状となっている。口唇は横ナデされている。沈線内の磨消はない。口径26cm、現存高13cmを測る。

同図5は口縁が強く外反し、中位より直線的に立つ。胴部中位に最大径をもち、球状を呈する。口縁部は無文で、口唇上は平坦である。胴部は2段分帯で、6単位に区画され、上段の文様帯には隆帯により対向する渦巻文が貼付され、1単位は蛇行する隆帯が下段に嵌入している。渦巻文は3本の隆帯で区画隆帯に接し、2単位は継の区画隆帯と接続されている。地文は繩文R Lしが継回転施文され、隆帯貼付、沈線描出は繩文施文後に施されている。

同図6は口縁部破片から器形復元した。4単位の波状口縁を呈し、口唇に沿って沈線が廻らされている。沈線下には交互刺突文が加えられる。口頸部に沈線文をもつ。地文は繩文R Lの継回転施文である。

第59図1は第58図5と共に炉跡に使用されていた土器である。頸部下半は欠失している。平縁で口唇下に沈線が廻る。下段が緩い弧状をなす枠状区画と梢円区画とで5単位構成される。枠状区画隆帯は沈線で2本隆帯となっている。区画内、頸部には撲糸Rが継、斜位回転施文されている。

第60～63図に拓影を図示した。第60～61図、第63図1～17は勝坂期に比定される土器群である。

第60図1は板状突起をもち、口唇に沿って爪形文と円形刺突文をもつ。内面に緩い稜をもつ。2は平縁で、口縁部は隆帯により三角区画文をもつ。区画内は隆帯に沿って幅広の爪形文、空白部は三叉文が施文されている。3は平縁で、口唇が肥厚し、口唇上に爪形文施文後、交互刺突が加えられている。

4～9、11～13は区画内に沈線が充填される土器群である。4は平縁で沈線による半隆起帯内部に継沈線充填後、横位に平行沈線が加えられている。6は突起部である。7はキャリバー状器形をなし、無文口縁下に隆帯による梢円区画文をもつ。隆帯上には刻目をもつ。区画内面は沈線が廻り更に継沈線が加えられている。8も同様の区画をもつ。9は内湾する緩い波状口縁をもつ。口唇は肥厚し、口唇下に継沈線が充填されている。11は器厚薄く口唇上に隆帯を貼付している。口唇は無文で、口唇下に沈線が廻る。沈線下に幅広の沈線が施されている。12は口唇から斜位に細かい沈線が施文されている。13は幅の狭い無文口縁下に扁平な隆帯による区画文をもち、隆帯上には刻目をもつ。隆帯に沿って沈線が施され、内部は細かな沈線が充填されている。

10は口縁が若干張る深鉢形土器で、撲糸Rの継施文後、口縁に沿って沈線が廻っている。

14は波状口縁を呈し、波状下に口縁に沿って幅広い沈線が廻る。15、17は平縁で、15は口縁が屈曲して外反する。17はキャリバー状器形を呈する。共に隆帯が波状に貼付されている。

第60図16、第61図1、3は地文に繩文をもつ一群である。16は突起部である。第61図1は繩文R

Lの地文上に磨消文をもつ。3は縄文R Lをもつ。

第61図4～14は口唇内面に稜をもち、器面の区画内に竹管文の顯著な一群を一括した。4は山形把手をもち、波頂部から垂下する隆帯に沿って沈線が施される。5～11は平縁で断面三角形の隆帯で窓枠状区画文をなし、区画内には5～7、10に所謂「角押文」、9、11に「有節線文」が施される。8は2列併行の角押文をもつ、区画内には竹管文と同一の施文具を用いた鋸齒状文が加えられる。7、8は竹管の背を用いて施文されたものと思われる。13は口縁が内湾気味に立つ。窓枠状区画をなすと思われ、隆帯は断面三角形である。口唇上及び隆帯に沿って二列に幅広の爪形文が施文される。14は口縁が内傾し口唇が直立する。隆帯は断面角形で口唇、隆帯上にR Lの縄文が施文される。隆帯に沿って角押文をもち、更に鋸齒状の沈線が充填されている。

15～18は無文の土器群である。15～17は口唇が肥厚し、上面が平坦である。17は浅鉢形と思われる。18の口唇は鋸り気味で内面に稜をもつ。

第62図15～第63図17は胴部破片を一括した。第62図15～第63図1～2は区画内に所謂「キャタピラ文」が顯著である。3は角押文をもつ。4～8は区画内部に沈線文と爪形文をもつ。9は窓枠状区画文をもち、区画内部にR Lの縄文が施される。10は地文に縄文L Rの縦回転施文をもち、地文上に角押文をもつ。11は沈線内に隆帯を鋸齒状に貼付している。地文は燃糸Lの縦回転施文である。13は隆帯に沿って角押文をもつ。14は山形把手を呈し、2本平行の角押文をもつ。15は竹管による条線をもつ。16は隆帯上に押圧が加えられている。17は隆帯による区画内に粗く沈線が充填されるのみで、竹管文は施文されていない。

第63図1～14、第64図18～20は加曾利E式に比定される土器群である。第63図1～4は連弧文系土器である。1は口縁が内湾気味に開く。口縁部文様帯は3本の平行沈線によって区画され、区画内には2本の平行沈線により連弧文が描かれている。上部の沈線は波頂部で左右に渦巻状となる。胴部は沈線で懸垂文を描くと思われる。地文は縄文R Lの斜位回転である。2～4は地文にR Lの縄文をもつ。3は器面の剥落が著るしい。

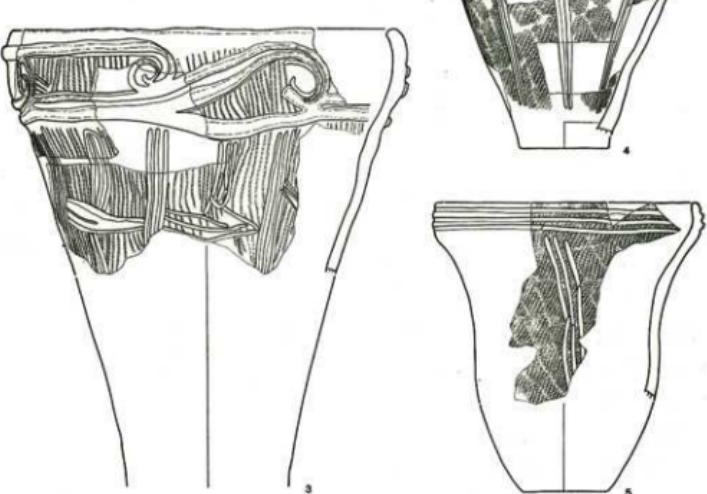
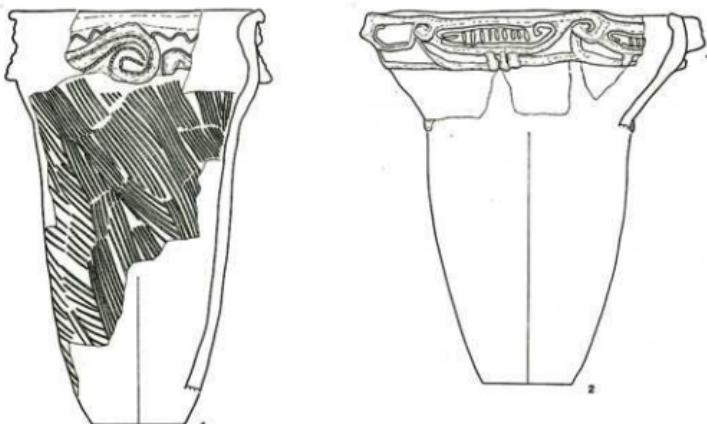
5は外反する口唇下に沈線が廻る。6は波状口縁を成すものと思われる。口縁に沿って沈線が廻り、沈線下には「匂」字形に沈線が施文されるものと思われる。7は口唇上が平坦で隆帯が貼付される。文様は隆帯貼付によって成され、隆帯に沿って沈線が加えられている。地文は縄文R Lの縦回転施文である。

8～9は柳状工具による文様をもつ。8は口唇に沿って横位に施文され、端部は渦巻状に施文されている。9は口唇に沿って沈線が廻る。口唇上、胴部には柳状工具で各々横位、蛇行状に施文されている。単位は8が8本、9が5本と思われる。

10は口縁が内湾気味に立ち、口唇より柳状工具で縦に粗く施文されたのみである。11は口唇に沿って廻る沈線下に小波状に柳状工具による施文が成されている。

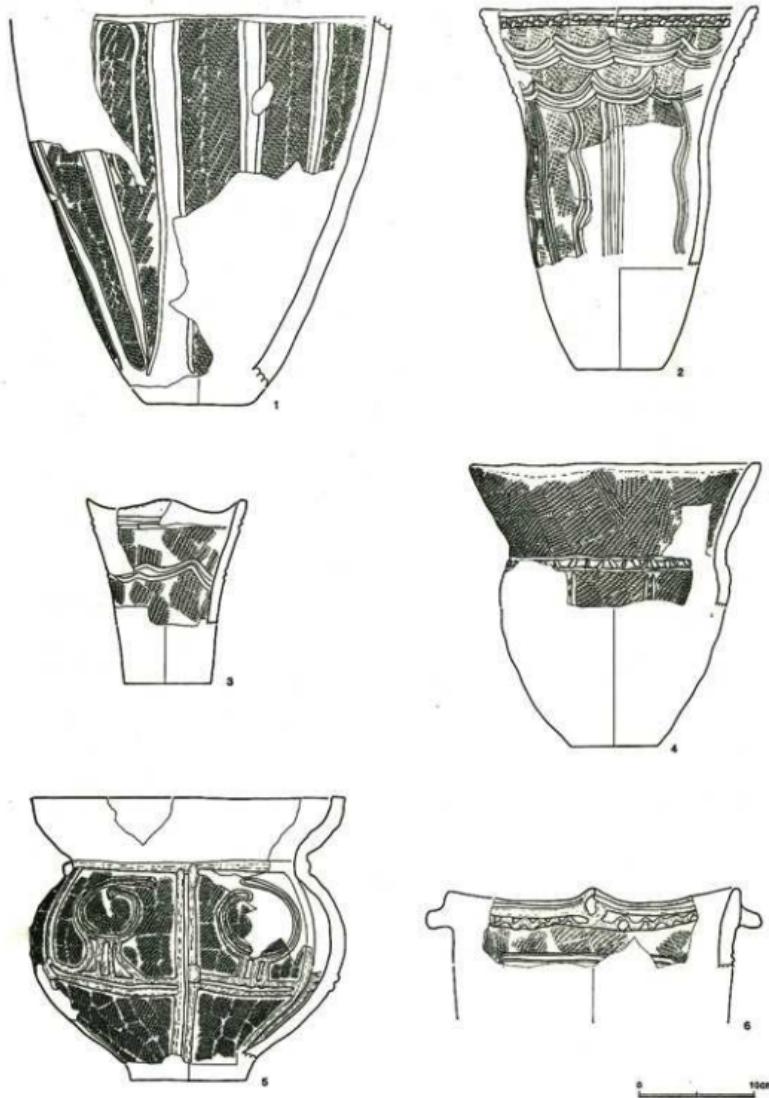
12～13は無文口縁部である。13は内傾し、断面三角形の微隆起線が廻る。

第64図18～20は胴部破片である。18は幅の狭い懸垂文が施される。20は蛇行する懸垂文内が磨消されている。19は断面カマボコ形の隆帯が蛇行して貼付されている。地文は18が粗い燃糸R、19が燃糸Rの縦回転施文、20が縄文R Lの縦回転施文である。

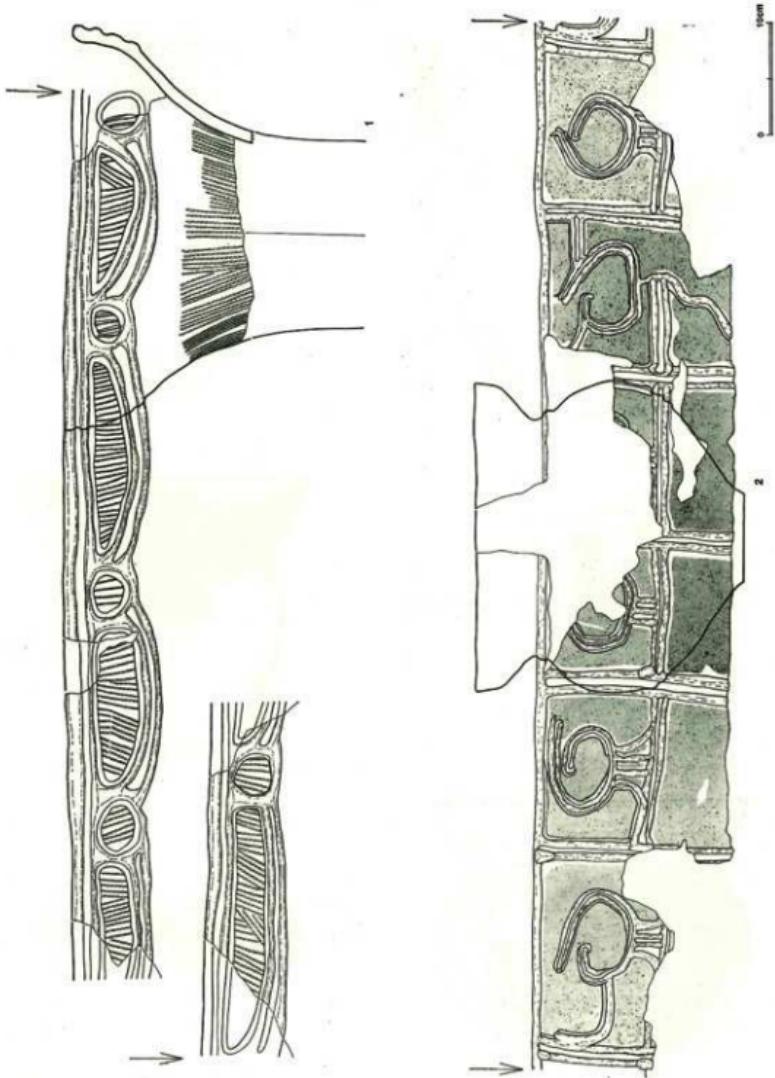


0 10cm

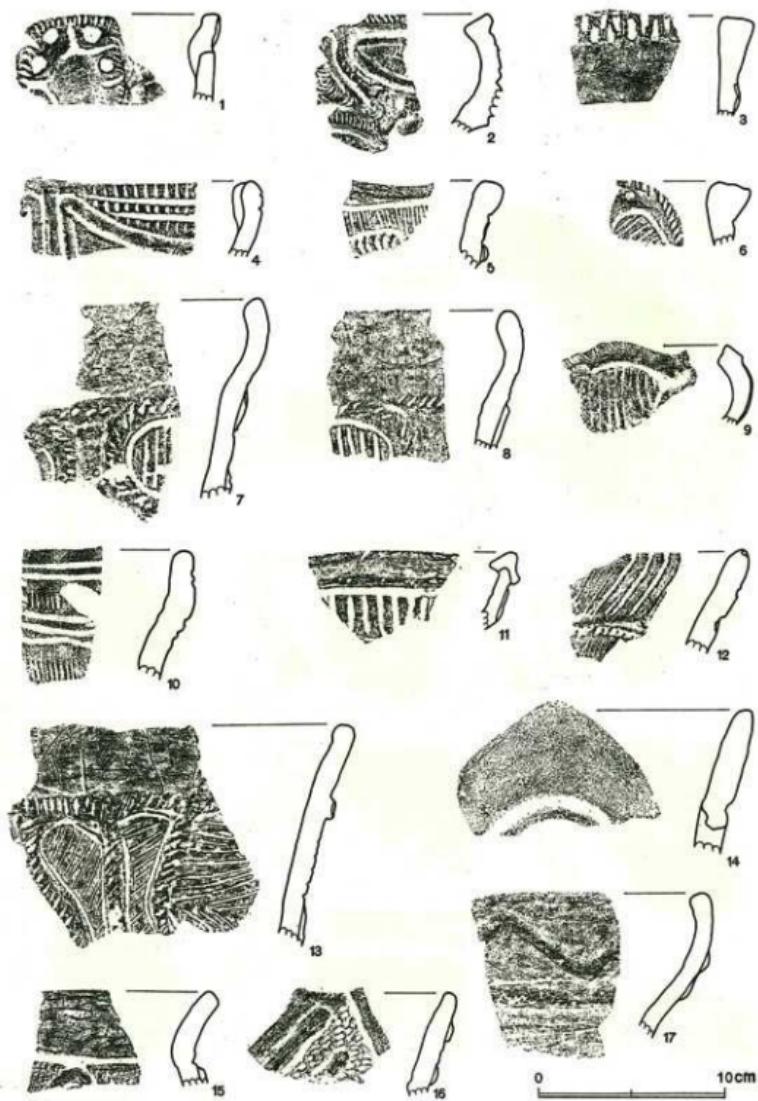
第55圖 第13號住居跡出土土器（1）



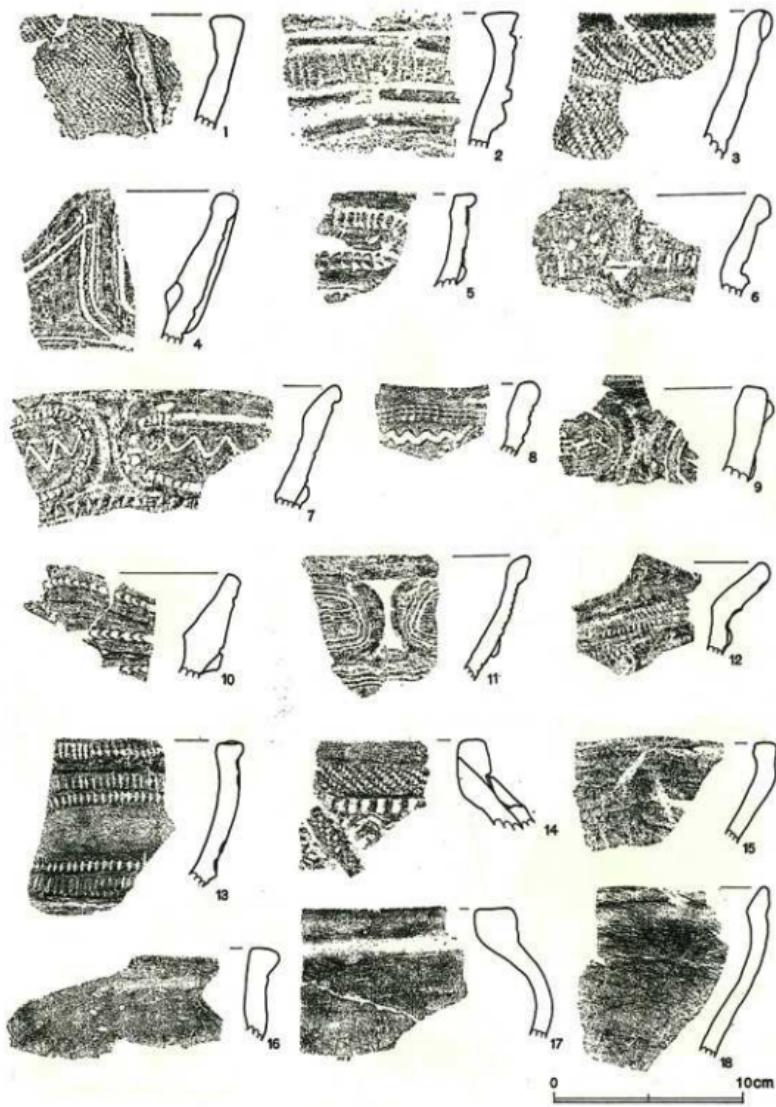
第56圖 第13号住居跡出土土器（2）



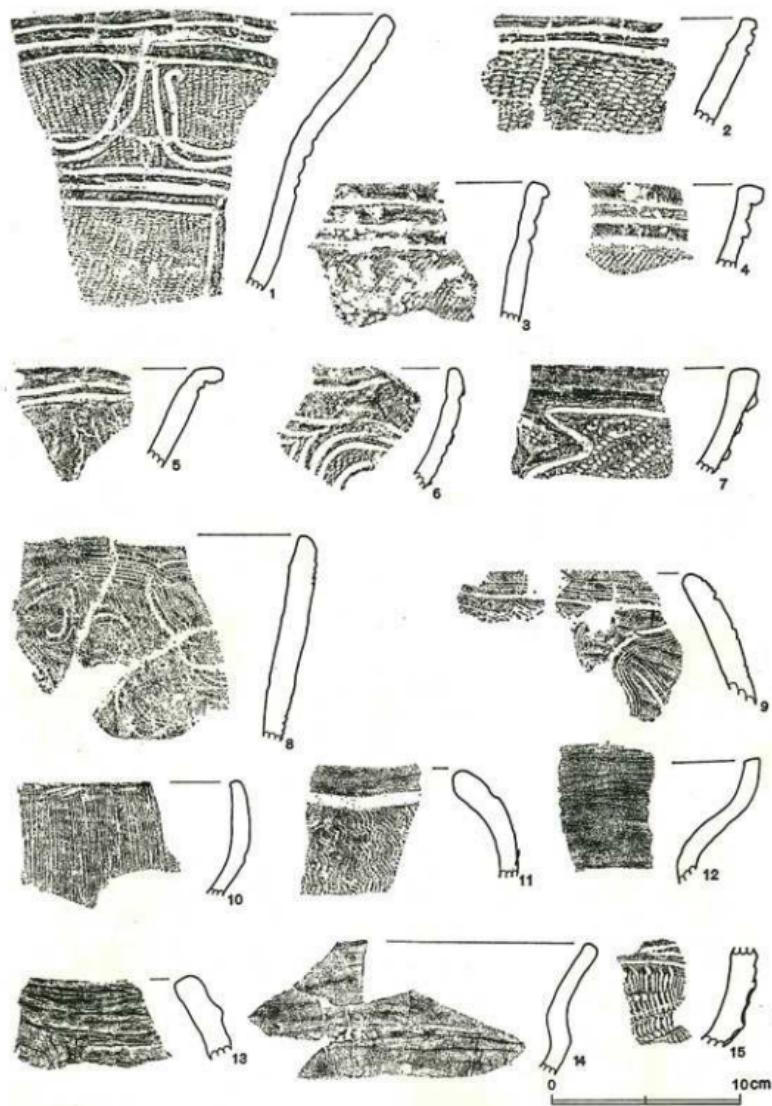
第57図 第13号住居跡出土土器（3）



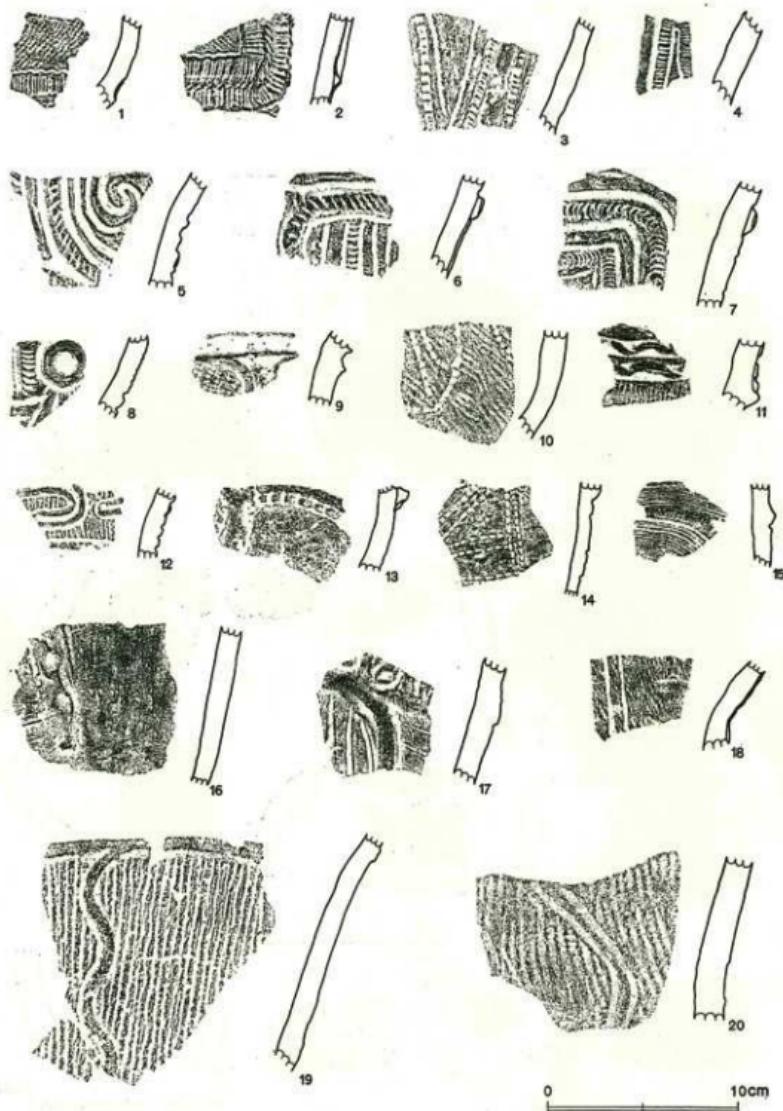
第58圖 第13號住居跡出土土器 (4)



第59图 第13号住居跡出土土器 (5)



第60圖 第13号住居跡出土土器（6）



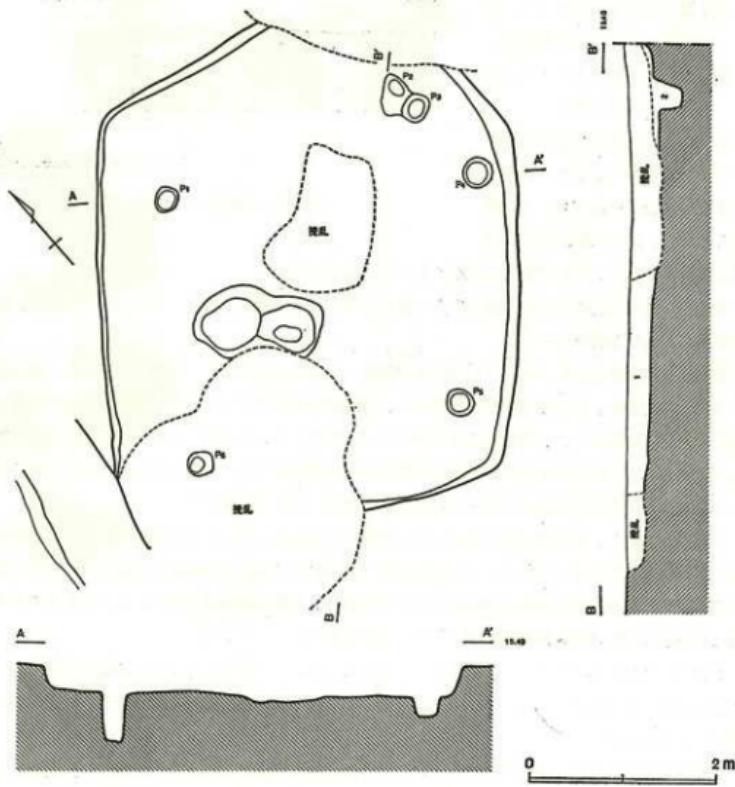
第61圖 第13号住居跡出土土器（7）

第14号住居跡（第62～65図）

第2次調査区G～H-3～4 グリッドに位置する。東、西壁、床面の一部に擾乱を受けている。西壁の一部は第4号溝に切られており立ち上がりは判明してしなかった。遺構は西壁で三角形状に膨り出し五角形プランを呈するものと思われるが、遺構確認時に西側では擾乱が顕著で明確な形状ではない。長径6.6m前後、短径5.4mを呈するものと推定される。床面のロームはしまりがなくブロック状となり全体にフカフカした状態を呈していた。確認された覆土は、焼土粒子、ローム粒子を少量含む暗褐色土1層のみであった。

柱穴はP₁～P₆が確認された。P₂、P₃は重複しており、P₆は擾乱を受け下面のみが検出された。床面からの深さはP₁=38cm、P₂=14cm、P₃=31cm、P₄=29cm、P₅=36cmを測る。

炉跡は中央部から北壁寄りに位置しており、東西に重複して構築されている（第65図）。



第62図 第14号住居跡

炉1は炉2に切られており、炉1、炉2ともに土器窯であるが西側は擾乱を受け土器半周が失われている。プランは長径1.4m×短径0.75m前後を呈するものと思われる。覆土は4層からなる。

第1層 暗赤褐色土・焼土、炭化物粒子を含む。

第2層 暗褐色土・1層より焼土粒子を多く含む。

第3層 赤褐色土・焼土粒、ロームブロックを含む。

第4層 暗黄褐色土・ローム粒子を多く含む。

床面からの深さは炉1で12cm、炉2で30cmを測る。炉2には土器内側に焼けたロームブロックが堆積していた。遺物は器形復元し得る土器は4個体で、特に炉跡周辺に集中して出土している。

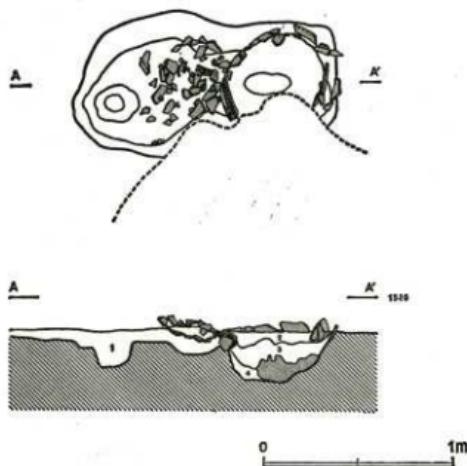
覆土内からの資料は極めて散漫な出土状態で、特に擾乱が覆土下部にまで及んでいるため、出土層位の確認も成し得なかった。

第66図1は炉跡2に用いられた土器である。約半周が擾乱によって失われている。器形はキャリバー状を呈し、口縁部文様帶の幅が狭く、頸部無文帶は消失している。口縁部文様帶は偏平な隆帯で長方形に区画され、隆帯部分は丁寧にナデられている。区画内には幅の広い沈線が隆帯に沿って施文される。胴部は直線と蛇行する懸垂文が交互に描き出され、沈線内は磨消されている。地文はR Lの原体を縱回転施文している。推定口径36cm、現存高40cmを測る。

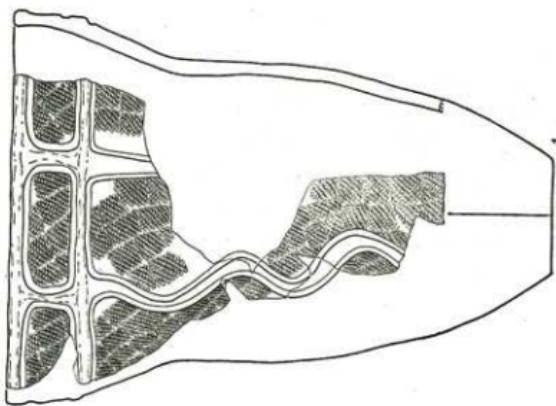
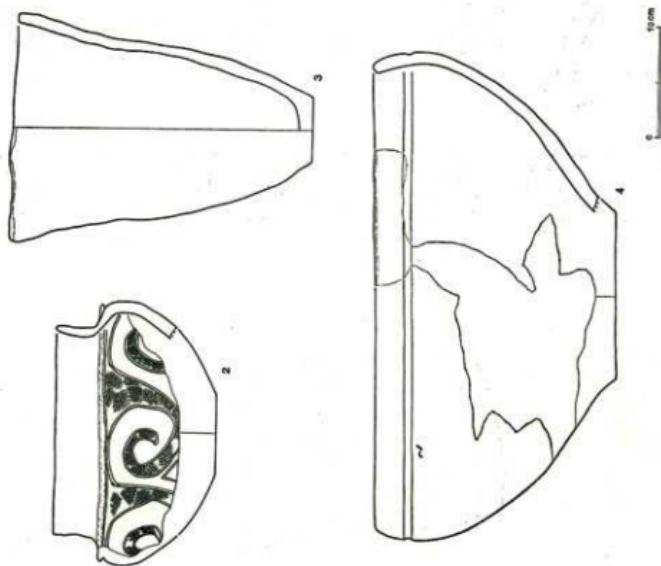
2は壺形を呈し、口縁は外反気味に立ち、肩部に最大径をもつ。無文の口縁下に隆帯が貼付され隆帯下に沈線が廻らされている。文様は幅の狭い沈線による渦巻文が連続して施文され、空白部には上向きに波状の沈線文が加えられるものと思われる。沈線は幅が狭く鋭い。地文はR Lの充填繩文である。口径18.6cm、最大径23cm、現存高13cmを測る。

3は炉跡1に用いられた。底部から直線的に立ち、上半部で弱くくびれる。口唇は凹凸をもつが端部は丁寧にナデされている。器面には粗い縱方向のナデが施されるのみである。口径21cm、器高16.5cmを測る。

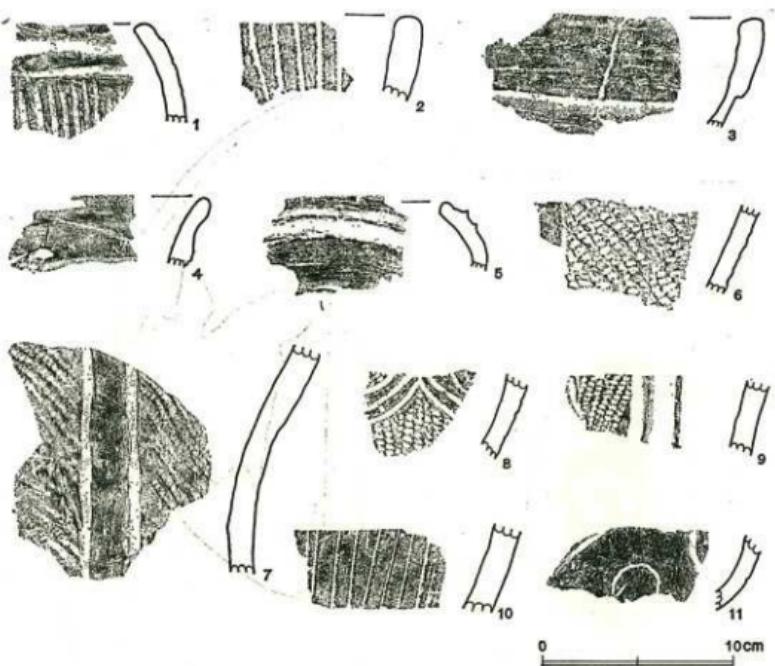
4は炉1に用いられた土器である。口唇下に沈線が廻る浅鉢形土器で底部から湾曲気味に立ち上り、胴中位で内湾気味となる。内外面ともに丁寧にナデされており、口唇は平坦面をもつ。胴下半に弱いくびれをもつ。推定口径43cm、現存高21cmを測る。



第63図 第14号住居 炉跡

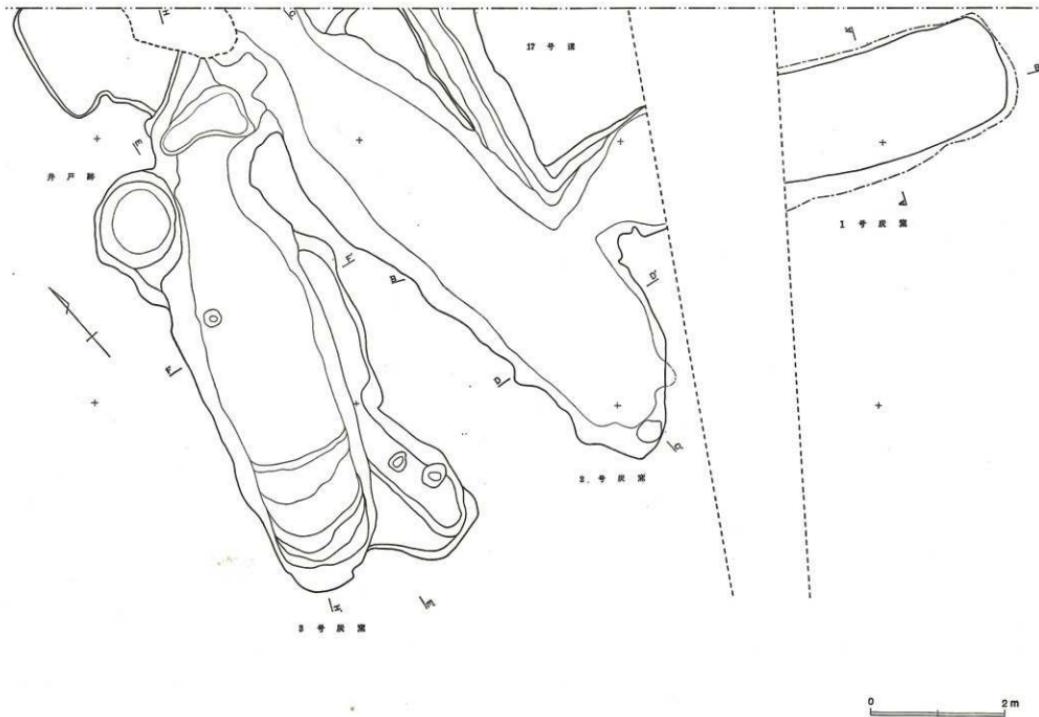


第64圖 第14號住居跡出土土器（1）



第65図 第14号住居跡出土土器（2）

第65図に拓影を示した。1はキャリバー形土器口縁部で口唇下に2条の沈線が廻らされ、区画内には綫沈線で充填されている。2は口唇から綫沈線が施されている。3は粘土板が貼付され二重口縁を呈する。無文である。4は外反する無文口唇部である。5は壺形を呈するものと思われ、2本の鋭い棱をもつ微隆起線が廻り、それに沿って丁寧にナデられている。6、7、9は磨消が加えられる胴部破片である。6、7がLR、9はRLの繩文である。8は連弧文系土器で3本沈線で文様描出され、沈線内は磨消されている。地文は繩文LRである。10は綫沈線のみ、11は無文で曲線的な沈線文が施文されている。



第66図 第1~3号点